
リール&シザーズ

斉河 燈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リール&シザーズ

【Nコード】

N6592H

【作者名】

斉河 燈

【あらすじ】

想いが通じたその日、大切な人を亡くした捺南。それから一年が過ぎようとしていた夏、クラスメイトに連れられてとある『協会』に関わることに。国家権力の届かないその場所で、彼女は凄惨な事件に遭遇し――。複雑に絡みあう過去と現在。目に見える世界を疑ったとき、真実は色鮮やかに蘇る。（サイトからの移設版）

ブローグ

空は清澄――。

毎日のように頭上を覆っていた積乱雲は今日に限って姿を消し、盛夏の太陽のみが我が物顔で輝いていた。空を覆うのは、ただ一面のブルー。瑠璃が群青か、それは深く濃く、そして泣き出したくなるほど鮮やかだった。

日本においてこの色が象徴するのは、希望であつたり永遠であつたり、平和、安息であつたりするらしい。それはつい最近、彼に借りた本の中で知ったこと。

香月 いづみき 捺南 なつな、当時の私は十四歳。

高校受験を控えた夏休みの、真っ直中にいた。

初夏の爽やかな空気は薄れ、屋外は踏み出すことを躊躇わせるほどの熱気に包まれている。太陽暦に照らし合わせれば立秋はほど近いのに、暑さの限りは未だ見えない。

じつとりと肌にまとわりつく汗を拭いもせず、爪先上がりのゆるい坂道を進む。降り注ぐ悲鳴のような蝉時雨のなか、なだらかな右カーブに差し掛かると、前方で白い建物がゆらゆらと陽炎に揺れていた。

ああ、着いてしまった。心臓が、内側から大きく胸を叩く。

自宅を飛び出してからここに至るまでの道筋は、思い出そうとしても難しい。それほど急いで駆けつけてきたくせに、目的地を前にすると不安が膨れ上がって潰されそうで、すぐにも逃げ出したい気分になる。

予定が変わった、すぐに病院へ来てほしい——そう電話越しに告げられたのはほんの数十分前のこと。私は全てを聞き終える前に終話ボタンを押し、財布と携帯電話だけを手に自宅を飛び出した。予定、それは前日に家族四人で話し合って決めたもので、向かいの家に住む幼なじみのお兄ちゃんの入院先へ、お見舞いに行く時間帯をさす。つまり彼に何かあったのだと、直感的に思ったからだ。

ようやくロビーに辿り着くと、人混みの向こうで父が手を振っていた。そうして、私はおよそ十二時間ぶりに彼らとの再会を果たしたのだった。

「捺南ちゃん、もう佑の思い通りにさせてやろうと思う」
たすく

別世界のように白い病室。その空間は私の目に、酷くくすんだ状態で映し出されていた。まるで空気全体が薄墨を含んでいるかのよう

に。
立ち尽くす私の肩にそつと触れる、沖永のおじさまの無骨な手。それがじつとりと湿っているのは暑さによるものではなく、直前に拭った涙のせいなのだ——悲しいことに私はきちんとわかって

いた。
「最期のお別れをしてやってほしい」

近所で挨拶を交わすときとは違い、明らかに沈みきった声音。普段のおじさまとはまるで別人のようだ。

おじさまだけではない。居合わせたものはひとり残らずそろって別人の顔をしていた。おばさまも、父も母も弟も……私だっけとそう

だ。
しかし最も変わり果ててしまったのは誰の目から見ても佑お兄ちゃんその人で、幾本もの管で四角い機械と繋がれている様は、別人

というより別物といったほうがしっくりくる。そしてそれは末端までを含め、全てが彼の命そのものなのだった。

「このまま治療を続けても、佑は回復しない。脳死状態なんだよ」

脳死——まさか。

彼の寝顔は五日前からなにひとつ変わっていない。少し幅の広い唇も、鋭角に伸びる近代的な輪郭も、長さのあるまつ毛も、全て。もう目を覚まさないと言われても、事実として認められるはずはなかった。

「嘘だ」

その時まで私はずっと、『死』は目に見えて『生』と一線を描いたものだと思っていた。

がつくりと息絶え、心臓が止まり血液の循環が止まり、体が冷たくなる。まるきり生者とは別物になる。

少なくともメディアで見かける『死』はそんなふうには『生』の領域から明らかに逸脱し、壁を越えたあちら側にあるものだった。まさか、生と死の境界線がこれほど太く曖昧なものだったなんて思いもしなかった。ましてや、こうして誰かの手によって線引きされるようなものだとは。

「捺南ちゃん、もう佑は」

「いや！」

彼の掌に頬を押し付けると、自分と同じ規則的な脈を感じた。心臓はちゃんと動いている。生きているのだ。なのにどうして皆、死と決めつけるのだろうか。

「おにいちゃん、目を覚ましてよ、お願い」

彼の体を揺さぶった瞬間、焦った様子で駆け寄って来た父が私を羽交い締めにした。「はなして!」「落ち着くんだ、捺南」落ち着いてなどいられるものか。

「おにいちゃん!」

好きだった。

この先もずっと側にいられるのだと信じていた。

物心がついたときから斜向いの家に住んでいた、三つ年上の彼の名は、おきながたすく沖永佑。

私達は幼い頃から毎日ように家を行き来し傍らで過ごし、実の兄妹のように『お兄ちゃん』『捺南』と呼びあう仲だった。

お兄ちゃんは秀麗な容姿とすらりとした長身のせいか、とても人目をひくタイプだった。バレンタインの日は家の前に女の子がうようよいたし、休日に押し掛けてくる輩も珍しくはなかった。

私はその様子を見るにつけ、自分のほうがずっと彼のことを知っているのに、と誰かに訴えたい衝動に駆られた。いや、恐らく私がそれを本当に訴えたい対象はお兄ちゃん自身だったのだと思う。

毎日接していたから身近すぎて気付けなかったのか、恋心をはっきりと自覚したのは中学に進学してからだったのだけれど。

『捺南、ちよつと今から会えないかな』

突然の誘いを受けたのは、五日前の朝だった。

慌ただしく出勤していく父と母を見送り、弟を叩き起こしてカブトムシの世話をさせた直後のこと。朝食にと用意されていた半熟の目玉焼きを、箸でつかんだときだった。携帯電話からオルゴール音

『星に願いを』が聞こえて、私は背筋を伸ばした。お兄ちゃん専用の着信メロディだったからだ。

今からお邪魔してもいいかな、と言う彼に、私から行く、と告げて通話を終える。まだ寝起きのボサボサ頭だし、Ｔシャツに短パン。こんな姿ではとても対面できない。夏休みに入って約一週間、すっかり油断しきっていた。

慌ててワンピースに着替え転げるようにポーチの階段を下ると、彼はすでに門の外で待ちかまえていた。

「捺南」

淡く穏やかな声。炎天下なのに涼しい顔をして、彼は微笑む。そして、唐突に切り出したのだ。

「将来、僕と一緒にしてもらえないかな」

あまりに驚いて、とっさには言葉が出て来なかった。いつしよになる、って……。

すると彼は焦ったように言い直した。

「突然ごめん。でもどうしても、今、言っておきたくて。僕は捺南のことが好きだったよ。小さい頃からずっと」

照れた様子はなく、それはとても潔い告白だった。お兄ちゃんらしいといえば、らしい。彼はいつだって、歳の割に落ち着いていてちよつとやそつとのことでは取り乱したりなどしなかったからだ。対して私の心臓は、内側から体を突き破ってしまいそうになっていた。

お兄ちゃんが、私を好き。私を。本当に？

「捺南は僕のこと、どう思ってる？ 単なる幼なじみ？」
「うん！」

慌てて否定しながら、

「わ、私も。私も、お兄ちゃんのことを……好き」

やつのことで答えを絞り出すと、彼は泣き出しそうな顔で笑った。

「良かった」

男性と呼ぶにはまだ細い腕が、私の体を抱き寄せる。予想以上にその胸が温かくて、涙が滲んだ。

「ずっと一緒にいよう、捺南」

「ずっと？」

「そう。死ぬまでずっと」

「うん……」

幸せな、一瞬の、ひとひらの記憶。

直後夏期講習を受けに高校へと向かった彼は、駅前で乗用車と衝突し現在の状態に陥ったのだ。

それから五日、揺るぎなく信じていた彼の生は今、まさに終わりを迎えようとしている。

「佑の願いを叶えてあげよう、捺南ちゃん」

嫌だ。離れたくない。ずっと一緒にいようって誓ったばかりなのに。

まだ、伝えたいことがいっぱいあった。たった一度、抱き締めあっただけでさよならなんて。

「いやだあつ……！」

床の上に伏せて泣きわめく私を、父と母が交互に抱き締めてくれる。いつも頼りないと思っていた弟が、突然ぎゅうつと握ってくれた右手。

やけに数字が大きく表示された時計が、廊下の壁でコチコチと時を刻んでいた。先へ、先へと急ぐ音。決して戻りはしない、まるで死へのカウントダウンのような――。

耳障りなそれをかき消すように、私はますます大声を上げて泣いた。

それからだ。

私の周囲で、異変が起き始めたのは。

あれから十ヶ月。

火葬場で見送った夏は、思い返したくもない苦い記憶を呼び覚ますように、じわじわと忍び足で姿を現そうとしていた。

私はお兄ちゃんが在籍していた近所の公立高校へ進学し、制服も環境も変わり、身長も少しだけ伸びた。学業はそこそこ、友達も数人、平凡だけれど傍から見れば順調な学生生活——しかし心はまだ過去という隔壁の中にあった。

彼の後を追おうとか、閉じこもってひとりきりになろうとか、ふらりと家出をするとか、思い付く限りの親不孝は最初の半年でし尽くした。

一周忌を迎えようとしている今、この期に及んで同じようなことを繰り返すつもりはない。けれどそれは、過去を過去として受け入れられたから、というわけではなかった。

後悔に吞まれ未だに眠れない夜がある。何故、あのとき彼の死を止められなかったのかと。

私を苛むのは、単純に罪の意識と呼べるものではない。あれは彼の望みでもあったからだ。

お兄ちゃんはドナーカードを持っていた。脳死と判定された場合に、自分の臓器を希望者に提供するという意思表示のカードだ。つまり沖永のおじさまたちは他ならぬ息子の意思に添うため、脳死を死として受け入れる決意をしたのだった。

俗に言う植物状態のままでもいい、生かして欲しい、と泣いて縋ったりもした。けれど生命の維持を司る脳幹の機能までもが失われ

た以上、自発呼吸も難しく、数時間経てば心停止に至る、それが脳死なのだと父の口から聞かされ、最後は閉口せざるを得なかった。

医師たちは六時間を置いて二度の脳死判定を下した。その時が、彼の死亡時刻となった。八月一日、午後三時二十五分のことだった。

彼が事故に遭ってからの一週間。あれほど長い時間を、私は他に知らない。

「おい、香月^{こうつき}」

聞いているのか、と目の前の少年がレモンティー色の髪をかきあげる。はっと我に返った私は、ごまかすように苦笑いをした。

そうだ、今は感傷に浸っている場合じゃない。

「う、ごめん」

淡いピンク色のスーツをまとった女性が、テーブルの上に細長いグラスを置く。アイスコーヒーだ。「どうぞ」

正面に座っていた長髪の男性が、それをコースターごと自分のほうへ引き寄せながら口を開いた。

「君はオプシンというタンパク質を知っているかね」

カラリ、四角い氷が涼しげな音を立てる。私は液体の表面を見つめながらかぶりをふった。蛍光灯がそこに三本映り込んでいる。これが茶柱だったなら、幾分愉快的な気持ちも味わえただろうに。

ファッション雑誌『メンズ・ゼロ』の編集部で理屈っぽい話を聞くこと二時間。流石に退屈の限界だ。

「それは網膜の錐体に存在し、色を捉える役割を担っているものだよ、明智くん」

明智ではない。ちなみに小五郎でもなければ光秀でもない。第一、シャレとしては古すぎる。

「オプシンには、赤だけ、青だけ、緑だけに反応する三種類がある。ここまでの理解はいいかね」
「はあ」

いつそ結論から話してもらえないだろうか。私の感情を察知してか、少年が舌打ちをしながら「いいかげんにしろよ」と文句をつけた。

彼の名は小泉厨こいずみしゅう、通称シュウ。私をここに連れてきた張本人だ。

「なんだ、編集長に逆らう気か。亀の甲より年の功だと言うだろう。有難い説教は手を合わせて聞きなさい」

「知るかボケ、足の甲のほうがよっぽど役に立つ。おまえを蹴り飛ばすのにな。さあ、とっとと本題に入りやがれ」

鉛筆のような細長いビルの二十一階。オフィスに併設された商談室で、重苦しいため息をひとつ。またひとつ。恐らくこれは何かの勧誘なのだ。

事態の発端は、時を半日ほど遡る。ちょうどお昼休みになったばかりの学校裏庭、私は『とある依頼』を受けてそこに立っていた。

「野口先輩、二年C組の渡部夏美さんから伝言です。えーと」

手帳を捲りながら、淡々とメッセージを読み上げる。

「『好きです、付き合ってください。放課後、下駄箱の前で待ってます』だそうですね」

「ほ、本当に？」

「はい。私、頼まれたことをそのまま伝えるだけなので」

「う、うわ、ありがとう！」

先輩は歓喜の声を上げて、小踊りをしながら去って行った。

そう、依頼というのは告白の代行のことだ。よりによって私は恋のキューピッド役を日課としている。もちろん自ら希望して始めたわけではない。

それでも今まで続けているのは、単純にやめるにやめられないからで、それ以上でもそれ以下でもなかったりする。

発端は、友達の頼みを断りきれずにやむなくしたことだった。それが実り、次も実り、さらにその次も、と成功が続き、いつの間にか私の前には、実績というものが積み上がっていた。

ねずみ講かと思うほど、噂が広まるのは早かった。

誰かに手を貸せば、また別の誰かに乞われる。よくある構図だ。そうして次へ次へと伝えられて行く中で、乞う側の言い分ばかりが正当化されていくのだ。

—— あいつがしてもらったことをなぜ自分にはしてもらえないのか。あいつが良くて、どうして自分は駄目なのか、と。

最初から明確な基準もなければ選り好みをした覚えもない。となれば、断る理由などありはしない。しないのだから、断れば落ち度が発生するのはこちらのほうだった。

こうして善意は当然となり、やがては義務となったのだ。

けれど—— 今のところ、私が請け負った告白は百パーセントの成就率を誇る。本人としても気持ち悪いくらいだ。

「完了……と」

まだ高い位置にある太陽が、じりじりと照りつけてくる。暑い。ポケットからレモンイエローのシュシュを引っ張り出し、長い髪を高い位置でひとつに結わえた。今日の依頼は一件、これでひとまず自由の身だ。そうして教室に引き返した時だった。

学校一派手な男子生徒―― シュウが唐突に声を掛けてきたのは。

「今日の放課後、暇？」

彼と言葉を交わすのは、正真正銘これが初めてのこと。

「何か予定でもあんの？」

「な、ないけど」

「じゃあ一緒に来て欲しいところがあるんだけど」

この言葉に、私が返事をすることはなかった。クラスメイトが―― 斉にどよめき、それどころではなくなってしまったからだ。

「シュウがついに告白依頼をするぞ！」

そう言っただけで教室を飛び出して行く者もいた。悲しそうに凍り付いている女子も数名、しかし悲しいかな、私とシュウの仲を疑う人間はいなかった。

シュウはゴールドに近い髪色が難なく似合う西洋風の面立ちをしている。さらに一九十センチ近い長身を支える長い足と、どこで鍛えたのか逆三角形のたくましい胸板。要するに近づく者の勇気を削ぐほど、見事すぎる風采なのだ。

対して私はよくいる平均点女子だった。

ストレートの黒髪に、派手でも地味でもない顔立ち。身長だって一六十センチと中背だし、致命的なのはAカップの貧乳だ。飾り気

もないし、取り繕う気もない。唯一の取り柄が縁結び、それだけのつまらないオンナノコだ。

私のような者からすればシュウは別世界の人間で、こちらからは声を掛け難い。

学校は週の半分ほどしか顔を見せないし、休み時間は机に突っ伏して眠っている彼だから、タイミングがないとも言えるけれど。

多忙な理由は彼のアルバイトにある。シュウはその外見を活かし、ファッション雑誌『メンズ・ゼロ』のモデルを務めているのだ。

「行くぜ、ほら」

放課後になると、シュウは私のバッグを軽々と持ち上げて肩に担いだ。

「え、でも」

まだ掃除が終わっていない。

そう言った時、すでにシュウは教室を出ていた。よほど切羽詰まった恋をしているに違いない。すぐに告白しなければ相手がいなくなってしまうとか。

でも、そうだとしたら休み時間中に打ち明けてくれても良かったのに、わざわざ場所を変えるだなんて、誰かに聞かれたらまずいということなのだろうか。

まさか—— 不倫。ああどうしよう、面倒なことに巻き込まれたら。

だから地下鉄のホームにたどり着いたとき、私はすでに及び腰だった。やっぱり用事を思い出した、とでも言って引き返すべきだろうか。怒鳴られるだろうか。

「おまえ、可視か？」

電車に乗り込むと、シュウはぼそりとそう聞いた。

「カシ？ どういう意味」

「わからないならいい。じゃあ、リールの力はいつから使い始めた？」

「りーる……？」

父が趣味で集めている釣り竿を思い出して首を傾げる。

「使ったことなんてないけど」

リール……りーる。何のことだろう。どこかで聞いたことがあるような気もする。でも、どこでだっただろう？ はつきりとは思いつけない。

ひとつめの駅。目の前の席がふたつ空き、私とシュウは並んで腰を下ろした。乗り込んできたサラリーマンが、ぎよっとした顔でシュウを凝視する。目立つのだろう。

「まさか、気付かずに使ってたのか」

けれどシュウのほうが、輪をかけて驚いた様子だった。

「そんなはずない。触ったこともないよ」

「あれだけ正確に仕事をこなしてるのに、か」

「仕事なんてしてないってば」

「なににせよ、そろそろガタが来てるぜ」

「え？」

「このままだと体を壊す、つってんの」

シュウは腕組みをすると、「半蔵門で起こして」とだけ言っ
てしまった。ちよっぴりホツとしながらバッグを胸に抱き締める。
今なら逃げられる。いや、逃げるならもう今しかない。

しかし正直、少しだけ興味があつた。シュウがどんな女性に惹か
れているのかと。

彼は美形だけれど、単純に容貌が麗しいだけではない。気怠そう
な動作の中に艶みみたいなものが垣間見えるのだ。うまく説明出来な
いけれどとにかく見ているものはつとさせるような、類いまれな
魅力だった。

にもかかわらず、私は彼への告白を代行したことがない。それど
ころか、シュウに彼女がいるとかいう話も聞かないのだ。片思いを
している女子——に限らず熟女や男子も——は多いと思う。な
のに、誰も告白をしようとは思わない。

青田買いにしてはだいぶ育った後だと思っけれど、ギリギリ、今
なら間に合う気もするの……変な話だ。

「あ、着いたよ。シュウ、着いたよ!」

窓越しに駅名が見えて、私は慌てて立ち上がった。半蔵門だ。

「あ? ……何ページ?」

「授業中じゃないよ。着いたってば、駅」

やっと好奇の視線から逃れられたと思ったのも束の間、ぬるい風
をくぐりながら舞い戻った地上でも、やはりシュウは注目の的だっ
た。

「こつちだ」

口を動かすのも億劫と感ずるほどの気温だったので、私はそのま

ま彼の後ろを黙々と歩いた。

するとよくあるオフィス街を二百メートルほど進んだところで、それは前方に見えてきた。空にニョッキリと突き出し、天に刺さらんばかりの高層ビルは、削ったばかりの鉛筆みたいだった。

シユウは慣れた様子で建物の中へと進んで行く。ビクビクしながら後にとくと、室内にはクーラーが効いていて、体中の汗が一気に引っ込んだ。寒いくらいだ。

すると十メートルほど先に、近代的なゲートがあった。空港にあるものと似ている。シユウはその右側に親指をかざしながら進み、別の通路から私を招き入れてくれた。

「なに、ここ……」

マンションにしては大きすぎる。オフィスだとしたらあまりにもセキュリティが堅固すぎて気味が悪い。

「香月に紹介したい人がいる」

「え？」

「編集部に」

つまりここは雑誌社の自社ビルらしい。

エレベーターを降りるとすぐ、『メンズ・ゼロ』と書かれたプレートが視界に飛び込んできた。デスクがずらりと並んだフロアのほぼ中心、それは天井からぶらりと下がっている。

『メンズ・ゼロ』というのは十代後半から二十代前半の男性をターゲットとした、やたらと分厚いファッション雑誌だ。内容はというと国内のアップル情報のみならず海外のハイブランドの新作まで取り扱っているため、本格志向の男性に好まれているらしい――とは、学校で小耳に挟んだ情報。

シユウも学校ではズボンの裾をだらしく引きずっているくせに、

誌面ではタイトなスーツをびしっと着こなしていたりして、まるで別人のようなのだ。

「よお、加賀見」

シユウは一番奥に配置されたデスクへそう呼び掛ける。大量の書類だか本だかが積み重ねられていて、そこに人がいるのかいないのかは判断がつかない。

「患者を連れてきたぜ。会議室開けるよ」

患者、とはまさか私のことだろうか。

問いただそうとしてシユウの袖口をつかんだとき、ばさばさと紙がめくれるような音がした。すると次の瞬間、奥のデスク上にあつたものが雪崩を起こし始めたのだ。

そうして邪魔な遮蔽物が残らず消え去ったとき、姿を現したのはひとりの男性だった。

彼は無駄にひらひらした装飾付きのブラウスに白いストレートパンツという格好で、優雅に薔薇柄の扇子を動かし、足を組んでワークチェアにゆったりと身を預けている。チョコレート色の髪は艶のあるストレートで肩につくほど長く、私の頭には何故か『ブルジョア』という単語が浮かんだ。

「ご苦労。で、どんな子？」

「こいつ。クラスメイトの香月捺南」

シユウの親指が肩越しに私を示す。やはりそうだ。

その男―― 加賀見さんは大股でずんずん近付いてきた。

「冗談だろう、女は嫌だと何度も言っただじゃないか！」

三十代の中ほどに見える。シユウほどではないけれど、それなりに整った顔立ちだ。

「そりゃ、てめエの趣味の問題だろ」

「当たり前だ。女は好かん。私はおまえのような若々しい少年が大好物なのだ」

「勘弁してくれ。言っておくけど香月の腕は確かだ。なんなら今すぐ栞さんと結びつけてやろうか」

「それこそ勘弁してくれ。巨乳は嫌いだ」

「だったらとつとこいつを治すよう、協会に取り合えよ」

口を半開きにして聞いていると、私の背後から甲高い声が響いた。

「編集長、あの有様、どうしたんですか！」

振り返ると、ちょうど目の高さに見事な小山がふたつあった。とんでもない巨乳だ。一メートルはある。

「先週社長に『片付けなければデスクごと捨てる』って言われたばかりですよ！ お借りした資料、ちっとも返却しないからこういうことになるんです」

「最近は延滞金が無料とかいうじゃないか」

「ポストレンタルじゃありませんから」

あっけにとられていた私に、シユウがこそつと耳打ちをする。

「彼女は滝口栞、二十五歳のライターだ。で、そっちのジジイが、

『メンズ・ゼロ』編集長の加賀見、歳は知らねえけど多分アラフォー

で、ここの社の取締役の息子だ。ちなみに栞さんはジジイに絶賛

片思い中」

「へ、へえ……」

尚も続くマシンガンの撃ち合いのとき言い争いに圧倒され、私は何故自分がここにいるのかという疑問を打ち明けることが出来なかった。ゆえに、気付けば商談室で彼らと向き合って座っていたのだった。

そして、冒頭の会話に至ったというわけだ。
タンパク質がどうの、色がどうの、と。

「君は可視か」

加賀見さんはロドプシンだかオプシンだかについて熱弁を振るつた直後、シュウと全く同じことを尋ねた。

「リールのことはどこまで知っている。答えろ」

まるで尋問だ。うろたえた私を庇うように、シュウが「全く知らねえらしい」とフォローを入れた。

「しかも不可視だ」

「それで、リールはどこまで使えている？」

「百発百中。イチローもビビるぜ」

「信じ難いな。それならどうして協会がここまで放っておいたんだ」

—— リール、可視、使う。一体何のことだろう。業界の専門用語だろうか。だとしたら私なんていなくてもかまわないだろうに。そうは思ったけれど、やはり口を挟む余地はない。

窓の外に視線を投げた。他のビルの屋上が見える。人間の頭が小数点のように思えた。

ああ、そうかもしれない。人の命なんて所詮限りなくゼロに近いのだ。だからあっけなく消えてしまうのだろう。

そのまま目線を上げる。瞬間、あの日の空が脳裏に蘇った。

深いコバルトブルーに、眩しいほど鮮やかな一筋のオフホワイト。風に流されながら、最後は拡散して消えてしまった。あれが彼の一部だなんて、思えなかった。

どれくらいの時間、ぼうつとしていたのだろう。ふとテーブルの上を見ると、アイスコーヒーは見事なグラデーションカラーの液体へと変貌を遂げていた。

「……あの、私、もう帰ります」

これ以上ここに留まっではいけない、と思った。

私はこの流されやすい性格のせいで今まで充分損をしてきた。告白代行も、わざわざここまで赴いたことも、物質的に言えばここに来るまでの電車賃だってそうだ。この辺で自重しておかないと大変なことになる。

「遅くなるとお母さんが心配するし。ごめんね」

「待てよ、オレは香月のために」

「私、本当にどこも悪くないよ。大丈夫だから」

軽く一礼をして部屋を出ようとすると、入り口近くに立っていた菜さんが、ドアを押し開いてくれた。その時だった。

「……思い出した。君はあの時の少女だな」

加賀見さんは椅子の背もたれに寄り掛かり、薔薇柄の扇子をパタ

りと畳む。私は足を止め、振り返りながら眉をひそめた。

「沖永佑はどうした。彼はなかなか私好みだったと記憶しているが」
空耳だろうか。どうしてこの人が、お兄ちゃんの名前を？」

「しかし君ももう限界だろう。すぐにでも倒れるぞ」

目を細めながら、彼は再びぱちんと扇子を開く。その音と共に、非常に高い耳鳴りを聞いた。

思わず眉間に皺を寄せる。と次に、足の感覚がないことに気付いた。

えっ。

引力に逆らえず、床に吸い込まれるように前のめりで傾く。ドツと音を立ててその場に膝をつく、慌てて駆け寄ってきたシュウが私を支えてくれた。

「香月、大丈夫か」

大丈夫か、だいじょうぶか、ダイジョウブかだいじょ——
|。

耳の奥で音が反響している。ぼやけた視界の向こうに、心配そうな表情。平気だよ、だからもう帰る。そう言いたいのに、唇が痺れて動かない。

どうして。アイスコーヒーに何かが入っていた？ いや、口を付けた覚えはない。

ああ、もう、だめ。頭の芯が重い。抗えず瞼を降ろしながら、その裏に思い描くのはやはり佑お兄ちゃんの面影だった。

『いつか捺南に、特別に見せたいものがあるんだ』

それは、彼の口癖。

なにを、と尋ねても返事はいつも同じだった。

『何だと思う？　これが何なのか、僕にも分からないんだ』

淋しそうに細められた瞳。正体不明のそれについて、彼が語ることはほとんどなかった。彼亡き後、残されたのは曖昧な記憶だけ。結局私は今も答えを知らないままだ。

お兄ちゃんは私に、何を見せたかったのだろう。

「おいシュウ、協会の施設に空きがあるそうだ。この子はそのまま入院させよう」

「ああ、わかってる」

「編集長、屋上にへりをスタンバイさせましょうか」

「頼む。それと、彼女の家族にも連絡を。三年前のファイルに連絡先が残っているはずだ」

微かに拾った会話は、まるで外国語のようで。聞こえているのに、わからない……。

私の意識は飲み込まれるように、とろりと内側の闇に溶けた。

2・ストリング

例えば真四角の部屋の中、お兄ちゃんはその隅で、対角を眺めるように斜めを向いて立っているような人だった。

簡単に言えば、彼の背後は単なる真つ平らな壁ではなかったということだ。角を斜めに塞いでいるのだから、そこには幾ばくかの空間が存在する。そして彼はその空間に、私では窺い知れぬ何かを隠し持っていた。

彼ほどミステリアスで常人離れた人間を、私は他に知らない。

例を挙げるなら――彼は計算が異常に速かった。理解度も高かったのだと思う。小学五年生の頃、リーマン予想がどうの、と話していたのを耳にしたことがある。それが元で神童などと呼ばれ、メディアが取材にやってくることもあったし、事実、研究施設からもお呼びがかかっていた。

『絶対音感』も彼の特殊な能力の筆頭と言える。いっぺんに鳴らした複数の音を正確に言い当てることが出来たし、一度聞いただけの曲をすらすらと演奏してしまうこともあった。記憶力も優れていたのだろう。にもかかわらずお兄ちゃんに音楽や数学を好んでいる様子はなくて、むしろ絵画のほうに没頭していたようだった。

あれは確かお兄ちゃんが中学三年生のころ。私は小学校六年生でふらりと沖永邸を訪問した日のことだった。

彼はおじさまと共に、リビングで木枠に布地を張る作業をしていた。

「何をしてるの？」

「カンバスを作ってるんだよ。これに絵を描くんだ」

「へえ。でもこういうの、大竹でも売ってたよ」

大竹、というのは小学校に隣接した小さな文房具店だ。駄菓子や漫画本も売っていて、その頃は百貨店よりも魅力的な店舗だと思っていた。新しい消しゴムが入荷した日には、こぞって買いに走ったものだ。

「そう。市販のやつのほうがピシッと張ってあるし、便利なんだけどなあ。今時わざわざ自分で組み立てるなんてさあ」

おじさまは苦々しい顔でお兄ちゃんをちらと見る。彼はもくもくと木杵の端に布地を留めていく。

「これこの通り、我が家の世継ぎは頑固でね」

「父さん、宇宙の始まりは弦だった、なんて言うだろ。それによると、僕達の住む三次元空間は一枚の膜として考えられるらしいんだ。膜を作り出すところから世界の構築が始まるんだよ」

「弦？」

「そう。スーパー・ストリング・セオリー、超ひも理論っていうらしい。物質の究極の要素は、粒子でなくひもなんだってさ」

「ひもって……あの、ひも？」

「そう。とてつもなく小さいけどね。閉じたものや開いたものがあるって、それらは皆、震動しているんだ。閉じたひもだけは膜からはなれることが出来るらしいんだけど」

弦。前日テレビのニュースで見たハープの映像を思い浮かべたけれど、それと宇宙とはどうしたって一直線には繋がらない。私はとりあえず、物質はすべてひもで出来ているのだ、とだけ思うことにした。

お兄ちゃんはいよいよ、こんなふうに訳の分からない理屈や理論を並べ、滔々と雄弁をふるった。それは大抵、部屋に積み上げられている難しい書物から得た知識らしく、おじさまも舌を巻いてしま

うほどだった。

「ねえお兄ちゃん、今度、私を描いて」

出来上がったカンバスを前に、私は心躍らせながら自分の顔を指差した。

これまで、彼が手がけた作品は国内外を問わずコンテストにおいて優秀な成績を収めている。初期のピカソにタッチが似ている、なんて評価が新聞に載っていたこともあって、その繊細な筆遣いと緻密なデッサン、そして類い稀なる色彩感覚には美術の先生も文句のつけようがないと嘆いていた。

ピカソといえば今時小学生でも知っている。『ゲルニカ』を教科書で見た時は衝撃を受けたものだった。だから私は、お兄ちゃんがあんなふうに爆発した作風になつてしまふ前に自分を描いてもらわなければと少し焦つてもいたのだ。

「捺南を表現するのは世界一難しいよ」

ソファに腰を据えたお兄ちゃんは、困り顔でティーカップを口元に運ぶ。おばさまがいれてくれる紅茶にはいつも輪切りのレモンが浮かんでいて、匂いを吸い込むだけで口の中が酸っぱくなった。我が家のお茶といえば弔事の度に頂く煎茶が定番だったので、金縁のティーカップに注がれた香り立つ液体は、お菓子よりも高級な嗜好品のように感じられたものだった。

「えー、どうして」

「どうしてって、変わるからだよ。捺南はいつも同じじゃないだろ」「それはお兄ちゃんだってそうでしょ」

テレビの横に掛けられている、彼の自画像を指し示す。それは一

年ほど前に彼が油絵の具で描いたもので、うまく言い表せないけれどちょっと不思議な色彩が特徴的だった。

県の展覧会では見事最優秀賞に輝き、その時の審査員はこぞって彼を「ゴーギャンの再来だ」と評した。当のお兄ちゃんはというと『塗り方がのつぺりしてるってことじゃないかな』などと他人事のように言って笑っていたけれど。

その言葉の通り、私が覚えている限り彼は一貫して自分の功績を鼻にかけるような真似はしなかった。もしかしたら興味が無かったのかもしれない。後付けの評価など、他人の解釈などどうでもいいようだった。

表現すること、表現を追求することこそが、彼にとって重要な意味を持っていたのだと私は思う。

「同じじゃないよ。捺南はもっと……変化が劇的なんだよ」

「そんなことないもん」

お兄ちゃんが珍しく渋るので、私はむっとしてしまった。

その頃の私は両親や祖父母、そして彼に甘やかされて育ったお陰か、奔放でやんちゃな性格だった。いや、内弁慶だったのだ。家族にも愛されている実感があつたし、彼にも大切にされていた。多少の我が侬を言ったところで、自分が見捨てられるはずはないと信じていたのだ。

「捺南には別のものを用意するから、もう少しだけ待ってもらえないかな」

「別？」

「うん。捺南にだけ特別に見せたいものがあるんだ」

その日の出来事は、比較的明瞭に覚えている。申し分けなさそうに頭を撫でてくれた、彼の掌の感触も。なぜならそのあと、私の体

には本当に劇的な変化が起こったからだ。

自宅に戻って、お風呂に入ろうとした時に気付いた。下着に付着した血液に。初潮だった。

恥ずかしくて父と弟の顔が見られなかった。食卓にいてもうつむいていたから、母が炊いてくれた赤飯の味も、自分じゃない誰かが咀嚼しているようで、味なんて感じられなかった。

そして私はその日を境に、あまりお兄ちゃんの家へは行かなくなっただ。

正確に言えば、行けなくなったのだ。自分が彼と違う生き物なのだということがはつきりとわかってしまったから。誰よりも彼のことを知っているなんて、愚かな思い込みだったのだと気付いてしまったから。

私は女だった。お兄ちゃんとは違う生き物だった。

その事実を認めようとすると、あの優しい微笑みが遠ざかっていくような錯覚を覚えて怖かった。引き止めたくて、けれど方法なんて知らなくて、考えれば考えるほど胸の奥がぎゅっと狭まって苦しくて。

毎日、訳も分からぬままため息ばかりを教科書に挟んでいたあの頃。

「ん……」

眠い。

霧中を彷徨っているような、不安定な平衡感覚。ベッドの上でどうにか体を起こすと、背中がシーツにへばりついて糸を引いているのかと思うような怠さだった。

「え」

目を擦りながら、室内を見渡してそれきり絶句した。見覚えのないインテリアが並ぶ、四角い空間。壁紙は真っ白で、木の幹のような細かい模様が刻まれている。

自分の部屋ではない。もちろん保健室でも友達の家でもない。恐る恐る立ち上がり、格子がはめ込まれた窓の向こうを眺めると、眼下には見渡す限りの深い森が広がっていた。

どっ、どっ。

3・リール協会

現在時刻／七時五十分

現在地／不明

頭を両手で抱え、かろうじてベッドの端に腰を下ろす。朝の日差しは窓から斜めにベッドへと向かい、格子の形をくつきりと落としていた。当たり前のことだけれど、もう一度そこへ横になろうという気は起きない。

……どうしてこんなことになってしまったのだろう。

昨日の夕方までの記憶ならある。

放課後、シュウに連れられて『メンズ・ゼロ』の編集部を訪れた。そこで胡散臭いフリルブラウスの男と巨乳のライターに会って、部屋を出ようとしたところまでは覚えている。バッグがない。ということは当然、携帯電話もない。

部屋から出てみようか。いや、けれどもし誘拐されたのだとしたら、むやみに動かないほうがいいに決まっている。見つければ連れ戻されるだろうし、最悪、二度と逃げ出せないよう酷い目に遭わされるかもしれない。

想像すればするほど腰が引ける。

そんな気弱な私の横を、数十分という無駄な時間が通り過ぎていった。

「おや、目が覚めたか」

ドアから顔だけを出っ込んだ状態でそう尋ねたのは、ブルジョワ編集長——加賀見さんだった。驚きのあまり肩が跳ね上がる。すると彼の背後をすり抜けるようにして焦った様子の巨乳ライター・滝口さんが姿を現した。

この人たちがここににいるということはつまり、私を攫ったのは彼らということか。

「ごめんなさいね、何の説明もなく突然入院させちゃって。驚いたでしょう」

「にゅ、入院？」

「ええ。あなたは協会の施設に入ったのよ」

施設？ キョウカイとは一体どういうことだろう。

入院するなら病院と相場が決まっているはずだ。いや、今はそんなことを疑問に思うより先に、言すべき台詞がある。

「あなたたち、何なんですか。私、悪いところなんてないです」

健康診断なら高校入学と同時に受けている。結果、健康そのものだった。虫歯以外は。

「い、家に帰して下さい」

なんとかそこまで言い切ると、見覚えのある少年が室内に姿を見せた。彼はポケットに手をつっ込んだまま、飄々とした態度で部屋を突っ切る。

「シュウ！」

安堵してしまった。クラス内にいたら見知らぬ人も同然の彼なのに、この状況では身近に感じてしまうから不思議だ。

シュウは窓枠に軽く腰掛ける。

「ここは某県のとある樹海内にある、リール協会日本支部の施設。

俺達はその会員。治療が済むまでおまえは家には帰せない」

「じゅ、樹海って――」

いや、そうじゃない。

「協会って、治療ってなに」

「ちなみにおまえの荷物は編集部に忘れた。以上」

「そんな、それじゃ何も」

わからない。それどころかますます混乱しただけだ。困り果てた私の横に、滝口さんがそつと腰を下ろす。

「大丈夫、悪いようにはしないわ。安心して」

簡単に言わないでほしい。

すると首だけを覗かせていた加賀見さんがようやく室内に入って来、後ろ手にドアを閉めた。彼は大きな瞳でやはりじろじろと私を観察している。これで安心しろと言われてもどだい無理な話だ。

「君は『みかん』と言われてどんな色を想像するかね。いや、りんごでもレモンでもいい。思い浮かべてみたまえ」

加賀見さんは胸元のフリルを指先で弄りながら、唐突に問う。咄嗟には答えが出せなかった。

「個人差はあるが、それは往々にして実物より鮮やかな色みであると言う。そこには心理的な効果が働いているからだな」

「編集長、またそこから始めるんですか……」

「黙っていたまえ滝口くん、何事にも前置きは必要なのだよ」

窓辺で苦々しい顔になったシユウは、耳の穴に小指を突っ込んだ。

「私は色ほど面白い現象はないと常々思っている。環境や個人によって全く異なるうえに、時には脳を騙したりもするからな。例えば負の残像というのを君は知っているかね」

なめらかな口調で得意げに言うので、思わず「はい」と答えてしまった。

まずい。黙っていれば良かった。後悔の念が頭をもたげた瞬間、加賀見さんはふむと満足そうに頷いた。

「言ってみたまえ」促され、恐る恐る口を開く。

「あ、えつと……ある色をじつと見つめてから視点を移すと、そこに補色の残像が現れる、とかつて」

まるきりお兄ちゃんの受け売りだ。他の人の話ならすぐに忘れてしまっただろうが、他ならぬお兄ちゃんが教えてくれたことだからきちんと記憶していた。

加賀見さんは目を丸くしたあと、愉快そうに口角を上げた。

「ああ。君はなかなか話が通じるな。残像についてはかのゲーテも『色彩論』の中に自らの体験を記している。これほど有名な事象を知らないなどという輩とは、交流する気もおきないからな。ではそもそも色とは何か？ 我々がそれを感知する過程としてはまず、網膜の中にある三種の錐体が興奮して光を受容し—— ああ、これは昨日話したか」

どうやら彼の機嫌を損ねはしなかったようだ。密かに胸を撫で下ろす。

「さて残像というのは、網膜の水平細胞から大脳皮質の視覚野までに至る過程での、興奮と抑制的作用により引き起こされている現象らしい」

てめえの話は長いんだよ、とシユウが怠そうにぼやいた。加賀見さんは腕組みをして咳払いをひとつ零す。

「その少年と違って君には説明が不要かもしれないな。では次へ移るとしよう」

私は大きく頷いた。きつと、この話の先に知るべき答えがあるのだろう。

と、彼はズボンのポケットから手帳らしきものを取り出してこちらに差し出す。

「これはどう見えるかね？」

広げられたページには、雑誌の切り抜きらしき十センチ四方の紙切れが一枚挟み込まれていた。手帳自体は真っ白だ。予定らしきものは書かれていない。

切り抜きには、黒く塗りつぶされた四角が縦六つ横六つ、規則正しく並んでいる。それらを、碁盤の目のように白い直線が隔てている。直線が交わる箇所に、ちらちらと黒い斑点のようなものが見え隠れする。

「これ……」

見覚えがある。

「錯視、ですね」

「そうだ。これはハーマングリッドと呼ばれるもので、白の格子部分に実際にはないはずの影が見えるのだよ」

「ジジイ、急イ」

「うるさいぞガキ。この場合、隙間に影が見えるのは黒と白の色の境目に縁辺対比が起こっているからなのだが」

「ジジイ、腹減った」

「だまれガキうるさい。えー、あー、……貴様っ、何を話しているか分からなくなったではないか！」

「そりゃ老人性のなんたらだろ。ほら、とっとと締めくくれよ、この色彩ヲタク」

「おまえの所為で締めくくれぬのだ阿呆めッ！」

加賀見さんは語気を荒げたあと咳払いをひとつ吐き出して、シュウに背を向けた。

「不本意ながら結論へ移行しよう。要するに私達は目と脳の合成作用でモノを認識しているのだな。外的・内面的要因が働き、『真実を真実として映さない』ことが当然の作用だったりもする」

頷くと、視線が追いつかずくらしとした。

「君は、今認識している世界が、目に飛び込んでくる以前の世界と同じだ、と自信を持って言えるか」

認識している世界が、目に飛び込む以前と同じ？

それは―― 違う。違って当然だ。目に飛び込んだ時点では正しくても、認識するまでに間違いは起こりうる。間違い、とすることすら間違えているのかもしれないとさえ思う。

残像も、ハーミングリッドにおいて現れる影も、私の脳がそう見せているだけで実際には存在しないものだ。

いや、『ある』のか『ない』のかという境界がそもそもとても淡く曖昧なものなのだというのを、私は知っていたはずだ。

脈打つ生命を死と呼んだあとき、彼の肉体からは確かに消失したものがあつた。視覚では捉えられない、けれどだれもがそれと知っているような、とても重要な何かが。

やけに陽の光が眩しい気がして、目を細める。視界にチカチカまたたく粒が映り込み、両の側頭部がキュウツと痛んだ。

「香月さん？」

異変に気付いた滝口さんが、私の背に触れる。

「す、みません」

駄目だ。油断したらどこへ連れて行かれるかわからない。ひどい目に遭うかもしれない。

ああ、なのに何故こんなにも気分が悪いのだろう。そうだ。同じようなことをお兄ちゃんの口から聞いたから。だから思い出してしまふ。引き戻されてしまふ。あのころの自分に。

『特別に見せたいものがあるんだ』

私は、それをこの目で確かめたかった。お兄ちゃんが見せてくれると言ったから。私だけに見せてくれると言ったから。

見たかった。みたかったのに。

そして、私は再び思い出に手を引かれ深淵へと飲み込まれていった。

4・はつこい

「人間にとつての可視光線はただか三百八十ナノメートルから七百八十ナノメートルまでの、ごくわずかな部分でしかないらしいんだ」

「カシコウセン？」

「そう。目に入って色の感覚を引き起こす電磁波のことだよ。短いほうから堇藍青緑黄橙赤になつてゐるんだ。ちなみにナノメートルは十億分の一メートルの長さのこと」

「えっ、そんなに小さいの？」

「うん」

つまり僕らには目に見えないもののほうが多いんじゃないのかな、と零した彼は悟りきつたというより諦めたみたいだった。また、自分に言い聞かせているようでもあつたし、ともすれば世を憂いているようにも見えた。

そしてそれは決してサン＝テグジュペリが言うところの目に見えないもの、という意味ではなかった。

お兄ちゃんはそのをもっと具体的に把握していて—— いや、把握するための答えをずっと追い求めていたように思う。これは、単なる憶測に過ぎないけれど。

「可視領域は生き物によつて異なるんだ。ミツバチのそれは短波長側に寄つていて、ヒトには見えない紫外線を見ることが出来るらしい。彼らにとつて白い花は鮮やかな青緑色に感じられるんだってさ」
「ふうん。蜜を集めるのに便利つてこと？」

「花粉の状態を見極めるためだとかつていう説もあるよ」

初潮を迎えてから約一年、気楽に遊びに行けなくなったとは言え、斜向いに住む私達はそれでも普通の兄弟よりずっと仲が良くて、関係は良好だった。

「何故ヒトにとって、この領域が可視なんだろう。捺南はそれを疑問に思わない？」

お兄ちゃんは自分だけの価値観を持っていた。それは誰かに干渉されたり簡単に変化したりするようなものではなかったから、私は彼のそんな性格にとっても高潔な印象を抱いていた。

「よくわかんないや。でも、面白いね」

「そうかな。どうやってたら捺南にもうまく伝えられるだろう、って試行錯誤してはいるんだけどね。まだ完成は遠いなあ」

「何か作ってるの？」

「うん、捺南に見せたいものがあるって前に言っただろ」

「え、まだ作ってる最中なの？ 腐っちゃわない？ ケーキとか、生ものじゃないね、それ」

「捺南らしい発想だね。でも、残念ながらハズレ。パソコンの中に入ってるから腐るものじゃないよ」

お兄ちゃんは複雑そうに口の端で笑う。

彼は高校に、私は中学に、それぞれ入学したばかりの頃のこと。

この日私達は駅前で出会って帰路を共にしていた。特に待ち合わせているわけではなかったけれど、何故か毎日のように改札をくぐったところで出くわす。

桜の花がすっかり終わり、柔らかな日差しと輝くような新緑の季節だった。

高校生になった彼は細身の体ながら肩幅もしっかりしてきて、以前にも増して私の知らないことを沢山話してくれた。私はそんな彼

の変化を目の当たりにするたび、胸の奥がざわざわした。

「そうだ、これからうちにおいで。確かケーキもあったと思う。母さんも最近はずっとも捺南が遊びに来てくれないって嘆いてるし」

「え、あ、うん」

「それとも今度にする？ 宿題があるならみてあげようか。ひとりのほうが集中できるかな」

「ううん、そんなこと」

嫌だなんてことはない。むしろ嬉しい。なのに何故か躊躇してしまふ。ずっと見つめていたいの、見つめ返されると耐えきれず背を向けたくなる。私はまだ、このとまどいの意味を知らなかった。

「じゃあ決まりだ」

その日、数ヶ月ぶりに沖永家の門をくぐった。上がり端は懐かしい香りに包まれていて、鼻の奥がツンとした。おばさまのレモンテイの匂いだ。

そうしてスリッパに足を入れたときだった。廊下を先に行っていたお兄ちゃんが階段の前で険しい顔をして立ち止まったのは。その目は嫌悪のような色に満たされ、じっとリビングの方角を凝視している。

「捺南、先に僕の部屋まで上がってもらえるかな」

「えっ」

「急いで」

ただならぬ雰囲気を感じ、彼の横をすり抜けて階段を駆け上った。リビングには、おばさまとスーツ姿の男がひとり、向かい合せて椅子に座っている。視界の隅で流すように捉え、見なかったふりを

した。何故だかとても緊張した。

二階に上がり彼の部屋のドアノブに手を掛けたところで、突如階下から怒声が昇ってきた。

「何度言ったら分かってもらえるんだ。僕達に違いなんてない！」

珍しく冷静さを欠いた彼の、取り乱した口調。私は手すりの間から下を覗き見た。階段と、キッチンの入り口にかけられたのれんだけが目に入る。角度的に、彼らの姿までは確認できなかった。

「我々はね、なにも君たちを引き離そうとしているわけじゃ」

「母さん、どうしてこんなやつを家に上げたんだ」

「ご、ごめんね佑、でもね」

「あんな結果、絶対に間違えてる。僕と捺南は同じだ。それを証明してみせる」

「時間がないんだよ、佑くん。リールに負担がかかれば、肉体にも影響が」

「そんなことを言って脅したって僕達は絶対に離れない。僕はこうして今も健康じゃないか。それがなによりの証拠だ！」

顔をしかめて聞き耳を立てる。温厚な彼がこれほど怒りをあらわにするなんてただ事ではない。危機感がまわりついてきて、足元から寒くなった。

「—— リールを……可視では……死ぬ——」

男性の声は先程よりもぐっとひそめられ、とぎれとぎれにしか拾えない。しかしその瞬間、私の恐怖はついにピークに達したのだった。

『死』、それは誰に対して投げられた言葉なのか。私はお兄ちゃ

んの部屋へ逃げ込み場を閉ざした。

そこは以前と変わらず、画材とパソコンの周辺機器で溢れ返っていた。綺麗とはいいい難いけれど、本人にとっては機能的な配置なのだと思う。

パソコンの前には厚みのある本が塔のように積み上げられていた。色とりどりの付箋が何枚も乱雑に飛び出している。ゲーテ、と書かれた本も何冊もあった。

「ごめん、遅くなって」

お兄ちゃんが部屋にやってきたのは数分後のこと。声の方向を振り返ろうとして、しかしそれはかなわなかった。

二本の腕が私を背中から包み込むようにして閉じ込めていたから。

「……捺南」

淡い色で囁かれて、目の景色がぐらりと歪んだ。不規則に乱れる鼓動。鼻につくお兄ちゃんの匂い。生々しい体温。

「お、お兄ちゃ」

どうしよう。

家族以外の異性に抱き締められるなんて、思い付く限りこれが初めての経験だった。

「僕達に違いなんてない。離れる必要なんてない。ないんだ……」

思い詰めたような、かばそく掠れた声。

違いがないと言われても、肯定なんて出来るはずもなかった。なぜなら私は女で彼は男だ。これほど明確な区別が、深い隔たりが他

にあるだろうか。

いや、もしかしたら彼は私を女として見ていないから、同じだなんて言えるのかも――。

「……ちがうよ。お兄ちゃんと私は、ちがう」

「そんなことない！ そんなこと、絶対に」

彼は否定の言葉を繰り返すことでしきりに焦燥を拭っているようだった。

「特別な人間なんて、この世にいるはずがない。そうだろう、捺南」

それを聞いた途端、私は弾けてしまった。

―― お兄ちゃんにとって、私は特別じゃなかったの？ 特別に見せたいものがあるって言うていたくせに。もう忘れたの？ それだけのことだったの？

彼の腕を振り払って、床の上に降ろしておいた鞆を雑に掴み、一目散に逃げ出す。「捺南！」呼び止める声。振り返らなかった。階段を駆け下り、ローファアをひっかけ、つんのめるようにして沖永邸を飛び出す。自宅まではたかが数メートルの距離なのに息が切れた。こらえた涙が喉の奥で詰まって、悲鳴のような呼吸音がせわしく漏れる。

ようやく辿り着いた自分の部屋には朱色の夕日が鋭角に射し込み、ベッドの上で波立つように光っていた。それ自体が発光しているのかと思うほど、眩しく鮮やかに。

そこまで耐えていた涙がようやく瞳から離れる刹那、液体の表面も同じ色の煌めきを放った。

思えば、恋に気付いたのはこの燃えるような赤を目撃した瞬間だ

つ
た。

5・病室

瞼を開くと、ぼんやりした視界にべっこう飴のような色が映り込んだ。数秒ぼうつと眺めた挙げ句、ようやくそれがシユウの髪なのだと気付いた。光を含み透けるそれはお兄ちゃんの黒髪とは明らかに別物で、褪せたわけではないだろうに、失われた色を思うと何故だか少し悲しかった。

お兄ちゃんの艶のある黒髪が懐かしい。もつとためらわずに触れておけば良かった。こんなふうに、思い出のなかでしか触れられない、遠いものになってしまいう前に。

やりきれなくてひとつ吐息する。と、シユウはベッド横の椅子に腰掛けて雑誌を捲りながら、視軸だけで私を捉えた。

「おう、大丈夫か。気分は？」

私はまたも気を失っていたらしい。

「ジジイと栞さんは、飯を食いに食堂に行ってる。もう戻ると思うけど」

「食堂？」

「ああ。ここは病室の他に食堂がついてて、そこに毎回集まって食うんだ。情報交換にもなるしな」

大あくびをしながら、ぱたんと雑誌を閉じる。最新号の『メンズ・ゼロ』、表紙はもちろん彼自身だ。

室内に私達以外の人間はいない、ということは正真正銘ふたりきりだ。クラスメイトが見たら何と言うだろう。今度こそ仲を疑われるだろうか。

見慣れない真っ白な空間の中、学ランの黒さが対比するように際立っていた。

―― そうだ。

あのとき、お兄ちゃんの家にはいた人達も黒いスーツを着ていたような気がする。リール、可視、という言葉も確かその時に初めて聞いたのだ。

「……ねえ、リールって何？　ここ、本当になんなの」

先程より幾分、体調はいいような気がする。徹夜の翌朝、仮眠をとったあとの感覚に少し似ていた。

ベッド脇の時計は九時七分を示している。奇妙な曲線が彫り込まれた、振り子付きの木製置き時計だ。アンティークだろうか、やけに重厚感がある。

「まだ言えねえ。聞いたところで、理解するまでにはそれなりの時間がかかると思うし。俺もしばらく混乱した覚えがあるから」

「……私、どうなっちゃうの。家には帰れるの」

「もちろん回復すれば帰れるさ。あまり警戒すんな、って言われても無理か。当然だよな。おまえ、可視じゃないもんね」

「だから可視って何なの、もうはつきり教えて」

焦りが増幅しきっていた私は、目の前でのにびりかまえている彼が少々憎らしく思えてきた。

「オレ、うまく説明できるかわかんねえけど」

「それでもいいから！」

情報は多いほうがいい。ここから自力で逃げ出すことも可能になるかもしれないからだ。

「うつん……じゃあさわりだけな。リールつつうのはつまり、人と人を繋ぐために必要不可欠なもの、だ」

「……は……？」

「ほら、現実離れしてて理解できねえだろ。ジジイの前置きは長えけど、あれはあれでところどころ必要なんだよなあ」

難しい顔で右頬をさすり、何やらじつと考え込むシュウ。私はふと、彼との初対面を思い起こし不思議な気持ちになった。

そう、あれは高校の入学式の日。

『ねえカヅキさん、知ってる？』

教室で最初に声をかけてきたのは前の席の女の子だった。

私の名字は香る月と書いてコウヅキという。読み方としては少々珍しいらしく、初対面で正しく呼ばれないことにはもう慣れている。彼女は落ち着かない様子でそわそわと、教室の右端の席を気にしていた。思わずそちらを振り向いてしまった私は名前を訂正するタイミングを逃してしまい、その後しばらく「カヅキちゃん」というあだ名で呼ばれる羽目になったのだけだ。

「あのひと、あの、本物の小泉厨なんだって」

彼女が示した先には、無然とした態度の男子がひとり。その明るい金髪はまっさきに人目を引くけれど、それだけが理由ならこれほど皆、魅入ったりはしないだろうと思う。彼の顔立ちが日本人離れして麗しく、秀でて見事だった。居心地悪そうに何度も組み直している両足も、すらりとして理想的な長さだ。

「……こいずみ、って誰」

「知らないの？ 有名読者なんだよ」
「ドクモ」

毒性のある水中植物だろうか。しかしそれが一体、彼とどんな関係にあるというのだろう。

まり藻のような生物を思い浮かべていると、彼女は呆れた様子で頬杖をついた。

「読者モデル、プロじゃなくてアマチュアのモデルさんのことだよ。メンスゼロっていう雑誌にね、ほとんど毎号登場してるんだ。あ、でもね、高校入学を機にちゃんとした契約をしたみたい」

「ふうん」

「カッコイイよね。私、同じクラスになれて良かったあ」

生徒の大半が彼女と同様に興奮していた。この程度のことですごくなんて、と呆れてしまった。

事態を一步引いて見ていたのは私と、他ならぬ本人—— シ
ユウだけだったように思う。

彼は周囲の熱狂ぶりを厭うようにまず翌日から五日間連続での欠席を決め込み、さらに週が明けて月曜日、大遅刻の末に早退という大技をやったのけ皆をあぜんとさせたのだった。理由はもちろん仕事だ。

そしりを招くかと思いきやクラスメイト達は意外にも寛大だった。それどころか凄いと立派だとか褒め讃える者までいて、私は仰天してしまった。

要するに皆、高校生になって浮かれている一般人とは違い、身を粉にして働く様に感心していたようなのだけれど……。

学生の本分は勉強だろうに、そう思っていたのは私だけではないはずだ。お兄ちゃんだって、きつと、そう言うに違いない。

確かにシユウは、忙しく働いている割に鞆の隅が破れていたりと、

ぼろぼろの合格お守りを未だにぶら下げていたり、「金がない」と昼食を抜いていたりしたから、好感を持つ人間が多いことには頷けたけれど。

そんな彼を、皆が『シユウ』と呼ぶのは何も親しいからではない。もちろん勝手に親近感を覚えたわけでも、図々しいからというわけでもない。ほとんど言葉を交わしたことのない私ですらそう呼ぶのには、ちよつとしたわけがある。

「次、小泉が朗読して」

英語の授業中、担当教師がそう言って彼を指名したことがあった。

「小泉？」

例のごとく居眠りの真っ最中だったシユウはさっぱり気付く気配がなかった。周囲の人間のほうがよほど肝を冷やしていたと思う。

「小泉、こいずみ、—— シユウ！」

「あ？」

「あ、じゃないだろう。何度も小泉と呼んだんだ。きちんと返事を」

「ああ、はい、……最近名字で呼ばれること、あんまなくて、忘れてました」

「自分の名字を忘れる奴がいるか！」

「すみません」

彼の『厨』という名は私の名字と同じで、読みにくく覚えにくい。それで、春先にメンスゼロと専属契約を交わした際『シユウ』という力タカナ表記の芸名、それも名字を取った名前だけを用いることになったようだった。

とはいえまだ数ヶ月という短い期間だし、それまでは『小泉厨』として活動していたわけだから、言い訳としては大いに苦しい。しかし彼はその言葉通り『小泉くん』と呼ばれたときには無反応であることが多かった。

——と、私が知っているシユウの情報なんてその程度のもので、他の女子のように「今日は登校してる、ラッキー」などという浮かれた感情は持てなかったし、単純に表せば「近寄り難い」のひとつとに尽きた。

だからまさかこんなことになるとは——。
すると、ぐう、違う場所から茶々が入った。慌てて腹部を押さえながら横目でチラとシユウを確認する。

「腹減ったな、オレも。夕べから何も食ってねえ」

やはり聞こえていたらしい。恥ずかしさで半笑いをした私に、同じく半笑いで右手を差し伸べてくれる。

「立てるか？ 食堂、行こうぜ」

うん、と答えて自力で立ち上がった。

まだ、彼のことも信用出来ないような気がした。

「あ、これ、鍵。ちゃんとかけておけよ。オートロックじゃねえから」

学ランの胸ポケットから取り出されたのは、アンティークじみた金色のキー。

鍵穴に差し込む部分は細い六角柱で、通常そこにあるはずの凹凸

は見受けられない。かわりに、ICチップに似た回路のようなものがひとつ埋め込まれていた。古きを演出しているくせに最新式だなんて、酷くちぐはぐだなと思った。

棒の反対側には漢字を型抜きにした透明のプレートが下がっている。明朝体の『白』という文字だ。キーホルダーなのだろうが、キーよりも遥かに大きくて妙にかさばる。

「個室、つてことは私以外にも患者がいるの？」

「ああ。先に二人が入院してて、今日、また新たに二人が加わる予定」

「そんなに……」

「リールは定期的に診ないと体に変調をきたすから」

やはり『リール協会』というのは危険と隣り合わせの組織なのか。そういえば父や母、弟は今頃どうしているだろう。いつまでたっても帰宅しない娘を気掛かりに思っているだろうか。警察に捜索願は出しただろうか。そこまで考えたところで、思わず嘲笑がこぼれた。

—— 深くは考えない、か。過去、あれだけ家出だの自殺未遂だのを繰り返した私のことなんて。

編集部で言ったことだつて口からでまかせだった。お母さんが心配するから、なんて。

そうして廊下に出た途端、今までとは明らかに趣の異なる空間に躍り出た。

植物の蔓や小鳥の模様が反転を繰り返しながら続く、具象柄の壁紙。それはオリーブグリーンを中心とした彩度の低い色調で、どこか蔽かな印象を見る者に与えていた。

柄の所々に施された金の縁取りが、大窓から射し込む光をきらきらと微細に反射させている。その輝きがこの上なく上品に見えるの

は、壁紙とは言え紙ではなく、丁寧に織り上げられた織物ゆえだ。

「なにこれ、凄い……」

思わずほつたと息が漏れた。この場所は廊下というよりむしろ回廊と言ったほうが相応しい。

身長は何倍もの高さのある天井は舟底をひっくり返したようなアーチ状で、やはり縁には金の細工が施されている。床には色とりどりの細かいタイルが敷き詰められ、丸い花のような形をいくつも描いていた。

まるで宮殿か博物館だ。見物料がとれる。

「これはあえて全部手作業で作らせたんだと。加賀見が偉そうに言ってたぜ。あいつ、ああ見えて日本支部の副会長だからな」

「副会長？」

「一応な。分かりやすい職権乱用だろ。しかも経費使いすぎ」

支部、ということは本部もあるのだろうか。

天井から廊下へと視線を落とすと、左右の壁に等間隔でドアが五つずつ並んでいるのが確認できた。つまりこの場には、部屋が十、存在しているのだ。

私の部屋のすぐ横の壁は大窓になっていて、その上には見事なステンドグラスがはめ込まれていた。思わず見上げてしまった。

薔薇の花だろうか、花弁は中央に向かうにつれ、赤紫から青への見事なグラデーションカラーになっている。それが太陽光を透過して、床にカラフルな模様を映し出していた。

ドアノブの鍵穴に、恐る恐るキーを差し込んでみる。回転させるべきだろうか。右に？ 左に？

まごついていると、ピツ、という短い電子音が聞こえ、ノブは固定され動かなくなった。施錠が完了したようだ。

振り返ると、前方の壁にかけられた額縁が目にとまった。白い画面を背景にして、大胆に泳ぐなめらかな黒い線描。画面、向かって左上には鱗ともざくろともとれる模様が密集して描かれている。あれは――。

シュウは、私の興味がどこに注がれているのか気付くと、ああ、と休めのポーズをとった。

「ビアズリーの『サロメ』か。あれも結構な美術品らしいぜ」

「サロメ……オスカー・ワイルドの本の挿絵ってことだね」

「ああ、そう。ジジイがそう言ってた。おまえ、よく知ってるな」

ではあの、膝を曲げている人物がサロメで、その手に掲げられているものがヨハナーンの首なのだろう。

「インテリアの大半はアールヌーボーを模倣してるんだと。リール協会の発足がそのころのヨーロッパだったとかで、伝統なんだ。ま、ここはジジイの趣味もあって、他の建築様式もごちゃまぜでやりすぎ感があるけどさ」

アールヌーボー――フランス語で『新しい芸術』の意だ。十九世紀末に花開いた装飾様式で、当時流行していたジャポニズムの影響を受け、植物などの流動的な曲線が多分に用いられているらしい。

私がそれを聞いたのは、やはりお兄ちゃんの口からだった。

しかし、くるとくると曲線を描くデザインはとも西洋的で、日本の影響を受けていると聞いても即納得、というわけにはいかなかった。日本といえば碁盤の目のような、直線的なイメージがあったからだ。そう、例えば、京都の町並みのような。

そう反論すると、彼は一例として枯山水の写真を示した。白い玉砂利の庭に描かれた、波のような模様を。しかしそれは非常に楚々

とした表現で、立体でありながら、まるで平面に置き換えることを前提として形作られたかのように思えた。

アールヌーボーに見られるどこか病的なまでの曲線とは、まるで別物だ。

日本の曲線は、枠の中にあつてこそ本来の美しさが発揮されるものなのかもしれない。枠とはつまり庭であり窓枠であり紙であり、大きく捉えるなら、この島国自体のことだ。

それは海を渡り彼方の地で根付いたのだろう。まるで種子であつたかのように、彼らはそうして芽吹き独自の進化を遂げた。

だから私は西洋風の曲線を目にすると、あるはずもない生命をそこに感じてしまう。

「俺達は曲線の中にとくとく、ようやく安心できるんだ」

そう言つて束の間、シユウは仔細ありげな表情を浮かべていた。

「……行こうぜ」

「あ、うん」

部屋番号を覚えておこうと、再びドアを振り返る。数字らしきものは確認できなかった。めばしいものと言えば、扉の左に直接埋め込まれた白いタイルくらいだ。

疑問に感じながら、視線を右に振る。

と、隣の部屋には鮮やかな緋色のそれがついていて、またその隣の部屋は艶を帯びた橙色だった。

なるほどこの施設では、番号の代わりに色で部屋を識別しているのだ。キーから下がる『白』のプレートの意味がようやくわかった。

「変わつてるよな。今時オートロックじゃねえなんて」

「何か理由でもあるの？」

「インキーが発生しないからなんだと。ジジイ、出先でよくやるんだよ。ま、これも職権乱用の一部だな」

「……部屋の中に鍵を置き忘れたまま鍵がかかったやう、ってやつ？」

「そう。部屋に鍵がかかっている状態を想像してみろよ。内側に人がいるか、もしくは外側に持ち出してある状態だろ」

そういうことか。

「だからスペアキーもない。特殊な鍵だからそう簡単に作れない、つてのもあるけど」

「なくしたらどうするの」

「そのときは電子制御を解除するんだ。ホストのコンピューターから。ちよつと時間はかかるけどな」

「ふうん」

「ちなみに色で部屋分けをしてるのは、ジジイが番号を覚えるのが面倒だかららしい。あいつ最悪だよな」

大理石の螺旋階段を下り始めると、背後でかちやりと小さな音が上がった。ドアの蝶番が軋む音だ。

振り返ると、橙色の部屋の扉が数センチほど開いていて、直後慌てたように勢い良く閉じたのだった。

—— 見られていた。

…… 気味が悪い。

自らの体を両手で匿うように抱き締めながら、私は階下へと急いだのだった。

6・患者、完全なる死

らせん階段をぼぼひとまわりくだったところで、一階の廊下に行き当たった。

二階と比べて随分と窮屈な印象を受けるのは、天井が上階よりもやや低く造られているからだろう。とはいえ一般的な住宅と比べたら充分すぎるほどで、空間の寸法は桁違いに大きい。

まずはじめに目を奪われたのは足下を埋め尽くす花の模様で、これは木を組み合わせて描かれたもののようなだった。タイルのような煌めきはないけれど、これはこれで美しい。

視線を上げて廊下を左右見渡すと、手前の壁面に金のプレートがあった。診察室、と流れるような文字で彫り込まれている。輝き方からして、まだ新しいのかもしれないと思う。そもそも屋敷自体、築かれてからさほど月日を経っていないような真新しさだけけれど。

しかし細部に至るまで趣向が凝らされたこの場所は、曲線に対して異常な執念を持って建てられたような、はつきり言ってしまうえば病的な印象を私に与えていた。

曲線の種類にもよるのかもしれない。

ここにあるのは、洗練された優雅なラインではない。粘液が滴り落ちるときのような、どこか表情豊かでねっとりとしたしつこさのあるラインなのだ。それが室内を埋め尽くしている様は、異様としか言いようがない。

にもかかわらず目的の食堂にはドアさえなく、石壁をくり抜いた四角い出入り口がひとつ設けられているだけという質素さだったのだ、私は疑問に再び首をひねることとなった。

どういうことだろう。

「腹減った」

シュウが慣れた様子ですたすと入って行ったので、私は出入口手前の壁際まで寄って行き、体を斜めにしてそろりと室内を覗き込んだ。

中央に木製のテーブル――恐らく工業製品でなく一枚板を丸太に乗せただけの――があり、木彫りの椅子に腰を下ろした人達が六人ほどそこで食事をとっている。加賀見さんと栞さん以外には、見知らぬ男三人に、外国人と思しき女性がひとりいた。

中央を陣取っている加賀見さんの背後に回り込み、シュウは不服そうな態度でその肩に腕を乗せる。

「随分のんびり食いやがるじゃねえか」

「年寄りなものでね。迂闊に嚙下できぬのだよ。念入りに咀嚼せねば喉につかえる。げほげほ」

「こんな時ばかりジジイぶってんじゃねえよ」

モデルと編集長というには、ふたりは妙に親密な気がする。別に、変な意味ではないけれど。

テーブルの中央には籐のカゴがあり、スライスされたフランスパンが無造作に詰め込まれていた。それを囲むようにして大皿にサラダやスクランブルエッグが盛られている。各々が自分の皿に取り分けて頂くようだ。

「新入りさんかい？ タベは気付かなかったけど、泊まっていたんだね」

角の席に座っていた壮年の男性が私に気付き声をかけて来た。

白髪混じりの髪は耳の上付近が特に顕著だ。彼は自らを志津木学しづきまなぶと名乗った。聞けば妻と幼い娘の三人暮らしで、印刷所の工員を生業としているらしい。

「私は茶の部屋に泊まっているよ。よろしく」
「……こちらこそ」

ふつくらとした頬に、柔和そうな声、小さな瞳。頭の片隅で、父を思い出した。

彼の右隣に腰を下ろすと、左側に座っていた若い男がおもむろに私の顔を覗き込んだ。

「君、かわいいね。俺は長谷悠弥^{はせゆみや}、十九歳大学生。今日から緑の部屋に泊まる予定。ユーヤでいいよ」

「予定、ですか」

「うん。さつき着いて、鍵を貰ったところ」

ユーヤさんの鍵には『緑』の漢字を象ったキーホルダーが下がっていた。

彼の髪は赤茶色で、ツンツンと逆立てられた髪型がイガグリを彷彿とさせる。それをさらに刺々しいイメージに仕立て上げているのが唇の端に三つ並んだ小さなピアスだ。苦手なタイプだな、と思った。

「おや、先程までソフィさんを口説いていたのは誰でしたっけ。言葉が通じないからって早速鞍替えですか。随分切り替えが早いんですね」

呆れた口調で横やりを入れたのは、向かいでパンを千切っている眼鏡の男性。

二十代半ばだろうか、爽やかなブルーのクレリックシャツを身に着け、長めの髪は淡い栗色で、透き通るような清潔感があった。

どこことなくお兄ちゃんにイメージが被る。

「うるせえっ、伊倉^{いくら}には関係ないだろ。いいよな、おまえには彼女がいて」

「呼び捨てにしないで下さい。初対面なのに」

「けっ、好青年ぶってんじゃねえ」

吐き捨てて、ユーヤさんは鼻柱に皺を寄せる。その手元を、パンの切れ端を持ったままの伊倉さんが指差した。

「そこ、さりげなくひもを結ばないように」

「ちっ、見えていやがったか」

「ここは可視だらけですからね、ズルをしたってすぐにわかります。君、ぼけっとしていると勝手に繋がられますよ」

「え？」

何を？ 意味がわからずうろたえてしまっ。ただ、『可視』って。

ユーヤさんはテーブルの上数センチの場所で何かをつまみ上げるような仕草をしている。しかし、何がその指の間に挟まっているのか、わからない。見えない。

「協会の許可なくひもを操作するのは規定に反しますよ。シザーに裁かれても知りませんからね。最悪、天涯孤独の身になるってことを覚えておいたほうがいい」

「うるせえ。単なる真似事だよ。俺は結ぶ力まではねえの、単なる可視だからな」

「その割にしっかり握っていらっしやいましたが」

「あららら？ 伊倉ちゃんだって触ったことくらいあるだろ？ ひも」

ひも？ シザー？ 一体何のことだろう。

「いちいちおちよくらないでください。そんなだから、女性に縁がないんじゃないですか」

涼しげな顔で彼を一瞥する伊倉さん。その横で加賀見さんが眉をひそめた。

「おなごなどつまらんではないか。あんな、ふにゃふにゃした生き物」

空気が読めていないのか、言ってテーブルに頬杖をつく。

「蹂躪するなら男に限るぞ」

朝からそんな単語を耳にするのは避けたかった気がする。脱力した私の斜め前で、伊倉さんが遠慮がちに尋ねた。

「あの、もしかして加賀見さん、ソツチの人ですか」

「そっちとはどっちだ。私はここにいるぞ」

「うわっ、天然かよ。じゃあそこのガキ、もしかして」

「違うっつうの。オレは女が好きなんだよ！」

「毎度釣れぬな、シュウは。この際乗り換えるか。ああ君、伊倉――」

――昌生^{まさき}くんだったか。なかなかわたしの好みだ」

「いえ、すみませんが僕は地元で彼女が待ってますので……」

眼鏡の向こうで虚ろな目をして、伊倉さんはさりげなく加賀見さんとの間を設けた。

クク、と愉快そうにシュウは左の口角を上げる。

「フラれ続きだな、ジジイ」

「ふん、つまらぬ。たまにはおまえに妬いてもらおうと思ったのに」

白けた雰囲気の中、ただひとり黙々と食事を続ける女性がいた。不自然だな、と思いながら遠巻きに眺める。

肩の上で程よくカールした、たつぷりと光を含むブロンドヘア。彫りの深い顔面に収められた宝玉のような碧眼が、彼女の出自を物語っている。もしか、日本語がわからないのだろうか。

「これ、捺南ちゃん分。あとで部屋に持って行こうと思って取り分けておいたんだけど」

そう言つて栞さんが差し出してくれた皿には、サラダと生ハム、スクランブルエッグにウィンナー、恐らく朝食として提供されていたもののひととおりが盛られていた。ようやく、自分が空腹だったことを思い出した。

「あ……ありがとうございます」

「へえ、君、捺南ちゃんっていうのか」

すかさずユーヤさんが話題を拾った。名乗っても大丈夫だろうか。彼もグルだったりしたら――。

いや、ここにいればいずれは知れる。逆に、あまり警戒している様子を悟られないほうがいい。

「……はい。香月捺南と言います。シユウと―― そちらの小泉厨くんと同級生です」

「ふうん。付き合ってたの？」

「いえ、別に」

「そっか。彼氏はいないの？」

「……はい」

そんなもの、いない。一緒になろう、と約束をした人はいたけれど。

「なあなあ、どこに住んでんの？ メアド教えて」

「あ、そういえばソフィさんは捺南ちゃんたちと同じ歳じゃなかったかしら」

栞さんが思い出したように言う。故意に会話を遮ったわけではなからうが、助かった、と思ってしまうた。

「その彼女、フランス人なのよ」

青い目の女性を指差して、困り顔になる。

「長谷くんと同じく今朝早くこちらに着いたから、部屋へ上がる前に食事をとってもらってるんだけど……生憎、誰も言葉がわからないくて」

伊倉さんが不思議そうな顔で尋ねた。

「どうしてまたそんな遠方から？ 協会施設ならフランスにもあるでしょうに」

「ええ。それがね、彼女、フランス本部のお偉いさんのお嬢さんなのよ。日本に留学したいんですって。でも言葉も何もわからないらしくて」

「英語もですか」

「体が弱かったとかで、学校へはほとんど通っていないらしいの。だから彼女に分かるのは母国語だけ。ご両親も心配なさって、とり

あえず下見がわりにここで一週間だけ預かることになったのよ」

「権力者には敵わんな。まあ、長いものには巻かれてなんぼだが」

冷めた目をした加賀見さんを前に、志津木さんは狼狽をあらわにする。

「ほ、本人がいる前でそんな」

「心配しなくても、彼女は日本語も全く解さんよ」

自分が注目を浴びていることに気付いてか、ソフィさんは皆を見渡して微笑んだ。可憐で線の細い、儚げな笑顔だった。

会話の内容を理解していないことを知っていても、やはり気まずい。

「あの」

カトラリーケースからフォークを一本取り出しながら、私は栞さんを見上げた。シュウもスクランブルエッグをかきこんでいるし、毒が盛られていることはないだろう。

「皆さん、全員が患者さんなんですか」

「もちろん、ソフィ以外はね。あとはメイドと、ドクターがひとりずつ奥にいるわ。ええと、だから今この施設にいるのは、総勢十名ってことになるかしら」

いや、と加賀見さんがパンを口に含んだまま湿り気のない声で言う。

「二階にまだあとひとりいる。とびっきりの変わり者で、^{はた}畠とか言ったかな。人見知りが激しい中学生でね、部屋から一步も外に出て

来ないのだよ。畠だけに傍迷惑というか」

シュウは呆れ返った顔で「寒っ」と身震いをした。

ああ、あの人影だ、と私は先程のことを思い出しながら頭をひとつ振った。二階で感じた不可解な視線。あのときこちらを窺っていたのは『畠』と断定して間違いないだろう。

頭の中でメンバーを数え直してみる。

壮年の志津木さん、大学生のユーヤさん、眼鏡の伊倉さん、フランス人のソフィさん、変わり者の畠さん、そしてブルジョワ加賀見さんと巨乳の栞さん、シュウ、私、まだ見ぬメイドにドクター。

と、いうことは合計十一名の計算になる。

「ところで皆、可視か？ リーラーはいるのか」

加賀見さんはカフエオレをすすりながら問う。カップを持つ手の小指がピンと立っていた。

「僕は単なる可視ですよ」

右手を挙げて答えたのは伊倉さんだった。

「俺は右だけ可視」

「私は可視のリーダーです」

ユーヤさん、志津木さんが続けざまに答える。眺めていることしか出来なかった。皆、まるで当たり前の――そう、タベのテレビ番組の内容を話題にしているかのように軽い口調だった。

「そうか。ソフィくんも確か、可視のリーダーだったな。となるとこの中で不可視なのは香月くんと滝口くんだけか」

「はい」

頷きながら、栞さんは私に気遣わしそうな視線を送ってくる。戸惑っている様子が伝わったのだろう。

こうして私は、いかにも排他的な屋敷で彼らと生活を共にすることになったのだった。

私達は出会えば挨拶を交わし、昼と夜には同じ食卓を囲み、空いた時間は歓談をし、非常に和やかに一日を過ごした。

だから、酷い目に遭わされるかもしれない、という最悪の想像は就寝する頃すっかり消え失せていたのだ。

そんな私の油断をえぐり取るような事件が起きたのは、翌朝のこと。

「——ソフィさん！」

扉を連打する音と、叫ぶ声に目を覚ました。

パジャマのまま廊下を覗き見ると、紫の部屋の前で、シュウと栞さんが強張った顔をしてうろたえていた。

「どうしたんですか」

「あ、おはよう捺南ちゃん。ごめんね、起こしちゃった？」

「いえ。何かあったんですか」

「ソフィ、チャイムを鳴らしても反応がないのよ。ご両親からの電話にも出ていなかったみたいだし」

そういえば、昨日昼食の後から姿を見ていない。

ドアノブをガチガチと上下に揺らしながら、シュウは舌打ちをした。

「鍵も閉まつてる。ひもも……見えねえけど、いないとは断言できねえ。万が一風呂場ででも倒れてたらヤバいぜ。キー解除には最低でも三十分はかかるからな」

「どうかなさいましたか」

慌てた様子で駆けつけて来たのは、メイドの草木さんだ。事情を説明すると、彼女は一気に青ざめて階下に消えた。

伊倉さんとユーヤさん、そして志津木さんもそれぞれ部屋から姿を現す。ソフィさんの反応がないことを打ち明けると、彼らは心配そうに顔を見合わせた。

「ドア、やぶつちまうか。モタモタしてたらまずいんじゃないの」

「だよな、オレもそう思ってた」

シユウとユーヤさんがそんなことを言い出したので、焦った栞さんが止めに入った。

「待つて。まだ中に彼女がいると決まったわけじゃないのよ。落ちて着いて」

「ひとまず周辺を手分けして探しながらキーの解除を待つというのはどうでしょう」

提案したのは志津木さんだった。

「だな。ここにいてポケットとしているよりはマシだ」

言い終わるより早く、彼らは階段の方角へと走り出す。私と栞さんも、すぐさま後を追った。

建物内をぐるりと見回った後、庭へと搜索の場を広げたけれど、

一向にソフィさんは見つからない。

立ち木の足元で、知らん顔をして鮮やかな赤紫の花が揺れる。あれは何という花だっただろう。初夏によく、見かける花だ。

ふと、昨日、昼食後に皆で庭を散策した時のことを思い出した。

『コレナニ?』

彼女は最初にその言葉を覚え、熱心に身の周りのものについて尋ねていた。次第に解答に熱がこもった加賀見さんがまた色についての演説を始めてしまって、皆、呆れてため息をついたのだ。

その後、彼女は紫の鍵を受け取り、部屋に戻った。皆の話を総合すると、それ以降、姿が確認されていないということだった。

食事はあの通り自由にとるスタイルだから、てっきり行き違いになったのだと思っていたけれど――。

十分ほど辺りを探しまわったところで、やはり部屋にいるのではありませんかと誰からともなく言い出し、私は様子見のために、伊倉さんと屋敷内へ引き返したのだった。

「ソフィ、ソフィ!」

先程と同じようにして室内に呼び掛けただけで、依然無反応だ。

「どうしよう。まだなんでしょうか、解錠」

「最低でもあと十五分はかかるそうです。もういつそ、破りましよう」

言うなり、彼はドアに向かって肩から体当たりをする。

衝突音とともに、壁全体が軋むような音が回廊にこだました。

「俺にもやらせろ!」

階段を駆け上がったユーヤさんが、そのままの勢いで扉へ突っ込む。

二、三度繰り返すうちに板のたわみは大きくなり、五度目の体当たりで、それは内側に押し込まれるようにして封印を解いたのだった。

「う、わっ」

まろぶようにして室内に踏み込んだユーヤさんが声を上げる。続いてシユウと伊倉さんがぎくりと立ち止まり低く呻いた。

彼らの背の間から、透き通るような象牙色が垣間見える。それは陶器のようでいて、やけになめらかな曲線を描いていた。

その正体を確認しようとして室内を覗き込み、瞬間的にのけ反った。

「なん、だよこれ……」

シユウは茫然としながらも、憤った声で呟く。あまりにも異様な光景を前にして、私は言葉を失っていた。

紫の部屋で目の当たりにしたものだ。それは、鮮血にまみれた家具とそして、人ではなくヒトだったモノだった。

だらりと足を投げ出して、突き当たりの壁にもたれる弛緩した肉体。その顔面は無惨にも生前の面影を一切留めぬほど執拗に潰されていた。

まるでザクロのように。

「……ソフィ、なのか……？」

体の右側に力なく下がった腕の先、掌の中できらりと光るものがあった。よく見れば『紫』と書かれたキーホルダーがそこに下がっている。部屋の鍵だ。

室内にたまっていた生温かい死臭が、流れ出して来る。口元を掌で押さえ、悪心に耐えながら顔を背けた。

——
生と死。

お兄ちゃんのそれがどこからどこまでだったのか、今でもわからない。しかし今、彼女は、明らかに生の領域から大きく逸脱していた。

完全なる死が、そこにあった。

7・不完全な死

私達は一旦食堂に集合し、遺体の状態を確かめに行った医者とメイドが戻るのをそこで待っていた。

「大丈夫か、香月」

重苦しい沈黙を破り、シュウは気遣わしそうに問う。返事をしようとしたけれど、喉の奥が詰まってできなかった。吐き気がする。紫の部屋で目にしてしまったおぞましい光景が、脳裏に焼き付いて消えない。

鮮やかな光沢を放つ、おびただしい量の血液。それは潰された顔面において所々黒々とした塊になっていた。

つい昨日まで生き生きとしていた彼女が、単なる物体と化して放置されていたのだ。あんな状況を目の当たりにして、通常の状態を保てるはずがない。

「無理するなよ。吐きたかったら吐いてもいい」

そう言ってくれる彼を前に、私はただうつむいた。気を遣われている、ということが何故かとても悲しかった。いつそ放っておいてくれたらいいのに、と勝手なことを思った。

大丈夫？ と尋ねられることが苦痛だったあの頃を―― お兄ちゃんを亡くしたばかりのころを思い出してしまう。

泣いてばかりでは彼が浮かばれない、と言われると余計に泣きなくなった。元気出して、と声をかけてくる人に対しては、なんて思

慮がないのだろうと憤った。

何故皆、やたらと他人の不幸に介入しようとするのだろう。私は別に救われようだなんて思っ**て**はいなかった。誰かに助けて欲しいだなんて望んだこともなかった。

私はただ、放っておいて欲しかったのだ。

結果、中学は徐々に不登校となり、自殺も何度か試み、時を置かずして家出もした。

行き先は大抵ファミリーストランやインターネットカフェで、布団で眠ることはほとんどなかったように思う。人で溢れ返る都会の隅で孤立した時を過ごすのは、気分的にとても楽だった。

皆が別物で、分離していて、言い換えればそれは、ある意味皆同じだからだ。

しかし家出にはそれ相応のものが**必要**だ。私は金銭が尽きると家に戻り、そのたびに母の財布をくすねて逃げた。それは始めこそ騒がれたものの、ふたつきが過ぎる頃には当たり前になっていた。とはいえ、私がつかみ出していたのは百円や二百円の小銭ではない。万の単位だったのだ。いつまでも許される暴挙ではなかった。

無心に戻っても財布の在処が分からないことが増えた。やがてそれらは金庫に厳重に保管され、最終的には手出しが出来なくな**って**しまった。

無性に腹立たしかったことを覚えている。それは私が望んでいた『誰も**が**自分に干渉しない世界』だったはずなのに。

放っておいて欲しかったのか、気持ちを汲んで欲しかったのか、……すっかりわからなくなった。考えてみてもわからなかった。わかるはずもなかった。わかりたく、なかったのかもしれない。

そこで、全ての悪足掻きに終止符を打った。

自分の気持ちにも、周囲のおせっかいにも、抗うことをやめてしまった。もう、何がどうなってもいいと思った。本当の意味で自暴

自棄の心境に到達したのは、このときだったのかもしれない。

だから情けない話、家出をやめたのも高校受験をしようと思ったのも、決して前向きな気持ちからではなかったのだ。

単純に、諦めただけ。感情に蓋をただけだった。

本当は、彼の両親が脳死を死として受け入れたことはもちろん、原因となった事故も到底納得のいく話ではなかった。

お兄ちゃんはその日、信号無視の乗用車にはねられたそう。駅を出て、ひとつめの交差点での出来事だった。

実を言うと、それ以来私は未だその場所を訪れてはいない。駅へ向かうときにも、無意識のうちに迂回してしまう。彼が最後にその目に映したものを、見たくはなかったから。

しかし思い起こしてみれば、あの交差点はともに見通しが良かった。視界を遮るようなものはないし、信号だって確認しやすい位置にある。加害者の女性は見落としたと証言したらしいけれど、どうにも腑に落ちなかった。

葬儀が済んでからしばらく経って、おばさまに訪ねてきてほしいと頼まれたけれど、答えは濁したままだ。彼の部屋を訪れて、彼がいないことを再確認する勇氣はなかった。

それに、あそこに詰まっているのは彼の一部であって、内部を構築するための材料だったのだと思う。遺品と称して、そこから何かを取り出すこと——それは亡くなった直後に摘出された臓器を思い起こさせ、ひどく抵抗を覚えた。

内部を取り出すのは、死を認めたことと同じ。私にはできない。そんな気持ちにも蓋をしたままで、つまり私は今も現実を受け入れられないでいる。

「死後硬直の完成具合から見て、死亡推定時刻は0時から二時の間だろうと思う」

遺体の状態を確認していた医師がメイドを引き連れて食堂へ戻ってきたのは、^{みどりかわ}昼近くになってからのこと。

彼の名は翠川、この施設に常駐しているドクターで、加賀見さんとは小学校時代からの旧友らしい。しかしドクターとはいえ、彼が施すのは通常の医療行為ではないとのことだった。

「原因は首を絞められたことによる窒息死、つまりは絞殺だね。にもかかわらず念入りに顔を潰したのは、恐らく彼女の眼球がないことを隠すためだろうと思う」

捲り上げていた白衣の袖を直しながらそう言う。加賀見さんが、眉をひそめて振り返った。

「眼球だと？ ないのか」

「うん。左右ともにくり抜かれてる。しかもどこにも見当たらない。持ち去られたと考えるのが妥当じゃないかな」

場がわずかにざわめく。

眼球を抜いて、持ち去った？

「僕はリールの専門家であって、法医学に精通しているわけじゃないから断言は出来ない。こんな事態、ここでは……初めてのことだし」

加賀見さんは唇を撫でた。

「眼球を持ち去ったのは犯人、なのか？」

「もともとそれが目的だったんじゃないかな。恐怖を与えることだけが目的なら、持ち去らずに捨て置くだろうし」

「何故……」

「さあ、そこまでは。でも、単純に命を奪うことが目的なら、目には触れないと思う。快樂殺人の一種か、眼球に異常な執着があるのか―― 僕にはこれが精一杯の見解だよ」

翠川医師は申し訳なさそうに口角を上げる。私は彼らの会話を聞きながら、密かに息を飲んでいた。

―― 眼球を取り出して持ち去る。

お兄ちゃんの肉体に施されたことを彷彿させる。そう、彼は臓器と共に眼球も提供したのだ。
状況も方法も違うけれど、眼球を摘出した、という一点においては共通している。そう思うのは考えすぎだろうか。

眼球を奪われ殺されたソフィ。

脳死と判定されたのち、眼球を提供した彼。

ふたりの共通点はそれだけに留まらない。リール協会だ。ソフィはもちろんのこと、彼だつて関係者と接触していた。そして私は、その時まさに『死ぬ』という単語を耳にしている。

冷静な自分と恐怖に怯える自分が体内でせめぎあう。気のせいだ。考えすぎなのだ。けれど疑う気持ちは晴れない。あれは本当に事故だったのだろうか。

もしや。

もしや彼は、何者かに殺された？

8・協会と闇

不思議なことに、居合わせた者達の口から通報という手段が挙げられることは一度もなかった。

だから当然のことながら、警察はやって来ていない。同様に救助もだ。ここへは車で出入りができないようだから、助けを呼ぶならへりしかない。しかしそんな要請を、誰かが行っている様子も見られなかった。

現時点で出来ることは全てしたとも言いたげな顔で皆、木の椅子に腰掛けている。

―― 異様だ。

この屋敷も、内部に流れる空気も、会している人間たちも、全てが一般的な常識の範囲外にある。独自の社会でも存在しているかのようだ。だとしたら、まだこの状況に馴染めていない自分のほうこそ、彼らから見て異様なだろう。

「……真夜中に侵入者がいたっつーことが」

両手で顔を覆って泣き崩れる菜さんの肩を抱き、シュウは暗い顔でテーブルの上へ視線を投げた。

まさか、と加賀見さんは一笑に付す。

「ありえん。ここは立地的にも孤立しているし、協会の護りは鉄壁だ。何人たりと外部から侵入はできん」

不満そうに足を揺らした彼の横で、志津木さんがうつむいたまま口を開いた。

「しかし……実際に人が殺されているんだ。珍入者が潜んでいないとも言えないだろう」

「何度も言わせるな。護りは堅固だ。なにしろ、日本の法が及ばぬ場所なのだからな。対策は義務だ」

法が及ばない、だなんてまさか。
私は眉根を寄せて視線を上げる。

「ここ、日本じゃないの……？」

いや、と加賀見さんは静かに答えながら立ち上がった。

「日本にありながら、日本ではないというべきか。この土地はリール協会の管轄下にあり、全てではないが外交特権に近い権利が与えられている」

「は……？」

「つまり、現在私の許可なくこの敷地内を侵すことはできないのだ。要するに一国の大使館のようなものなのだよ、ここは」

意味が分からない。

「た、大使館って—— どの国の、ですか」

「言うなれば、リール協会の、だ」

協会とは単なる集団ではないのか。それだけ規模の大きな組織だということなのだろうか。しかし外交特権を認めるとなると、規模うんぬんでどうにかなる話ではないと思う。

混乱する私を横目に、彼は食堂唯一の窓へと歩み寄った。

「我らの歴史は深くはあらねど浅くもない。……香月くん、君は組

織について知りたいと思うか」

「え……あ、はい」

慌てて頷いた。知りたいに決まっている。

「そうか。だがこれを聞けば、もう引き返せない。名実共に君は協会の一員として我々の仲間に加わらねばならん。行動にも制約が設けられることになるが、かまわないか」

それで今の今まで、はつきりとしたことを説明してくれなかったのだろうか。

行動の制約、とはどんな意味だろう。私生活にも及ぶことなのだろうか。不安が頭をもたげはじめたところで、私ははっと我に返った。そうだ、佑お兄ちゃんのこと。

彼と協会には、過去、何らかの関係があつた。これは確かだ。彼の死に関する答えもそこに繋がっているような気がしてならない。

ソフィの死との関連性も含めてわからないままではいられないし、私はそれを知らなければならぬと思う。

「はい。知りたい、です」

久々に、自らの意思で大きな決断をした瞬間だった。恐らく、高校を受験しようと決めた時以来だ。あのときも私を動かしたのは佑お兄ちゃんだった。

とはいえ、お兄ちゃんが通った学校に行きたいとか、彼の思い出が詰まった場所で場所で学びたいとかいう、もっともな理由からではない。

当時生きる気力さえ見失いかけていた私の脳裏には、たびたび彼の言葉が蘇っていた。ずっと一緒にいよう、という例の約束だ。

逢いたい。側に行きたい。一緒にいたい。そこで思った。そうだ、

私も彼と同じような道を行けば。

彼と同じ高校へ通い、同じ夏期講習に向かい――同じように事故に遭い、死ぬるのではないかと。

今思えば到底理屈に合わない破綻した考えだとわかるのだけれど、当時はそれが私にとって何より正しくて、何よりの原動力になったのだった。

「大丈夫なですか。もっと、きちんと説明してからではなくて」

伊倉さんが心配そうに加賀見さんへ問う。

「私も、もっと時間をかけようとは思ったのだがな、こうなっては何もわからぬほうが不安だろう」

「ですが」

「やむを得ねえだろ。本人も知りたいつつつてるんだし」

そう言つてユーヤさんが大きく息を吐きながら天井を見上げると、栞さんの背をさすりながらシュウが口を開いた。

「香月、全部を聞いたところですぐには現実として認められないかもしれない。それは仕方がないと思う」

「シュウ」

「でも、オレらはそんな現実の中にいるんだ。それだけは、受け止めて欲しい」

「……うん」

場には、真冬の霜のようにひやりと張り詰めた空気が降り始めていた。

しぶしぶだけれど納得した様子で、伊倉さんが頷いてくれる。

窓の外を眺めていた加賀見さんが、振り返りざまに乾いた唇を舐

め――　そこから、昔話は始まったのだった。

「……そうだ。我らを取り巻く現実だけは今も昔もかわらぬ。リールの街の周囲に堅固な防壁が構えられていた頃と、何も」

私は唾を呑み込む。こくりと小さな音が上がった。

「リールって地名だったんですか……？」

「ああ、『リール』にはふたつのスペルがある。ひとつめは『Lille』、直訳すれば『島』なのだが島ではない。フランス北部の都市を指す。我々の組織は十九世紀半ば、そこで生まれた」
「フランス……」

そういえばシュウも昨日言っていた。アールヌーボーを模したインテリアが伝統なのだ。

「アールヌーボー」はフランス語だ。お兄ちゃんから聞いた話によれば、パリの一角にあった東洋美術の骨董店名に由来しているらしい。

「その地は街を取り囲む堅固な防護壁を有し、様々な民族間闘争の舞台として侵略を繰り返されてきた」

彼は陰鬱な表情を浮かべ壁にもたれた。

「だが、民が本当に恐れたのは敵国からの進軍ではない。まるで封鎖するかのように街を防壁で囲んでいたのには理由がある」

「……理由？」

「ああ。彼らが危惧したのは、その地に住まう特殊な人々が他国に流出することだった」

特殊な人間？ 疑問に眉をひそめたところで、草木さんが私の前にカフエオレを置いてくれた。

「当時のフランスは不安定な政情であつたものの、パリの大衆は大戦までの四半世紀を『ベル・エポック』——『良き時代』として謳歌していた。夜は遅くまで街にあかりが灯り、人々は演劇を含め色彩豊かな芸術に酔いしれた、のだが」

ひとつ頷く。

「先を見越せば一九一四年の第一次世界大戦勃発を控え、当時の世界情勢がいかなるものだったのか……想像に難くなかつた。地球はもつと混沌としていたのだよ」

入り口近くに立っていた翠川医師が、おもむろに音を立ててカフエオレをすすった。こんなときくらい、静かに飲んで欲しい。

「我らの祖は賑わいの裏で、来るべきその日に備え『リール協会』を組織した。決してこの力が戦争の道具にならぬよう、護り、後世に残していくために」

「戦争の道具？ 人質ってこと、ですか」

「いや、そうではない。——確かにリールは大戦勃発の年、ドイツ軍に占領されたが……」

戦争？ ドイツ軍？ どちらも教科書でしか見ないような、私にとっては現実味の薄い単語だ。

戸惑う私の目の前で、皆悼むように沈痛な面持ちをしていた。立ち込める重苦しい空気が、冗談だとは言い難い雰囲気を作り出している。

なんだろう。一体、この話の出口では何が待っているのだろう。

少しだけ、背筋が寒くなった。

「組織はすでに外部とのパイプを持つことに成功していた。敵国に捕らえられた者を除き、故郷を捨て他国へ逃げ延びた者達が今日のリール協会の礎を作ったとも言える。彼らは第二次世界大戦後、秘密裏に列強の国々と条約を結んだのだ。この先、我々は永遠にどの国にも味方しない。だからどの国に対しても損害は与えない。永久的に中立の立場を守る、ゆえに我らに対しても不可侵であれと」

つまりそれが、外交特権に似た権利に繋がるということか。でも、なぜそんなことが許されたのだろ。味方する、しないというだけで。

シュウはふんと鼻を鳴らす。

「一見平和に聞こえるけど、協会の目をかいくぐって俺達を捕え、政治的に利用しようとする奴らは未だにごまんというぜ」

私は咄嗟に腰を浮かせた。

「じゃあもしかして、そういう人達がソフィさんを狙ったってこと？」

しかし、彼女が政治的に利用される理由がわからない。

「さあ。それはまだ分からねえけど……可能性はゼロじゃないだろうな」

「……誘拐ねえ。殺しちゃったら意味が無いだろうが」

ユーヤさんが憤った口調で言うと、伊倉さんも静かに口を開いた。

「確かに、利用しようとしたなら生きたまま連れ去るのが普通でしよう」

「抵抗されたのでは。騒がれて殺したとか」

すかさず志津木さんが口を挟むと、翠川医師が割って入った。

「遺体には、さほど抵抗した様子は見られなかったよ。どちらかというと—— 気絶している間に全てを手際良く済ませたようなとても……狡猾な印象を持った」

「狡猾……となると、恐怖を与えることが目的だったとも言いにくくなるよな。当然、オレ達の力を利用したかったとは考えにくいし」

シウウは眉をひそめて唸る。

—— 力。

先程から何度も彼らが口にするその言葉を、私は未だ噛み砕けずにいた。

それはきっと、リールの民が流出を恐れたもの。そして戦争の道具になりうるもので、時には一国の行く末を変えてしまうようなもの。

「……何？ 何なんですか、その、力って」

躊躇しながらも尋ねずにはいらなかった。加賀見さんは小さく咳払いをする。

「リールのもうひとつのスペルは『l i r e』、直訳すれば、読む、読む……」

「ああ。我らは通常ヒトが知覚できないモノを見、読む。それを可視と呼ぶ」

話題はいままさに核心に触れようとしている。どくん、どくん、鼓動がいつもより激しく打つ。汗で蒸れた掌を握り合わせ、私はそれでも問うた。

「ヒトが知覚できないモノ……？」

そうだ、と彼は真っ直ぐにこちらを見る。

「それは我々の間を繋ぐ糸であり、ひもであり、弦なのだ。ある者はそれを読み解き、ある者は触れ、繋ぎ、またある者は切断する」

ああ、そうだ。シュウも言っていたではないか。人と人を繋ぐもの、と。

それが曖昧な言葉ではなく、的確に答えを表現していたとするなら、つまり。

「……縁……、ってこと？」

語尾が震えていた。

まさか。では彼らには、縁なるものがその目に見えているというのか。そんな—— そんな、現実離れした話、到底信じられない。

「縁か。厳密に言えば少し違うのかもしれない。でも、日本語ではそれが一番近いだろうな」

突飛すぎる。理解しろと言われても到底無理だ。しかし。

私には身に覚えがあった。何度も目の当たりにしてきたのだ。疑問に思っていたのだ。単なる特技だと言いながら、恐ろしいほど正確に自らが成し遂げてきた『あること』を。

「あ、あの、待って。私、わたし、もしかして」

するとシユウは複雑そうに笑った。

「そうだよ。香月はひもを繋ぐ力を持つてる。自覚症状、あるだろ、告白代行屋さん」

やはり――。

半信半疑ながらも、ようやく合点がいった気がした。

「じゃあ、戦争に利用されるっていうのは」

「ああ、例えばスパイや工作員を見抜いたり、資金源とのパイプを太くしたりだな、悪用しようと思えばいくらでも出来るだろ。諍いなんて人と人との間に起こるものなんだから」

「でも私、フランス人なんて何代遡っても関係ないはずだけど」

「単純に血の問題じゃねえんだ。協会の調査では、各国土着の能力者も確認されてる。組織が発足したのは十九世紀だし、フランスのリールだったけど、同じような人間は太古から様々な土地に存在していたんだと思う」

「うそ……」

彼は頷きながら「マジだよ」と言った。

「ほら、シャーマンとかいるだろ。そういうのも無関係とは言えないんじゃないかって」

「ちょっと待てよ」ユーヤさんが身を乗り出す。

「ひとつ聞いていいか。捺南ちゃんは不可視だったよな」

「ああ」

「見えないのにどうやって繋ぐって言うんだよ。そんなの、目隠し状態で針穴に糸を通すくらい困難だぜ。不可視のリーラーなんて前代未聞だ」

「まあ、そりゃそうだけど」

どこかで聞いた台詞だ。リーラー、……縁を繋ぐものという意味だったのか。

「いまいち信じられねえ。そうだ、今やってみせてくれよ」

訝しげに言っただけで彼は右手を私に差し出す。人差し指と親指で、何かをつまみ上げながら。初対面の時にもこんな仕草をしていたけれど、つまり、彼が持っていたのはひもだったのだらう。

「見えなくても触れるんだろ。ほら」

無理矢理に掌へ乗せられたそれは、当然のことながら私には見えない。見えないし、重さも感触もない。空気そのものだ。

なす術もなくぼかんとそれを見つめていると、ユーヤさんが驚いた顔をして背筋を伸ばした。

「うわ、通り抜けた。もしかして君、触れもしないのか」

「え、あの」

「本当にリーラーなのかよ。まるっきり一般人じゃねえか」

知るかよ、とシユウは眉根を寄せて怠そうにため息を吐く。

「それでもこいつは百発百中の腕を持つてる。何度か現場を見に行っただが、こいつが何かをしていることは確かだ。ほんの数秒の間に、

ひもを継ぎ目もなく結んじまう」

「継ぎ目がない？ それは凄い、私には真似が出来ないよ」

丸い顔で丸い目をして、志津木さんが感嘆の声を上げた。そういえば彼もリーラーだと言っていたような気がする。

「本当、どうやっているのか、一度見てみたいねえ」

「とはいえ、協会に属するからにはもう勝手に能力は使えないでしょう。何かの機会に、ぜひ拝みたいものです」

一気に好奇の目を注がれて、居心地が悪くなる。私は苦し紛れにシュウへと会話を振った。

「あの、シュウは？ シュウは可視なの？ ひもが見えるの……？」

「ああ。物心がついた時からオレの視界はひも状のもので溢れてる。だから曲線の中にと、自然と安心するんだ」

そうか。室内に溢れる病的な曲線の装飾を、ようやく納得して受け止める。と同時に、まるで響き合うように過去の記憶が浮かび上がってきた。

ひも――。

『物質の究極の要素は、粒子でなくひもなんだってさ』

……お兄ちゃん……？

『捺南に、いつか見せたいものがあるんだ』

それは彼の口癖。なにを、と尋ねても返事はいつも同じだった。

『何だと思う？　これが何なのか、僕にも分からないんだ』

つまり彼には、私に見えない何かが見えていたのだ。正体不明の何か——　　もしや。

掌のみならず、額にまで汗がじつとりと滲んでくる。暑い。にもかかわらず、足先は冷えていくようだった。

もしや彼は、可視、だったのでは。

しかしなぜ、あれだけ協会に反発していたのだろう。私と引き離される、というようなことを耳にしたような気がするけれど、それが原因だろうか。

入院するだけなら、完治すれば家に帰れると聞いている。なのにどうして。

何故あれほど取り乱していたのだろう。『死』などという単語が出たのだろう。

何かがひっかかる。

三年前、彼の身に一体何があった？

9・シュウ

「ここで起こったことは全て、私の威信をかけて解決せねばならない。殺人とて例外ではない。協力して貰えるか、諸君」

加賀見さんがそう切り出すと、皆神妙な面持ちで頷いた。協力、とは具体的にどういう意味なのだろう。しかし黙って従うことが古くからの決まり事のように感じられて、遅れて私も小さく頷いた。とんでもないことになってしまった。今更になって後悔が押し寄せてくる。

歴史やら戦争やら、普段の自分には縁遠い話だ。よもやこんな組織が地球上に存在していたなんて、まさか自分がその一員になるうだなんて、予想もしていなかった。

でも――。

組織の一員として留まり続けなければならないのなら、調べることができるかもしれない。お兄ちゃんが三年前、協会と接触した時のことを。

「では、私から連絡があるまで各自部屋で待機したまえ」

こうして、加賀見さんの一声により場は解散されるに至った。自己を防衛するように、などと注意の喚起らしきこともあったような気がするけれどあまり覚えてはいない。冷静に、誰かの言葉に耳を傾けられる精神状態ではなかった。

もたもたと最後に席を立った私は皆について行きそびれ、結果、不審な行動を目撃する羽目になってしまったのだった。

「……いつものように頼む」

難しい顔をした加賀見さんが、シュウの耳元でそう低く囁く。応えて、シュウは黙ったまま彼の胸元に拳をとんと軽く当てた。了解した、という合図のようにも見えた。

——いつものように？

何にせよ用心しておくに越したことはないだろう。なにしろ殺人が起きてもおかしくない場所なのだから。

見なかったふりをして、部屋へ戻るためにそそくさと廊下へ出たときだった。

「香月、ちょっといいか」

肩を掴まれ、再び食堂へと引っ張りこまれる。抵抗する暇はなかった。

「な、何、あの」

さっそく餌食にされるのだろうか。
身構えつつ問うと、彼は低くぼそぼそと聞きづらい声で小さく言った。

「事件の情報収集、つきあえよ」

「え、それって、さ、殺人事件の？」

「もちろん。他に何があるんだよ」

当たり前のように言われても困る。情報収集——何故私が、
というよりシュウが？ 私は目を泳がせながら六回連続のまばたきをした。

先程の『頼む』はもしかのことだったのだろうか。事件の情報収集を『いつものように頼』んだ？　ということはシュウはいつもこんなことを？

しかしいくら警察が入り込めないからといって未成年に殺人事件の捜査を頼むなんて不用心すぎると思う。

そんなことを考えていると、シュウはむっとした様子で下唇だけを尖らせた。

「露骨に嫌そうな顔すんなつつの」

したつもりは無いし、どちらかというと困惑していたのだけれど、嬉しいか嫌かと聞かれたら断然嫌に決まっている。

「オレだつて面倒臭えんだよ。けど、仕方ねえだろ。こういう厄介事を片付けるのがオレの仕事なんだから」

「仕事？」

「そう。協会内での、俺の役割つてとこ」

彼はわざとらしくため息を吐いて、ついでに私の顔のすぐ右に片手をついた。凄い威圧感だ。脅しかけられている気分になる。

いや、脅し、とだけ思っていられればまだ良かったのかもしれない。とっさにその顔を見上げた私はすぐに後悔させられてしまった。

「……ど、どうしてそんなこと、シュウが」

尋ねながらさりげなくうつむく。心臓が早鐘を打っている。相手が悪い。シュウは長身痩躯、眉目秀麗で何拍子も揃った美男子なのだ。

「平たく言えば、オレにしかできないからだ。日本の、リール協会

においては。な、手伝えよ、香月」
「で、でも」

自分の仕事なら、自分ひとりで片付ければいい。薄情かもしれないけれどそう思った。

私はあんな残虐な事件にはもう関わりたくない。渋る私を焦れつたそうに見下ろし、シュウは口を開いた。

「はつきり言っぜ。今、オレは香月以外の全員を疑ってる。侵入者の存在だけじゃなくて、内部の人間もな」

「え」

「殺し殺される間柄にも繋がりは—— ひもは存在する。オレが見たところ、内部でそれがないのはおまえだけだ」

「私だけ？」

「そう。つまり加害者ではありえない。逆に考えれば、おまえは今後被害者にもなりうるってことだな」

「ひ、被害者って」

眼球を抜かれる、殺されるということだろうか。冗談じゃない。

「だからなるべくひとりにならないほうが身のためなんだよ」

結局うまく言いくるめられたような気がしなくてもないけれど、私はやはり断りきれなかった。

これまで幾度も彼に庇われていたことに気付いた所為もある。得体が知れない、信用できないと思っていたけれど、私は始めからずっと気遣われ続けて来た。

恐らく、編集部に連れて行かれたあのときから。

「まずは、畠ってガキの顔を見ておくか」

行くぞ、と彼は私の手を引く。いつも気怠そうにしているシュウとは、まるで別人のようだ。

「ああ、そういえば」

らせん階段の三段目に足を掛けたところで、彼は気付いたようにこちらを振り返った。ただでさえ長身なのに、一段高いところから見下ろさないで欲しい。

「気付いてるか？」

「何に」

「あれが―― 密室殺人だつてことに」

まさか。そんな言葉、ドラマや小説でしか聞いたことがない。

「ソフィの部屋に乗り込んだとき、鍵は彼女の手の中であつた。おまえも見ただろ」

「……見た、けど」

先程目撃してしまった凄惨な光景が瞼の裏に映し出されて、私は激しい不快感に眉をひそめた。確かに、ソフィは部屋の鍵を握っていたと記憶している。

「あの部屋の鍵は閉まってたはずだ。オレも確認した」

違いない。だからドアを蹴破つたのだし。

「こんな不自然はない」

「そう、かな」

「よく考えてみるよ。ソフィを殺した犯人は、鍵なしで部屋の外から施錠したことになるんだぞ。スペアキーはないのに」

「でも、窓から出入りしたってことも」

「ここの窓は全部はめ殺しだ」

となると、これはやはり――密室殺人、ということになるのか。彼は階段を昇りきると、迷いなく橙色の部屋の前へ向かい気急そうに足先でドアをノックした。

「おい畠。いるんだろ」

返答はなかった。

「三十秒でいい。緊急事態なんだ。話ができないか」

やはり反応はない。人間不信と聞いたけれど、こういうことだったのか。

シュウはしつこくノックを繰り返す。「おい、開けるよ」態度が悪いものだから、借金取りのようにも見える。

そうして数分粘り、半ば諦めかけたときだった。がちやり、小さな音を立ててわずかに扉が押し開かれた。

「……うるさいよ」

現れたのは小柄な少年だった。

彼はシュウと同じく黒い学生服のまま、伸びきった前髪の隙間からぎょろりとこちらを睨む。白目の部分は充血し、不自然なほどの赤みを帯びていた。

「タベ、紫の部屋で殺人事件が起きた」

「女の人に聞いたよ。だから外で搜索してる様子も、窓から見てた。……知らせに来たの、アンタじゃなかったの？」

私を不審そうに見上げて問う声は音程が一定で、感情が欠落しているような口調。こういうタイプを前にすると、私の親の世代の人間は「無感動でいけない」などどこぞって説教をしたがる。

「うっん、違う」

女の人、というとメイドの草木さんか栞さんだろう。

シュウはかすかに目を細め、彼を凝視している。近視の人間が遠くを見る時にするような顔だ。

「……疑ってるの。僕じゃないよ」

「ああ、見たところ、おまえには被害者との縁がないな」

「ならもういいだろ。放っておいてよ」

怯えることも驚くこともなく、少年は無表情のまま我関せずといった様子で部屋を閉ざそうとする。シュウはその隙間に爪先を突っ込み、いともたやすく彼の行動を阻止してしまった。

「ひとつだけ訊かせてくれ。死亡推定時刻の0時から二時の間、不審な物音を聞かなかったか」

「聞いてない」

「それは間違いないな？」

「……疑いたきゃ疑いなよ。でもその時間は本当に、足音ひとつ聞いてない。ここの廊下はタイル張りだし、足音を立てずに歩くのは相当困難だと思うよ」

少年は内側からシュウの足を蹴り、直後、ボタンと扉を閉めてし

まっただった。

「ふん、まあいい。今のクソガキの証言、まんざら嘘でもねえだろうからな」

「どうしてわかるの」

「目が赤かった。寝てたんじゃねえの。じゃなきゃ寝不足だ。つつことは夜中まで起きてたってことだ」

思わず目をしばたいた。

「なるほど」

基本だろ、と彼は得意げに言う。よくある少年探偵ものの主人公のように見える、と言ったら褒め過ぎだろうか。

「で、あいつの証言を信用したとするとんでもないことがわかる。

—— 犯人には実体がない」

「なにそれ」

「犯行時刻、誰も廊下を行き来していない。じゃあどうやって、犯人は彼女の部屋に現れて殺人を犯し、姿を消したんだ？」

「……それは」

確かに物理的にはありえないことだ。

「意味不明すぎてム力つくぜ。ちくしょう」

シユウはあからさまに嫌な顔をして、耳の上をがりがり引つ掻く。誌面を眺めて彼を素敵だと騒いでいる女子達に見せてあげたいと思うほど親父臭い行為だ。

そのとき螺旋階段の方角から、転げるようにして駆けてくる人が

いた。メイドの草木さんだ。

「こ、小泉さま」

酷く焦った様子で何かを言い出そうとして、こちらへ気まずそうに視線を投げる。私がいたらまずいとも言いたげだ。

「彼女は大丈夫だ。オレの助手をしてもらってる」

いつの間に手伝いから昇格したのだろう。

「ええ、じゃあ、あの……申し上げます。加賀見さまから、お伝えするようにと仰せつかったのですが」

草木さんは荒い息を整えながら声をひそめる。

「屋敷外部の監視カメラを調べたのですが、不審な影が映り込んでいたということはありませんでした」

つまり、ここには侵入者など存在しないということ。
シュウの眉間に皺が連なる。

「それと、ソフィ様は昨日ご夕食を召し上がっていません」

「姿を見なかったってことか」

「はい。洗ったプレートの数も、一枚少なかったと記憶しています。翠川先生によると、胃の内容物も空だったとかで。あと……私が確認した範囲では、紫の部屋にはほとんど使った様子がありませんでした。トイレにも使用した形跡がないんです」

「わかった。ジジイにそう伝えてくれ」

「承知しました」

ごくり、喉が鳴ってしまう。まるで刑事ドラマのワンシーンだ。厳しい目をして方向転換をした彼は、ぼそりと低い声で独語を漏らしたのだった。

「……犯人は屋敷内の人間に絞られたか」

10・疑心暗鬼

「じゃあソフィさんを殺したのは、私達の中の誰かってこと？」
「侵入者がいなかったんだ。必然的にそうなるだろ」

何故か私の部屋までついて来た彼はそう言って、我が物顔でベッドに寝そべった。二人きりの室内、もう疑うも警戒するもない状況だ。

当然のように土足のまま両足を投げ出した彼を前に、密かに肩を落とし嘆息してしまう。せっかく草木さんが整えてくれたシーツが見るも無惨に台無しだ。

私はシュウの、こういつた振る舞いが好きではない。マイペースという点では佑お兄ちゃんにもそんな傾向があつたけれど、種類が違う。大いに違う。

「捜査にはジジイと栞さん、翠川たちも協力してくれてる。じきに各部屋を巡って目玉の搜索もしないとな」

「め、めだっ……」

「それが一番手っ取り早いだろ。持つてるヤツが犯人、とは言わないけど他にも証拠が見つかるかもしれないし」

それはそうだけれど。想像するとゾツとする。

残虐な手口で人の命を奪った犯人が、私達の中に紛れている。自分と同じように怯えたふりをして、次の獲物に狙いを定めている……。

「香月も何か疑問に思うことがあつたら調べてみてくれよ」

「……え、私が？」

「そうはつきり言ってるじゃねえか」

もちろんはつきり聞こえていた。しかし出来れば目立たず騒がず、じつとしていたいのが本音だ。危険なことには関わりたくない。手足を措くところなし、とはまさにこのことか。

「しゅ、シユウはいつもこんなことに関わってるの？」

「年に数回は」

「は、嘘でしょ」

「マジ。とりあえず状況を整理するか」

シユウは部屋に備え付けの小さなメモ帳に、胸ポケットから取り出したブルーブラックのボールペンを走らせる。綺麗とは言い難い、暗号のような文字でそれは綴られた。

屋敷内略図・二階

<東> 廊下 <西>

ステンドグラス

桃：空室 白：香月

緑：ユーヤ 赤：伊倉

青：栞さん 橙：畠

紫：ソフィ 黄：ジジイ

黒：オレ 茶：志津木

螺旋階段

一階

<東> 廊下 <西>

翠川個室 草木個室

診察室

厨房

診察室2

食堂

玄関

螺旋階段

「こんな感じか」

うつぶせたり、仰向けたり、シュウは絶え間なくアクティブに寝返りを打ってくれる。劇的にしわくちゃになったベッドを見つめ、自分の部屋で寝ればいいのに、と頭の中だけで愚痴を零して諦めるよりほかなかった。

「それと、ひもだな。事件発覚直後の全員の繋がりをメモっておこう」

「全員の繋がりが？」

「ああ。全て記憶してる」

「うそっ」

「だからマジだってば。おまえ、そればかりだな」

予想外の一言を放ってふたたび体を返し、シュウはメモ帳をめくる。

「一人ずつ書き出すところか」

●香月

ひもあり：栞さん・翠川・草木・伊倉

●ジジイ

ひもあり：ソフィ・栞さん・翠川・草木・ユーヤ・伊倉・志津木

●栞さん

ひもあり：香月・ジジイ・ソフィ・翠川・草木・伊倉・畠・志津木

●翠川

ひもあり：香月・ジジイ・ソフィ・栞さん・草木・ユーヤ・伊倉・
畠・志津木

●草木

ひもあり：香月・ジジイ・ソフィ・栞さん・翠川・ユーヤ・伊倉・畠

●ユーヤ

ひもあり：ジジイ・ソフィ・翠川・草木・伊倉

●伊倉

ひもあり：香月・ジジイ・ソフィ・栞さん・翠川・草木・ユーヤ・
畠・志津木

●志津木

ひもあり：ジジイ・ソフィ・栞さん・翠川・伊倉

●ソフィ

ひもあり：ジジイ・栞さん・翠川・草木・ユーヤ・伊倉・志津木

●畠

ひもあり：栞さん・翠川・草木・伊倉

●オレ

全員ひもなし

「やっぱり事件があつたとなるとひもも多いな。普通はこんなになえんだけど」

敬称があつたりなかったり、本名だったりそうでなかったりするのは、彼自身の呼び方が反映されているからだろうか。

いや、そうとも言いきれない部分がある。要するにいい加減なのだ。

「あれ？」

「なんだ、間違いでもあつたか」

首を傾げた私を見上げ、シュウは残念そうに眉尻を下げる。

「シュウってどうして誰とも繋がりが無いの？」

「……そういう人種だから」

返された答えは何故だか声が固くて、まずいことを聞いてしまったのかなと不安になってしまう。気まずい沈黙が流れ始めて、私は慌てて話題を変えた。

「あ、あの、ひもっていつぺんに沢山見えるんでしょ？ そんなに簡単に見分けられるものなの？ 印がついてるとか？」

「いや、とシュウは仰向けの体勢で両手を後頭部にあてる。

「いや、見ようとしなければ見えねえよ。気合いつつうか、よし見るぞ！ てな具合に」

どんな具合だ。

「それに、知覚できるのは三、四メートルの長さまでが限度だしな。ひもはある意味ゴムひもみたいなモンでさ、お互いが遠ざかれば細くなるし、それだけ見えにくくなるんだ」

「へえ、伸びるんだ」

「ああ。で、ひもの種類を見分けるのは……単なる普通の可視には不可能だろうな。そりゃ、辿れるほど近くにいればどれが誰に繋がってるかは一目瞭然だけど」

「ふうん」

普通、ということはそうではない場合もあるということなのだろうか。私の疑問に先回りして答えるように、シュウは言う。

「オレは特殊なんだ。必要性にかられて、つつか半分は生まれつきだけど……ひも自体の性質が読める」

「性質って……色とか？」

「色はねえよ。ひもは無色透明。オレが読んではもっと精密な?? 例えるなら指紋とか、DNAみたいな部分」

思わず両目をぱちくりさせてしまった。

「凄い」

それで犯罪捜査のような役割を得ることになったのだろうか。情報をおおまかに整理すると、ひもは通常の可視でも種類までは見分けられなくて、見ようとしなければ見えなくて、さらにシュウの目はとんでもない精度を持っている、ということになる。正直よくわからない。

「あとは時間ごとに遡ってアリバイでも……」

彼がそう呟いた時、コンコンと軽いノック音が二度繰り返し室内に響いた。

「捺南ちゃん、いる？」

「はい！」

慌てて駆け寄りドアを開くと、室内を覗き込むようにしてひよいと右手を挙げたのはユーヤさんだった。

「よ、ちよつといい？」

良いわけがない。

とつさに背伸びをして背後を隠そうとするも完全に後手で、直後、彼の眉間には見事な皺ができた。その視線の先、ベッドでごろりと寝返ったシユウが「ああ？」不機嫌そうな声を上げる。

「は！？ やっぱりそういうことかよ」

「いえっ、ちがいま、あの、これは」

いくら否定しても、状況が彼の誤解を肯定してしまう。

ふたりきりであるというだけで怪しいのに、シユウの馬鹿、どうしてベッドになんて。今更だけれど彼の無神経さに腹が立った。

「そういうことなら早く言えよ。期待しちまったじゃねえか」

させた覚えはない。その割にソフィや栞さんに対しても鼻の下を伸ばしていたような気がするのは私だけだろうか。

「加賀見さんもなんだかんだ言っておきながら昨日栞さんとよろし

くやつてたみたいだしさあ」

「え？」

「いや、こつちの話。まあいいよ。ボディガードがついてるなら安心だし」

ユーヤさんは片眉を下げてはつの悪そうな顔をする。意外な一言だった。

「もしかして、心配して下さったんですか」

「当たり前じゃん。か弱い女の子は護ってあげなきゃだろ？ それに俺、ちよつと気になることが――」

彼はそこで言葉を飲み込み、表情を曇らせる。

「気になる？ 事件のことか」

そう言い返したシュウはすでに私のすぐ後ろに立っていた。

気怠そうに片肘を扉につきユーヤさんを見下ろす、若干色気漂う姿は雑誌で目にする彼そのものだ。思わず視線を逸らしてしまった。

「ああ。下で皆、加賀見さんから話を聞かれてて……それで気付いたんだけど」

「わかった、入れよ。詳しく教えてくれ」

ここは私の部屋なのに、と反論する隙はなかった。ゆつたりとベツドサイドに腰を下ろした彼らに対し、私はひとり何故かぽつりと堅い椅子に座った。

「で、何に気付いたって」

「あ、ああ。加賀見さんの話、扉がないからある意味筒抜けでさ」

「マジかよ……あの野郎、バレたらどうしてくれるんだ」
「バレる？」

「いや、なんでもねえ。で、なんだって？」

「あのさ、俺、あの志津木とかいうオッサンが怪しいんじゃないかねえか
と思ってる」

「志津木さんが？　なんで」

「うん、夕食時、いや、庭の散策以降、誰もソフィを見てないだろ。
そして紫の部屋は浴室どころじゃなくトイレすら一度も使用した形
跡がないんだよな？」

草木さんが密かに教えてくれた事実も、いつの間にか露呈してしま
ったようだ。シユウは「あのクソジジイ何でもぺらぺら喋り過ぎ
だ」とますます不機嫌そうに眉をひそめた。

「おかしくねえ？　夜中に殺害されるまで、一度もトイレに行かね
えなんて」

「ああ、確かに。オレもそれは引っ掛かってた」

「だからさ、部屋に入る以前に、すでに捕われて別の場所にいたん
じゃないかと思ってる」

「だろうな」

シユウは腕組みをして、ふうと息を吐く。

「殺される直前まで別の場所に監禁されていたか、殺されてから運
ばれたか、どちらかだと思う」

「だろ？　となると、彼女を捕えるチャンスは一度しかなかったん
じゃねえかな。……部屋に、入る前だ」

「ああ、その可能性は高い」

「ソフィは庭で鍵を受け取ってた。なあ捺南ちゃん、君も見てただ
ろ。それで、彼女はひとりで先に室内へ戻ったんだ。俺は、そのと

きが犯行時刻だったんじゃないかと思ってる」

突如会話を振られて、思わず背筋が伸びた。記憶の糸を辿りつつ、頷く。彼の言う通りだ。

「でもあの時間、みんな庭にいただろ。だから捕えたっていうより――
誘い込んだんじゃないかねえかなって」

昨日の朝食後、畠さん以外のメンバーは全員で屋敷の外へ出た。天気もよかったことだし、庭をぐるりと見て回ったのだ。

シュウは、屋外に出るなり芝生の上で寝転んで眠ってしまったけれど。

その時にソフィが『紫』のプレートがついた鍵を受け取っていたのを、私は確かにこの目で見ている。

言葉が通じない彼女に対し、草木さんと栞さんが困り顔で部屋の色を伝えていたことも覚えている。ルージュだとかヴィオレだとかふたりで相談し合いながら片言のフランス語も喋っていたように思う。

つまり、初めて病室へ入ったのはそのあとだ。

「誘い込んだ？ 犯人が自分の部屋に、ってことか」

「ああ。志津木さんは俺やソフィと違って、前日から宿泊してただろ。だからいろいろと細工をする時間もあつたと思うんだ」

「細工？ 鍵にか」

「いや、逆だよ。タイルのほうに、だ」

ユーヤさんは膝の上で両手を握り合わせる。

「あのひと、印刷所の工員だろ。インクとか詳しいんじゃないかねえかと思つて。タイルの表面でも弾かないような特殊なインクを茶色のタ

イルの上から塗って、紫色に見せかけたとかさ」

なるほど。

部屋を識別するものが数字であつたなら部屋の並びが不自然になつてしまふけれど、色なのだから入れ替えをしたところで一見不自然には見えないだろう。

うつん、とシュウは難しそうに唸る。

「でもあれ、表面が少し透き通るような感じで色がついてるだろ。そこだけ不透明にがつつり塗り替えてあつたら目立たねえ？」

「いや、でもプロなら塗料には詳しいだろ。多分だけど」

「塗装ねえ……、それを言ったらフィルムとかシールみたいなものを使ったほうが簡単に細工出来るじゃねえか。それも翠川や草木さんに見られれば速攻でバレるぜ。鍵だつて別物なら開かねえだろうが」

ユーヤさんは気付いたようにぽかんと口を開く。シュウの言葉はどれもが的確的に的を射ていて、私が口を挟むまでもなかった。

あのタイルは壁に埋めこまれているし、それ自体を交換することはできない。だから細工をするならあの上から何か手をくわえるしかないのだ。

しかし塗料などの手段を使えば、被害者以外の人間にもそれを目撃される可能性がある。

「でもさ、ソフィが殺された時も庭を探そうって言い出したのはあの人だつたし……微妙に怪しいつつうか」

「あのなあ、疑わしきは罰せずっていうだろ。じゃあひとつ聞くけど、ソフィのすぐ後に部屋へ戻ったのは誰だ」

「俺と伊倉」

「その時点でおかしいだろ。犯人なら他のメンバーより先に証拠隠

滅へ向かうはずだ。でなきゃトリックがバレちまう」

うつん、とユーヤさんが唸る。まだ納得のいかない様子だ。

「その順番だけ見れば、細工をした可能性が高いのはおまえと伊倉ってことになるぞ」

「俺！？ ないない、絶対に俺じゃない」

「口ではみんなそう言うんだ」

なんにせよ参考に使ってもらうよ、とシュウは言って立ち上がる。出て行け、という無言の主張だろうなと思った。

ユーヤさんはしぶしぶ立ち上がり、何故かじいっと食い入るようにシュウの顔を見つめる。

「なんだよ、気持ち悪い」

「いや、どこかで見たことがあるような顔だなと」

「メنز・ゼロじゃねえの」

「ああ！ そうか、おまえ、モデルの小泉厨！ サインくれよ、サイン」

「やだ。どうせヤフオクで売るだろ」

ここまで気付かなかったなんて奇跡だ。いや、でも案外そんなものかもしれないと思う。シュウのだらしないふるまいが見るものの目を攪乱させている可能性も高い。

「そりゃまあ。ん？ でも、それだけじゃなくて、どこかで……、いや、気のせいかな」

どうにも腑に落ちない様子でぶつぶつと呟きながら、ユーヤさんは部屋のドアを開く。

「じゃ、気を付けろよ捺南ちゃん」

「ありがとうございます」

小さく下げた頭を、彼は意外なほどそつと撫でてくれた。

「俺、もう……ああいうの、ごめんだからさ。人の死、とか」

私だって、誰かがあんな姿になるのは二度とごめんだ。すると彼はぽつりと言った。

「実は俺、妹が」

「ユーヤさん、妹さんがいらっしゃるんですか？」

「—— うん」

微笑む顔は悲しそうで、苦しそうでもある。私を妹さんと重ねて見、心配してくれているのかもしれないと思った。

「おまえこそ気を付けろよ」

「ああ」

斜め向かいの部屋へ戻って行く彼を見送った、そのときだった。

「シュウくん！」

またも螺旋階段のほうからかけてくる人影。見覚えのある光景だ。しかし今回はその人の胸元に揺れる小山がふたつ。つつい自分の体を見下ろして、歴然たる差に打ちひしがれる。この先もまだ数年、成長が止まらないでいてくれたらいいのだけれど。

「これ、頼まれてた資料よ」

紙の束をシュウに差し出す栞さんの息は、すっかり上がっている。

「おう、悪いな。そっちはどうだ？ 眼球は見つかったのか？」

「いいえ、まだ。編集長は食堂で皆から話を聞いているわ」

「……ああ、筒抜けのやつな。ユーヤに聞いたよ。ジジイ、尋ねるより講釈する回数のほうが多いだろ」

「ふふ。いつものことだけどね。終わったら、情報は直接伝えに来るそうよ」

搜索作業のために着込んでいるのか、不似合いなかつぱう着を翻して彼女はさっそうと下階へ戻って行った。

手渡された紙を指差し「何それ」と尋ねる。シュウは得意げに口角を上げた。

「ここにいるメンバーの略歴やら家族関係やら。役割上、オレは協会にある情報をほぼすべて閲覧できるんだ。すげえだろ」

「えー！」

「ま、もちろんお偉いさんには秘匿の権利があるけどさ」

それをパラパラと捲りながら、シュウは棒高跳びのように体をひねって背中からベッドに着地を決めた。立ち尽くしたまま、その姿を見つめる。

—— 情報を知ることが出来る。シュウが？

奇跡だ、と思った。こんな好都合はない。彼が求めれば、三年前のお兄ちゃんの身に起こったことも分かるかもしれない。

「あの、シュウ！ お願いがあるの」

「サインならやらねえぞ」

「そうじゃなくて、その、情報のこと」

こうして私は、シュウに全てを語るに至った。

お兄ちゃんと私のこと、彼の身に起きていたこと、生前のことは覚えていた限りほぼ全部だ。

シュウは意外にも紳士的だった。無駄な横やりは入れずに黙って最後まで聞いてくれ、涙ぐんだ時には見ないふりをしてくれたのだ。

「沖永佑、か。わかった。とりあえずソフィの事件が解決したら、協会にかけあってやるよ」

「本当に！？」

「ああ。ただし、おまえがちゃんと事件解決に貢献したらな」

11・状況把握

「ジジイ、遅えな……。大方演説の真つ最中なんだろうけど」

壮大なスケールの回廊を正面に眺めながら、私はシュウと共に窓辺に背をもたれる。

現在時刻は午後四時。ふたつの長い影がタイル上に、やや右へ向かって伸びていた。

ここへ来たのは一昨日、私の記憶に至っては昨日からしかないのに、何ヶ月も前からこの場所で過ごしていたような気分になってしまふ。

衝撃的な出来事がありすぎてうまく頭の中で処理できていない。現段階で物事を冷静に把握し始めているシュウは、どれだけ強靱な精神の持ち主だろう。

「――ソフィは最初に部屋に入る以前に捕われた。これはほぼ確実だ」

同感だ。しかし、それが一番のネックでもある。彼女が部屋へ向かったあのと、畠さんを除く全員が庭にいたからだ。

つまりソフィが姿を消したと予想出来る時刻、全員にアリバイがあったということになる。となるとやはりユーヤさんの言うように彼女はどこかに誘い込まれたとするのが妥当だろう。

「なあ、何か覚えてないか？ 例えば、ソフィの部屋に行く約束をしたヤツがいたとか」

「ううん……ユーヤさんがナンパしてたのは覚えてるけど」

「ナンパ？」

「そう。でも、言葉が通じなくて撃沈」

庭へ出たあるとき、私は皆の会話には加わらず、テラスに腰掛けて様子を伺っていた。まだ警戒していたからだ。誰かが不審な行動をしていたのなら、微かにでも覚えていると思う。

「だろうな。ソフィとはうまく意思疎通が出来なかったんだから、誘う、呼び出す、の類いは難しいか」

ファックス用紙を捲りながら、シュウは呆れ気味に笑う。

「あとは？ ソフィの様子とか」

「ソフィさん……は」

彼女は。

「ニコニコしてた……『コレナニ？』って片言で色々と尋ねてて」

思い返すと胸が詰まった。彼女は大人びた面立ちをしていたけれど、無邪気で可愛い、少女のような人だった。人当たりも良かったし、素直で、ひねくれたところなんてひとつも見受けられなかった。殺されるほどの恨みをかうような人間ではなかったと思う。

なのに—— 何故。

災難だった、不幸だった、というだけでは済まされない。……許せない。

死から数十時間を経て、ようやくそんな感情が湧いた。それは私が事態を現実として受け止めはじめた証拠なのかもしれない。

「それに、志津木さんと加賀見さんがジェスチャーを交えながら答えてたの。それで徐々に気分が盛上がって来たのか、加賀見さんが

色について語り出しちゃって」

「あいつ、またやりやがったのか」

シユウは苦々しい顔で笑う。

「うん。確か―― マラリアの特効薬であるキニーネを合成中に、人類初の合成染料であるモーブが偶然発見された話とか」

「はあ」

「あとは、インディゴブルーの合成法を完成させた人はノーベル化学賞を受賞したとか。色素の化学構造式を、酸素と窒素と水素と、つて地面に書きながら演説」

「あー……、もうその話はいいや」

蠅でも振り払うような動作をして、話を遮る。

「よく覚えてるよな、おまえ。オレ、何回聞いても覚えられねえ」

「だって初めて聞いたわけじゃないから。お兄ちゃんが」

「お兄ちゃん？ 香月、兄貴がいるのか」

「……ううん。佑お兄ちゃんのこと」

そうか、とシユウは声のトーンを落とした。ああ、墓穴を掘ってしまった。このままではまた暗い雰囲気になってしまうと思い、私は慌てて口を開いた。

「あ、あとは、混色の話とかしてたかな」

「だからもういいって、ジジイに関することは。次はあれだ、部屋に引き返す時」

シユウは人差し指でくるりと宙を混ぜる。深爪になりかねないほど短く切りそろえられた爪は、清潔感があるというより若干痛々し

い。

「まず、ソフィが一番先で、ユーヤと伊倉が次だったんだよな」

「うん。彼女はひとりだったから、誰かが部屋と一緒に付いて行つたわけじゃないの」

「案外不親切だな、草木さん」

「ううん、だって加賀見さんの演説真つ最中だったもの。あれを途中で抜け出せるのは、言葉が分からないソフィだけだったと思う」

「ああ……、確かに。フランス本部のお偉いさんの娘だしな。ジジイも文句は言えねえだろ」

「演説が終わるとユーヤさんたちが室内へ向かって、それを追い掛けるようにして、残りのメンバーもほとんど同時に部屋へ戻ったの。草木さんはランチの準備をするために食堂へ行つたけど」

「わかった。で、夕飯までに部屋を出入りしたメンバーは」

「そこまではわからないよ。ずっと廊下にいたわけじゃないし」

「だよな」

「だから、ソフィを見たのはあれが最後だったよ」

殺されるまでの間、縛られてでもいたのかもしれない。

でも—— だとしたら痕が残っていそうなものだと思う。翠川先生によれば抵抗のあとはほとんど見られなかった、とのことだけれど何故だろう。逆に、翠川先生が嘘をついている、という可能性はないのだろうか。

「草木さんか翠川先生が犯人ってことは考えられない？」

「あ？」

「だって鍵がなくても解錠が出来るでしょ」

それはそうだけど、と彼は回廊を歩き出した。

「確かに草木さんと翠川先生はホストのコンピュータを弄ることが出来た。だからこそ可能性は薄いと思うぜ」

「どうして」

「現場を密室にしちまったら、自分達が真っ先に疑われることになるだろ。それなら鍵は開けっ放しにして、全員を容疑者に仕立て上げたほうが彼らにとつては都合がいいんだ」

「あ、そっか」

流石に鋭い。同意の言葉しか出て来なかった。

「おし、紫の部屋をもう一度見ておこうぜ。ちょっと確認したいことがあるんだ」

「う、うん」

「心配すんな。遺体なら処置室に移動済みだから」

その背を追いながら、私が調査に加わる意味なんてないのではと思ってしまった。きっとシュウはひとりでも充分役割をこなせるに違いない。

「そういえばシュウ、私、ここには治療だか修理だかの名目で入院したんだよね。その割に診察とか受けてないんだけど、いいのかな」

「いいんだよ。こっちについた直後にある程度の処置は済ませた。それに、翠川は可視だから顔をあわせるだけでその後の経過を診察してるようなものだし」

そういえば加賀見さんにも「倒れるぞ」と言われた覚えがある。

「便利だね、可視って。ねえ、ひもって一体どんなふうに見えるの？」

「ああ、ううん、……、透明で、そこだけ景色が少し歪むつつつか、

うまく表現出来ねえけど」

「ガラス管みたいなイメージ？」

「そんなところだ」

頷いたシユウの斜め後ろで、私は回廊の左右を眺める。部屋を示すタイルの表面は光沢を帯びていて、それぞれ鮮やかな色彩を放っていた。

どれもがはつきりとした、わかりやすい色だ。やや朱に近い赤、黄みの強い橙、艶のある漆黒、淡い紫、紫みを帯びながらも濃い青……。

決して、紛らわしいとか区別がつかないということはない。

「リール—— ひもを繋ぎ合わせたりたぐり寄せたりする機能はさ、人間誰しもが持つてるんだ。でもそれは通常、目には見えないういし意思に従って使うことも出来ない。オレ達は多分、通常よりもひもに敏感な人間なんだよ」

「だから見えたり繋ぐことができたりするってこと？」

「そう。でも敏感ゆえに、たまに休ませることが必要になる。ジジイも言ってたけど、この施設は外界からある程度遮断されてるからな。滞在するだけでも充分症状の改善にはなる」

淡い紫色のタイルを前に立ち止まった彼は、ポケットから鍵を取り出した。はじめからこの部屋を観察するつもりで持っていたのだろう。

「あと数日休めば回復すると思うぜ。そうしたら、翠川に最終チェックをしてもらって退院になる」

「……入院しないとどうなるの？」

「体調を崩すくらいならまだいいけど、バックラッシュを起こせば命に関わる」

「バックラツシュ？」

「そう。ひもがメチャクチャに絡まる現象のことだ。絡まった糸は切断するしかないし。基本的に一度切れたひもは再生しないからさ、事態は最悪なんだよ」

想像すると胃の当たりがむかむかして、気持ちが悪くなった。やはりひもに対して敏感だからなのかもしれない。

「『リーラー』ってのは釣り竿のリール……糸を巻き取るアレにひっつけた単語なんだ。それと同じで、バックラツシュも釣り用語」

「へえ。じゃあ、最近になって出来た言葉なんだね」

「ああ。うまく言い当ててるだろ」

シュウは覗き込むようにしてドアを開いた。籠っていた生臭い匂いが、どろりと流れ出てくる。

「う……」

同時に顔をしかめた。

室内には遺体発見当時と同じく、おびただしい量の血痕が床や壁一面に残されている。デスク、ベッド、さらにいえば扇風機の羽根にまでべつとりと。それは発見当初と比べて、どす黒さが増したような印象だった。

壁に歩み寄ったシュウは右手だけにビニール手袋をはめ、指先で飛沫のひとつに触れる。そこで何かを確信したようだった。

「……ソフィが殺害後ここに運び込まれたってのはほぼ確定だな」「どういこと？」

手の甲で鼻を押さえながら問う。

「あのと時遺体の頭部で血液は凝固していた。にもかかわらず、壁の飛沫は固まっていなかった」

確かに、彼女の頭にはザク口状のかたまりがあつたと記憶している。対し、壁の血痕はてらと光を反射していた。そうか、あれはまだ液状、だったのかもしれない。

思い出すと、喉の奥にせり上がってくるものがある。思わず俯いて室内から目を逸らした。これ以上留まったら、今度こそ嘔吐してしまうかもしれない。

「つまり犯人は別の場所で殺害を実行した後、彼女の血液を保管しておいて—— 多分、抗凝固作用のあるものを混ぜておいて—— 遺体を運んだ後、いかにもここで殺人が行われたかのようにそれをぶちまけたんだと思う」

「どうしてそんなこと、わざわざ」

「畠が証言した通り、殺害時刻に廊下を行き来したものはいなかったわけだから、アリバイ工作だったのかもしれない。でも、いつ運んだんだ……？」

ぶつぶつと独り言を呟くシュウの顔は、きつとしかめっ面になっているだろうと思う。

「抗凝固剤は、薬品なら下の処置室にある程度揃ってるから、知識さえあれば誰でも入手可能だったわけだよな。今時ネットで調べりやすく分かるし。ということは、誰かが特別怪しいとも言い難いか相当狡猾な……いや、それなりに考えて行動しているものの、さほど計画的でもない、か……」

これが以前から綿密に練られた計画だったのかという点について

は、私も疑問に思う。

ソフィの部屋が綺麗すぎた点は犯人の迂闊さを否めないし、それにこうしてどんどんシュウが糸口を掴んでいるところを見ると、どうにも穴だらけといった印象なのだ。

まるで、ここへ来て慌てて準備をして取り掛かったような――
――若干、衝動的というか。

「やっぱり香月は入らなくていい。そこで資料でも見ててくれ」
「う、うん」

入れと言われても到底無理だ。室内を直視することはおろか、すっかり足がすくんでしまつて動けない。対しシュウは慣れた様子で部屋の内部を物色し始めた。

頼もしいけれど、こんな事態に慣れているというのは別の意味で恐ろしい。同じ歳だというのに、彼は普段どんな生活を送っているのだろう。

吐き気に耐えながら、少しでも気を逸らそうと手元の資料に目を滑らせる。そこにはいかにも事務的に、メンバーに関しての情報が記されていた。

―― 加賀見 かがみはくしゅう 白秋／男／四十一歳、独身、リール協会日本

支部副会長、可視、リーラー／以下秘匿

補佐：滝口 たきぐち 栞 しおり／女／二十五歳、独身、ライター

白秋……加賀見さんの名前としては意外性があるなと思った。随分和風だ。フリルブラウスとつり合いが取れない。いっそ片仮名でエドワードとでも記されていたらしっくり来たと思う。それはそれで似合いすぎておかしい気もするけれど。

ふと、彼と同じ名の北原白秋を思い出して、隣の部屋のタイルに視線を振った。ラピスラズリのようにやや赤みを帯びた深い青、確

かこんな色を瑠璃と言うのだ。そして『瑠璃晴天の空の色』と詠ったのは北原白秋ではなかっただろうか。

……いや、今は無駄なことを考えている場合じゃあない。

こうして資料を先へと読み進めたものの、私は再び加賀見さんの行に視線を戻した。そういえば彼は副会長なのだ。やけに尊大にかまえてはいるけれど、副、とつくからにはその上に会長がいるのだ。一体どんな人物なのだろう。この組織にいれば、いつかは顔を合わせることもあるのだろうか。ぼんやりと厳格な老紳士を思い浮かべ——もちろん勝手な想像だけれど——再び資料を捲った。

—— 翠川 みどりかわ 玄冬 / 男 / 四十一歳、配偶者あり、協会認定医師、可視、リーラー。補佐：草木 なつ（くさき なつ） / 女 / 二十一歳、可視、独身。元・看護師。

—— 志津木 しづき 学 / 男 / 五十三歳、既婚（妻子あり）、印刷所工員、可視、リーラー。現在離婚調停中。

—— 伊倉 いくら 昌生 / 男 / 二十五歳、独身、婚約者あり、商社勤務、可視。

—— ソフィ・ヴォークラン / 女 / 十六歳 / フランス国籍 / 以下秘匿

—— 畠 はた 徳仁 / 男 / 十五歳、中学生。母子家庭。

—— 長谷 はせ 悠弥 / 男 / 十九歳、独身、医学部中退、右目のみ可視。妹：里奈も同様に可視（昨年死亡、享年十歳）

……えっ。短く声が漏れてしまった。
思わず目を疑った。墨色の文字を何度も繰り返し辿って確かめる。

間違いない。

妹さんがいることはユーヤさん本人の口から聞いたばかりだ。けれど、まさか亡くなっているなんて。

「何かわかったか？」

一通り内部を調べ終わったのか、シュウが紫の部屋から姿を現した。首を傾げ「どうした？」不思議そうに目を細める。

「……これ」

文字を示した指先が、微かに震えている。

「ユーヤさん、妹さんが亡くなって、それに、医学部中退ってどういうことだろう」

即座に私の手から資料を奪い、シュウはぐつと眉間に皺を寄せた。そのときだった。

「ふうん。もしかしてふたりで仲良く証拠隠滅？」

そう言って、螺旋階段から姿を現したのは伊倉さん。

「あ？ どういう意味だ」

シュウはあからさまに不機嫌な顔をして、私の視界を遮るように立つ。

「どういう、って、そのままの意味だよ。香月さんだろ、ソフィを

殺したの」

回廊の空気が、一瞬にして凍り付いたような気がした。

12・切断者

―― 私が、殺した……？

「おまえな、可視なら見りや分かるだろ。彼女と被害者の間にはひもがない」

「だからって犯行に関わっていないと判断するのは尚早なんじゃないのかな」

伊倉さんは逃すものかといった体でこちらを睨んでくる。レンズ越しの視線鋭く、私をますます縮み上がらせる。

知的で穏やかそうな人だと思っていたのに、その印象はもう微塵も感じられない。疑心暗鬼に陥ると人はこうも変わってしまうものなのだろうか。置かれている状況の異常さに改めて気付かされたようだった。

にもかかわらずこの場を動かなかったのは、シュウがさりげなく庇ってくれているからではなく、単純に私が逃げ出すだけの勇気を持ち合わせていないから、だった。

私は臆病者だ。

自分という存在にも、自分の考えにも発言にも行動にも、全くと言つていいほど自信がない。自信を持つて主張する気が起きない。どうせなくしてしまうのだからと、最初から諦めてしまう。

死を告げられたあのとき―― お兄ちゃんの体から数々のものが取り出されたとき、本当に喪失したものは私の中身だったのかもしれないと思う。

「どこかで聞いたことがあると思ったんだ。小泉厨つて名前」

「だろうな。オレ、結構有名人だし。でもサインはやらないぜ」

いたずらっぽく前歯をのぞかせたシュウは、彼の怒りをうまくかわそうとしているようにも見えた。そっちじゃないよ、と即座に言い返す伊倉さんの口調には厭味がこめられていた。

「僕が知っている小泉厨は、日本支部唯一の‘シザー’だ。そうだろう?」

瞬間、シザーと言う単語に反応するように、目の肩がぴくりと動いた。

「どうしてもつきり言わなかった? シザーの役割は協会員なら誰もが知っている」

「……言いたくなかったただけだ」

「明かしておいたほうが捜査しやすいだろうに、言いたくなかったんじゃないのか」

シュウはぐっと押し黙る。つい数分前まで好戦的だった態度があらさまに萎むのを見て不安になった。

「ねえ、シュウ、シザーって……?」

制服の裾をひっぱり、ひかえめに問う。協会の用語だろうとは思えけれど、初めて耳にする単語だ。

「ひもを切断し回収するものことさ。へえ、君は知らなかったの?」

答えたのは伊倉さんだった。

そうだ、リアル協会の説明のなかでも聞いた気がする。協会には

ひもを知覚し、繋ぎ——そして切断する者達がいる、と。あのときは自分の能力を理解することで精一杯だったけれど、まさか、シュウが？

「シザーは協会内における犯罪者を見つけ出し、裁き、世間から抹殺する役割を担っているんだ」

「世間から抹殺……」

「そう。しっかり覚えておいたほうがいいよ。リーラーと比べて彼らは希少だし、死神とか死刑執行人なんて呼ばれることもあるからね」

死神、死刑執行人——顔をしかめなくなるような酷い単語に返す言葉はなかった。途端にシュウの顔が見られなくなる。もちろん怖いと思ったからではない。聞かなければよかった。

伊倉さんのその先の言葉を遮るように、シュウは低く問う。

「香月が犯人で、オレがその証拠隠滅に手を貸したとも言いたいのか」

「ああ、秘密裏に処理をして庇っているのかな。もしかして死神だつてこと、彼女には隠しておきたかったとか？　なににせよ、僕は君たちが一番怪しいと思ってるけどね」

「てめえ、ナメたことをぬかしてんじゃねえぞ」

「しゅ、シュウ！」

顔面間近まで迫るという威圧的な態度に出たシュウは、今にも右腕を振り上げてしまいそうに見えた。慌ててその体を引き戻す。沈黙されるのも不安だけれど、突然飛びかかれるのは尚更心臓に悪い。

「悪いけど、僕だって何の証拠も無く言ってるわけじゃないから」

部屋の横にはめ込まれた紫色のタイルをノックする、伊倉さんの右手は細身で骨張っている。お兄ちゃんの手もあんなだったな、と思った。

「これだよ。香月さんの部屋はたしか、白だったよね」

「……はい」

「それを利用して、誘い込んで殺したんじゃないの」

「誘い込んだ？ 私が、ですか」

「そう」

血の気が引いていくようだった。

さつきも同じようなことで、ユーヤさんが志津木さんを犯人だと決めつけていたけれど、今度は――私。

「ソフィははじめて病室に向かったとき、白いタイルを紫と見間違えたんだ。そしてそれこそが、君の仕組んだ罠だった。そうだろう」

斜に見下ろされ、否定する言葉も思い付かないまま、ただ恐ろしい気持ちだけが膨らんでいく。

「タイルを塗り替えたりする話なら、不可能だと思うぜ。証拠隠滅の時間がない」

「塗り替える必要はない」

彼は再び白いタイルを指先でこつこつと叩き、続けざまに窓の上部へと人差し指を向けた。

示した先はステンドグラスだ。

「あそこを透過した光が白いタイルに当たって、紫色に見えたんじゃないのか？」

「あ……！」

確かに、ガラスの色は赤紫から青へのグラデーションだ。その色付きの光が白いタイルに当たれば、時間によっては紫色になるかもしれない。

でも、誘い込んだりはしていない。覚えがない。私はソフィと会話すらしなかったし、ましてや、殺人だなんて。

「……いや、それはありえん」

声がした方向を全員で振り返ると、そこには呆れ顔をしたフリルシャツの男が立っていた。

「加賀見さん！」

「確かに夏の日差しは冬と比べて角度が急だからな。より窓に近い部屋に差し込むという発想までは良いだろう。だがあの時間、光は床へ差し込んでいたはずだ」

その言葉に、私は眉をひそめた。

シユウに連れられてこの回廊を初めて目にしたのは、昨日の朝九時ころだ。そのときすでに光は足元に落ちていた。そして現在午後四時過ぎ、まだ足元にある。

ということはその間、光はずっと床の上にあったということになる。

ソフィが部屋に入っただのは朝食後に散歩をしてからのこと、昼食まではまだ間があった。両方を照らし合わせて考えてみると、タイルに色光が当たっていた可能性はないも同然だ。

「……か、鏡で反射させるとか、トリックを使えば」

「そんなものが廊下に置いてあれば、誰だって怪しいと思うだろう」
「ですが」

「君は相当な頑固者だな。まあ、私も人のことは言えないが」

フリルを弄る指先は、男性とは思えないほど細くて綺麗だ。加賀見さんはふんと短く鼻を鳴らす。

「では聞こう。螺旋階段から見て、白の部屋は一番奥に位置している。あちから歩いて来た人間が本物の紫色のタイルを通り過ぎてまで、ここに到達すると思うか」

たたみかける口調は演説をしている時より若干丁寧で、聞き分けのない子供に教諭しているようでもあった。

「残念ながら、人の目というのはそれほど単純なものではないのだよ。時には網膜に依存せずに色を知覚したりもする。例えばタイルから少しでも色光がずれていたなら——　　たちまち見えは変わるだろう。わかるか？」

「……」

「この極限状態では焦るのも無理はない。だが少し落ち着きたまえ。君の意見は恣意的に陥っている。なぜシュウの関与にそれほど固執するのだ」

「ぼ、僕は」

「恨みでもあるというのか。そうではなからう」

「僕は、ただ——」

冷静になれ、とたしなめる加賀見さんに、伊倉さんは奥歯を噛みしめながら背を向ける。すぐごと部屋へ戻っていく様は、敗北者のようだった。

誰もが誰かを疑っている。エアコンが効ききれない回廊は汗が滲むほど暑いのに、とても寒い場所に来てしまった気になる。

自分だってそんな目で彼らを見ていたのだから、仕方のないことなのかもしれないけれど。

「よし、では情報の整理をしようではないか」

揚々と私の部屋のドアノブを掴む加賀見さんの右手が憎い。どうして他の部屋を使おうとはしないのだろう。がっかりしながらそのあとに続くと、背後でドンという激しい衝突音が響いた。

驚いて振り返ると、壁に打ち付けられているのはシュウの右手だった。殴った、のだろうか。

うつむきがちで表情まではうかがえない。しかしその肩は、わずかに震えているように見えた。

いつも飄々として、気怠そうなシュウ。

そんな彼の内側に人知れずくすぶる感情があったことに、私はようやく気付こうとしていた。

13・神はサイコロ遊びをしない

あれは、まだ肌寒さの残る春の朝のこと。

初めて袖を通した真新しいブレザーは肩にずしりと重くて、私にふと、引力の存在を思い出させた。普段はすっかり忘れていくせにその時ばかりは妙に納得して、ニュートンは凄いなと独り言ちたくらいだ。そして私は初登校の忙しい朝にもかかわらず、佑お兄ちゃんの話を芋づる式に思い出したのだった。

アイザック・ニュートン、その名から思い浮かぶのは通常力学で、りんごがぽとりと地に落ちる瞬間を想像する人間が大半だと思う。実際私もお兄ちゃんに教えてもらう前からそのくらいは知っていた。しかし、佑お兄ちゃんのニュートンに対する興味はそういう一般的なことから少しずれていたように思う。いや、どんな分野においてもコンパスの針を見当違いな場所に置いて円を描くような人だった、というのが正しいかもしれない。

「僕はニュートン派かな」

その日色彩のことに話が及ぶと、彼はさすがに顔でそう言った。別に何派でもかまわなかった。

「派閥があるの？ 政治家みたい」

「どの世界にもあるよ。もちろん色の分野にも、歴史上いろいろとね。光の本質は波動か粒子かとか、色覚は三原色か反対色かとか。でも僕は、ニュートンに対するゲーテの反発が最も興味深いと思う」「ゲーテって小説家じゃないの？」

先日『ファウスト』を読もうとして、あまりの難しさに二十ページ目で放り投げたばかりだ。今もきつとベッドと勉強机の間に落っこちていると思う。なぜそんなものに手を出したのかと言うと、…彼の部屋にゲーテの本があったから、なのだけれど。

「うん、一番有名なのは文豪としてだよ。ゲーテは『色彩論』という著書の中で、色彩は人間の想像力に左右されない」としたニュートンの考えに真っ向から反論したんだ」

「ふうん。それだけ聞くと、ゲーテのほうが正しいような気がするけど」

色と心理は密接に結びついている——しょっちゅうそんなことを言っているのはお兄ちゃんなのに。

「どちらが著しく間違えているとか、ダメだとかいうことじゃないよ。僕はニュートンの、色彩と音楽を関連づけた考え方が好きなんだ」

「音と色？」

「そう。音の調和が空気の振動の比から生まれるように、色の調和も視神経を通って脳髓に伝達される震動の比から生まれるんじゃないか、って」

恒例の難しすぎる演説が始まってしまった。ファウストと同様に投げ出してしまいたくなる。

彼の話は、大概が進むに従って難易度を増していく。とはいえ最初の一言めには意味不明の単語を発するから、解説を求めずにはいられない。他には対処のしようがないのだ。

……こんな話がしたいわけじゃないのに。

おばさまのレモンティーをひとくち飲んで、ソーサーにカップを戻す。

そろそろ自分のことをどう思っているのか、はつきり聞いてみたい気持ちはある。抱き締められたのだから嫌われてはいないと思うけれど――けれど、女の子として好かれているかどうかは怪しい。どちらかというところ、妹として可愛がられているような気がする。

「あ、あの、お兄ちゃん、あのね」

「わかりにくかった？ オクターブで循環するところから話そうか」
「……うん」

「どうしたの、言ってごらん。お腹空いた？ ケーキ、食べたいなら買って来ようか」

「ちがうよ、そうじゃなくて……」

そうじゃ、なくて。だけど。

「あの、ね」

「うん？」

「あのね、お、お兄ちゃんはその、もっと……未来のこととか、どう思ってるの？」

遠回しにしか聞けない。遠回しすぎて尋ねている本人にもよくわからない。だから彼が独自の解釈をしてくれるのは当然のことかもしれない。なかった。

「古典論じゃないとしたら……、神はサイコロ遊びをしない、って僕も思うけど」

「は……？」

「アインシュタインの言葉だよ、コペンハーゲン解釈に対する。僕もあれは好きじゃない。量子論の中では、ひもと多世界解釈が好きだな」

「たせ……？」

「うん、パラレルワールドみたいなものだよ。世界は分岐しているんだ」

どうしてこう、毎回ややこしいほうに話が転んでしまうのか。

こんなことが何度かあって、結局、私は彼が亡くなる直前まで気持ちを打ち明けることが出来なかった。

環境にも恵まれすぎていたのだと思う。お兄ちゃんが親しくしている異性は見たところ私だけだったし、部屋にあげてもらえるのも私だけだったし、他の誰よりも近い関係にいるのだと自信を持って言えたから。

だから逆に、もし告白をして玉碎してしまったら……ぎくしゃくしてしまったら、嫌われてしまったら、優しくしてもらえなくなったら、と思うと怖くて——このままで充分幸せだからいいや、と簡単に諦めてしまったのだろう。

私は幼なじみの沖永佑を両手でしっかりと掴んでいた。片手ですら離す気はなかった。だから恋人としての沖永佑を新たに掴むことは出来なかったのだ。そのことに、もっと早く気付くべきだった。もしあのとき素直に気持ちを伝えていたら未来はどうなっていただろう。いや、彼が言うように世界が分岐しているのなら、パラレルワールドには幸せに笑い合う私達がいるのだろうか。

それなら私は何故、この世界で生き続けなければならないの？

朝からそんなことを考えた高校入学の日。重苦しい門出になりそうだった。

カーテンを中途半端な位置で放置したままリビングへ降りると、朝食だけがテーブル上にぽつんと残されていた。すでに家族は全員が家を出た後らしい。いつものことだけれど。

彼を失い家族との絆が途切れた日から、孤独は砂のようにさらさ

らと、私の上に積もり続けている。

「すまなかつたな、私の大切なシユウが君を驚かせたようだ」

加賀見さんはシユウを黒の部屋に送り届けに行き、しかし数分後には戻ってきて、私の部屋の窓辺に軽くもたれて落ち着いた。つまり現在私と加賀見さんはふたりきりなのだ。

何を話して良いか分からずうろたえていると、彼は協会の話をした時と同じようにぽつりぽつりと、他言しないという条件でシユウのことを語りはじめた。

特にこちらから望んだわけではない。切り出したのは彼のほうだ。こうして私はクラスメイトが誰も知らない、シユウの真実を手にしたのだった。

伊倉さんの言葉通り、やはりシユウは日本支部における数少ない切断者——つまり‘シザー’であり、協会内でおきた犯罪の捜査と裁きを担当しているらしかった。

「可視やリーラーと同じように、シザーだって協会の立派な財産だ。隠すようなことではないのだが、シユウはあまりおっぴらにはしたくないみたいでね」

わからないこともない。自分が同じ立場なら、その役割ですら放棄したくなるだろう。

「君はこの建物内にいて、食堂だけが妙に質素だとは思わなかったか」

「……あ、はい」

言われてみれば二階部分や廊下とは違い、あそこだけ造りが粗雑だ。テーブルも椅子もその辺で切り出してきただけの木材だし、ド

アはないし、漆喰の壁にも壁紙や曲線の装飾らしきものは一切なかった。

「以前は、それは見事なアールヌーボー様式の室内だったのだがな。シュウが初めてここに訪れた際、豪快に暴れて余すところなく破壊してくれたのだよ」

「ええ？」

破壊つて。

「修復しようにも職人が継承者もなく亡くなっていてね。代役が見つかるまではと、ひとまず最低限の修復に留めてあるのだ」

私はせわしなく瞼を開閉させる。

「どうしてシュウがそんなこと」

「あのときの奴といったらもう、誰とも関わりたくないと言った様相でな。自分の能力について理解したとたん、手をつけられないほど暴れてくれたのだよ。受け入れられなかったのだろうな」

「シザーであることを、ですか」

無理もないけれど。死神、だなんて。

「それだけではない。シュウは生まれもつての切断者だ。だがそれを理解するまえに——切ってはならぬものを切っていてね」

「切ってはいけないもの？」

「……奴と家族を繋ぐひもだ。ここに来た日、シュウはすでにひとりだった」

思わず息を止めて口元を覆った。シュウが、ひとり？ 予想もし

なかった。学校でもそんな噂は聞いたことがない。しかし、もしやお金がないというのはそれが原因だったのだろうか。

「随分地方を転々としたらしい。がりがりに痩せた子供のクセに、腕っ節ばかりは妙に強くてね。問題を起こしてばかりだったから、名字も何度かわつたらしいのだ」

ああ。シユウが名字に無反応なのは、呼ばれ慣れていないからだったのか。

切断したひもは再生しない、と最初に教えてくれたのはシユウだった。家族とのこと、どれだけ絶望しただろう。想像もできない。

「希少な能力を持つ者は通常中枢に処遇を委ねるのだが、本部に連れて行くのにもなかなか骨が折れたな」

「そう、ですか。——あの」

「なんだ。私がシユウに夢中になった理由を知りたいか」

「いえ、それは別に……」

興味はない。

「ただ、ひものことが少し気になって。どういう基準で繋がったり切れたりするのかなって」

ああ、と気付いたように彼は壁から体をはがす。

「話していなかったな。ひもは接触さえあれば繋がる可能性があるものなのだよ。だが接触にもいろいろと種類があるだろう、対面せずとも電話で話したりはできるし、文書でのやりとりなども当然そのうちに含まれる」

するとリーラーはその、接触の肩代わりをする人間ということになるのだろう。

「だが逆に、接触があったにもかかわらず繋がらないこともある。その場合は近くにいたのに会話すらしなかったとか、小さなズレが見られるケースが多いな」

だから繋がらなかったのか。私は妙に納得してソフィの儂い笑顔を思い浮かべた。

彼女とは同じテーブルで食事をし行動を共にしていたにもかかわらず、会話には及ばなかった。すれ違いと言えなくもない。

ひも—— 私ははじめ‘縁’と捉えていたけれど、もしかしたらもう少し強い結びつきのことを指すのかもしれない。単なる縁なのだとしたら、接触などなくても繋がるだろうし。

「切れるのは……、一番わかりやすい例としては死に別れたときだな。切れ端は残るが、ぶつつりといく」

「そう、ですか」

私とお兄ちゃんのひもはもう切れてしまっているというわけか。あまり、想像したくない。

「しかしひもは指紋やDNAに似て、それぞれに特徴があり他と一致するものはないからな。死後でも被害者のひもの型さえわかれば、容疑者特定に役立てることが出来る」

「じゃあ、シユウはソフィのひもの切れ端を見分けていたんですね」「ああ。奴ほど厳密に区別をつけられる可視はそうそういない。いや、シザーの特殊能力とでも言うべきか」

加賀見さんはさらに言葉を繋げる。

「まあ、ひもの繋がりというのは他人と通じ合ったりするための――
――系電話の糸みたいなものだと思ってほしい。切れたからと言って二度と巡り合わないわけではないが、繋がりがないのだから通じ合うことは困難になる。曖昧と言えば曖昧なものなのだ」
「わかりました。ありがとうございます」

長引きそうだからそこで締めくくった。実際にはいくつか疑問が残ったけれど。

例えば可視の人達はどんなふうにそれを結びつけているのかとか、私がひもを知覚出来ないのに結べるのはなぜなのかとか。それ以前にひもはどんな物質なのかとか、可視領域にあるものなのかとか、要するに細かい疑問だ。

「ところで君、沖永佑のことだが」

加賀見さんがそう言って腕組みをしたとき、部屋のドアを叩く音が聞こえた。

「私だけど、入っても良いかしら？」

栞さんだ。

開いてますよ、と答えた数秒後、姿を現した彼女は大きな荷物を抱えていた。紙の束がそこからはみ出している。シュウが頼んだ資料の類いだろう。

「あら、ふたりだけ？ シュウくんは」

訝しそくに室内を見渡す彼女を見て―― 詳しく言えば、扉を開くところからの一連の動作を見ていて―― 頭の中でスコンと何か

の栓が抜けたような気がした。

「―― ああ！」

声を上げて腰を浮かす。わかった。わかったのだ。

伊倉さんやユーヤさんの言う通り、ソフィが他の部屋に誘い込まれたのだとしたら、それを可能にした方法の一部が。

「どうしたの？」

「私、シユウのところに行ってきます！」

その場を転げるようにして飛び出し、黒の部屋へと一直線に向かう。しかし直後、加賀見さんが「抜け駆けは許さぬ！」と鬼の形相で追い掛けてきた。

そんなつもりは毛頭ない。ないが―― 謎解きの先にはお兄ちゃんの真実が待っているから、シユウに会うことをやめるわけにはいかなかった。

「シユウ、開けて！」

返事はない。ふて寝でもしているのかもしれない。

「開けて、私、わかったの。ソフィが別の部屋に誘い込まれたときのこと！」

叫びながらドンドンと激しく扉を叩く。ひらめいた衝撃と早く伝えなければという焦りで、私はすっかり失念していた。

この言葉を犯人が聞いているかもしれないという、危険極まりない可能性を。

14・状況不利

「……眠い」

亀のような動作で姿を現したシユウを、強引に押し戻して室内に入り込む。

私が焦っているときに限って、彼はのんびりとかまえているような気がする。それで余計に焦ってしまうのかもしれないし、逆に言えばこんな心理状態だからこそますます暢気さが際立って見えるだけなのかもしれないけれど――どちらにせよ歯痒い。

しかし私に、面と向かって文句を言う勇氣があるはずはなかった。それは何も、今回に限ったことではない。いつだってそうなのだ。誰かに文句を言いたくなくてもせいぜい眉間に皺を寄せるとか、語気を少々荒げるだけで最終的には流されることしかできない。

だから実際のところ、私は情けない自分に一番苛々しているのだと思う。

「邪魔するぞ」

当然のような顔をして、加賀見さんも私の後に続いた。遅れて大量の荷物を抱えた栞さんも姿を現したものだから部屋はたちまち満員御礼、窮屈なだけならまだしも蒸し暑くて参ってしまう。

各部屋にはきちんとクーラーが備え付けられているものの、役に立っているのかどうかは甚だ疑問だった。石造りだからだろうか、熱気が逃げずにこもっているような状態なのだ。

「あのね、ソフィが別の部屋に誘い込まれた時のことなんだけど」

ベッドの隅に腰を下ろしつつそう切り出すと、シュウは椅子に逆向きで跨がりながら両目を大きく見開いた。虹彩の淡いグレーが綺麗だ。

「何か分かったのか」

「うん。鍵なんだけどね」

顔の前に掌がずいと突き付けられる。続く言葉を思わず飲み込んだ。

「ちょっと待て、メモする」

シュウはそのままの格好でポケットをまさぐった。「ん？ あれ、メモ帳」そういえば。

さっき、資料と一緒に私が預かったのだった。そっくりそのまま部屋に置いてきてしまった。鍵もかけて来なかった気がする。

「ごめん、部屋に置いてきちゃった。すぐにとってくるね」

「あ、ああ、頼む」

ぎこちなく頷くところを見ると、預けたほうもすっかり忘れていたのだろう。私は三人をシュウの部屋に残し、ひとり自室へと駆け戻った。

きっともうすぐ犯人がわかる。シュウが暴いてくれる。そうしたら、お兄ちゃんのことわかる。そう思うと、足取りは軽い。トンネルの出口が見えて来たような、夜明けが近いような、そんな気がした。

机の上の資料を手にし、さて行こうと振り返る。瞬間、視界の隅に見覚えのないものが映り込んだ。

ベッドの下、小さく丸められた薄汚い布。草木さんが清掃をした

際に忘れた雑巾だろうか。屈んで拾い上げると、それが施設で貸し出されているパジャマだとわかった。

こんなところに放置した覚えはない。疑問に思いながら広げたそこには、黒っぽいものが一面にこびりつき固まっていた。

絵の具だろうか、いや、だとしたらもつと化学的な匂いがするはずだ。何故だか生臭い。まるでさばいた魚のような、生き物の……。

戦慄した。そうだ、これは血液だ。しかも豪快に飛び散ったあとも見受けられるし、尋常な量ではない。これほど出血するなんて、まさか。

まさかこれはソフィの――。

「ひ……っ！」

床に投げ捨て、よろけながら後ずさる。全身が総毛立っていた。どうして。どうしてこんなものが、私の部屋に。

す――捨ててしまおうか。いや、ばれば証拠隠滅をはかったと思われるだろう。置きっぱなしにもできないし、こそこそ隠し持っていればますます怪しい。洗ったって落ちそうにないし、何とかして片付けてしまいたいけれど、方法なんて思い付かない。

何とかしたいと思えば思うほど、どうにも出来ないような気になる。震えながら嗚咽を飲み込むと、かわりに冷や汗がどつと溢れた。どうしよう。

と、その瞬間私の脳裏にはこれまで支えとしてきたお兄ちゃんとは全くの別人が浮かんた。金の髪に囲まれた、気怠そうな表情が。

「……ん、っ」

息を止め、目をそらし、血だらけのそれを指先でつまみ上げる。

本当は触れたくなどなかった。気持ち悪い。恐ろしくて、噛みしめた奥歯がガチガチと音を立てる。

でも、シユウなら何とかしてくれる。きっと助けてくれる。

それは彼が身近な人間だからというわけでも、シザーだからという理由でもなかった。この時の私は、もうすっかりシユウを選び、信用しきっていたのだ。

そして私はあるうことか血まみれの寝間着を指先から下げ、一切隠すことのないまま―― 部屋の外に飛び出してしまったのだ。った。

「こ、香月さん」

声のほうに視線を振ると、そこには志津木さんの姿があった。見つめる先には赤黒い染みだらけのパジャマがある。ぎくりとした。まずい。喉の奥で呼吸がぐつと止まる。

「それ、もしかして」

その目はすでに猜疑に満ちていた。穏やかで人の良さそうな目尻は固く凍り付いている。

「ち、ちがいます。これ、気付いたら部屋にあって」

首を振って否定する私を凝視し、彼は恐怖の表情で半歩下がる。信じてもらえていないことが、はつきりとわかった。

「志津木さん、私――」

「長谷くん、伊倉くん！」

あとはもう、否定なんてする暇もなかった。部屋から飛び出して

きたふたりは事態を察すると、鬼の形相で飛びかかってきた。

そうしてあっという間に取り押さえられた私は、一階の食堂へと連行される羽目になったのだった。

15・シザーの権限を以て

現在施設内にいる人物を怪しいか怪しくないかで分類したら、私は確実に前者に含まれるだろう。誰の目から見てもそう、間違いない。

血だらけの寝間着を手にした姿はまず志津木さんに見つかり、さらに彼が呼んだ伊倉さんとユーヤさんにも目撃されてしまった。自分のものではないと主張しても、当然のように聞き入れてはもらえなかった。

悲しいことにあれは犯行の疑いを抱かせるには充分すぎる代物で、さらに私の言い分の信憑性をたちどころに奪う効力を持っていたのだ。

逆に自分が彼らの立場だったとして、やはり聞く耳は持たないと思う。仕方のないことだ。とはいえ身に覚えのないことを、やりました、とは言えない。

だから誰も信じてくれないとわかっていても、私は弁明し続けるよりほかなかった。

「私じゃありません。何もやってません。気がついたらそれが部屋にあって……本当に知らないんです」

「どうだか。俺がやってない、って言ったとき、そのカレシは何て言っただけ」

親切だったはずのユーヤさんにまで冷たくあしらわれ、消えてしまいたい気分になる。

馬鹿な事をした。少し考えればわかることだ。持ち運ぶなんて危険極まりない行為は避けて、部屋に置いたままシユウを呼びにいくべきだった。

あれを発見する直前、白の部屋は鍵が開いた状態で放置されていた。だから犯人は簡単に忍び込めたし、そうして私の寝間着と犯行時に使用した寝間着を入れ替えたのだろうと思う。

けれど——しかしそれは単なる憶測で、裏付けとなる証拠があるわけでもない。説明したところで、なるほどそうかと納得してもらえない可能性は低い。

「この期に及んで庇う気はないだろうね、小泉くん」

静かな声でいいながら、伊倉さんは不機嫌そうに頬杖をつく。しかしシユウはこの部屋に入っすぐ私の脇に座ったきり、顔をしかめて黙り込んだまま、尋ねられたことに素直に答える気はさらさないようだった。いや、それ以前に聞いてすらいないのかもしれない。

「おい小泉、何か言ったらどうなんだよ」

「シユウは関係ありません。私、私だって何も知りません……」

同じような問答がかれこれ四十分以上も続いている。

犯人だ犯人だとも言われ続けると、もともとない自信がますますなくなっていく気がした。間違えているのは自分かもしれないというあらぬ疑いが頭をもたげてくる。取調室内の容疑者にでもなった気分だ。世のえん罪はこんな、感覚の麻痺がきっかけで生まれるのだろうとも思った。

するとようやくシユウが長い沈黙を破り、重い口を開いたのだった。

「……ジジイ、ちょっと」

加賀見さんを見上げ、親指で廊下を示す。人気のないところで話

したいことでもあったのだろう。しかしその行動は、伊倉さんと志津木さん、そしてユーヤさんの三人によって素早く阻まれてしまった。

「これ以上立場を悪くしたくないなら、疑わしい行動はひかえたほうがいい」

もつともだ。私の協力者としてみなされている以上、極力大人しくしていたほうがいいに決まっている。加賀見さんと栞さんだって同様に香月一味として犯人扱いされているのだから尚のこと。

クソ、とシユウは齒痒そうに足をゆすって天井を見上げた。彼にももう手だてはないのかもしれない。絶望的だ。

「じゃあここでいい。ジジイ、質問に答えろ」

「なんだ。趣味ならアンティーク収集だと何度も教えただろう」

「それは二度と教えなくていいと何度も言った」

「とくにイギリス、エインズレイの蝶々ハンドルは喉から手が出るほど欲しい。あれは実に美しいぞ。貢ぎ物としてなら喜んで受け取る」

「聞け」

この状況でまだ愉快的掛け合いができるとは、暢気なのか――
――慣れているのか。

しかし私は笑えなかったし、もちろんその場の雰囲気は和らぐとあったこともなかった。

「二階の部屋分けに使われているタイルと同じ色のものは用意出来るか。色紙でもなんでもいい」

「カラーチップならDICとPANTONEのものを一揃え持ち歩いている。色票が小さくても良いなら近似色を提示できる」

「それでいい。すぐに準備してくれ」

「わかった。おまえの望みならなんなりと叶えてやろう。礼はもちろんキ」

「早く行け」

渋谷ではあるけれど、こうして加賀見さんは二階へと向かったのだった。長谷さんの提案により、伊倉さんの監視付きで、だけれど私の所為だ。ひたすら申し訳なく思う。

シユウは肩を上げ下げしつつ気怠そうに、今度は草木さんへ声を掛けた。

「聞きたいことがある。少しいいか」

部屋の隅で翠川先生にコーヒーを差し出していた彼女は、丸いトレーを胸に抱えたまま軽い会釈で応える。

「はい、私でよろしければ」

「二階に待機している畠と接触したことはあるか」

意外な質問だったのか、草木さんはええ、と目を丸くした。

「ここにいらしたときに直接部屋の鍵をお渡ししました。でもお食事は持参なさっていて、用意はいらわないとのことでしたので以降はお会いしていません」

「会話はしたんだな」

「はい。その、お食事のことと施設の案内をひととおり。あ、診察の前に、ドア越しに話し掛けたこともあります。診察には先生だけが入られましたけど」

「そうか、ありがとう。じゃあ他の皆はどうだ？ 畠と会ったことはあるか」

その問いかけに、私と翠川先生を除く全員が「ない」と答えた。なんなんだ、とユーヤさんたちは顔を見合わせて眉をひそめる。私にもシユウが何故そんなことを尋ねるのかわからなかった。畠さんは事件に関して部外者も同然だ。関係を知ったからと言って何か重大なことが分かるとは思えない。目の前のユーヤさんたちも同じことを思ったようで、苛立ちを表すように机上をこつこつ叩いてみせた。

「いいかげんにしろよ。あまり勝手な行動ばかりしていると、お前らふたり、自白を待たずにフランス本部に突き出すぞ」
「オレ達はやっていない。突き出したって無駄だ」

答えたシユウは、ケンカ腰でも、煽るような口調でもなかった。

「シザーである君が側に居る時点で、ひもは無実の証拠にはならないよ」

志津木さんの声にはため息が混じっている。その横で頷くユーヤさんを見るに、全員がもう、シユウがシザーであることを知っている様子だった。

「そのことならもういい。皆、好き勝手に、思いたいように思えばいい」

「なら、もう素直に彼女を犯人だと認めて……」
「香月はやっていない」

きつぱりと否定する。まるで私の無罪を確信しているかのような声色で。

「犯人は他にいる。これからそれを――　ここで明らかにする」

言い切るか否か、皆がシュウへと視線を集中させたのがわかった。両手をテーブル上にゆくりと乗せ胸を張ったその姿は、教室で居眠りをしているときとまるで別人だった。華やかに誌面を飾っているときともまた違う。冷静で集中しきった瞳には余裕さえ感じられる。

こんなシュウ、初めて見る。

「わかった、のかい、犯人」

翠川先生は息を飲みつつ問う。いや、その場の全員が息を飲んでいたと思う。シュウは頷き一旦場の全員をぐるりと見渡すと、静かに席を立った。

そして高らかに宣言したのだった。

「『シザー』の権限をもって、審判開始をここに宣言する」

16・Break through・前

それは世間一般で言うところの『審判』とは少々異なる意味に感じられた。協会内には専門用語が多いから、今回も同様なのだと思う。

何がはじまるのだろう。誰がどんなふうに裁かれるのだろう。予想もつかない。

「いくつか下準備が必要だ」

シュウの声は張り上げているわけではないのによく響く。それがまた、厳粛なムードをよりいっそう盛り上げているようだった。

私はひそかに唾を飲み下す。酷く喉が渴く。翠川先生の手の中にある白いコーヒークップがうらやましく思えた。

「草木さん、花を摘んできてくれないか」

はあ、と困惑気味の声で彼女は答える。この状況で花を、などと言われたのだから当然の反応だ。

しかしシュウは言い直して具体的に指示を出した。花卉が五つの、赤紫の花だとか。

「たぶん入り口の正面に咲いていたと思う」

「小泉くん、何を突然——」

不思議そうに尋ねた翠川先生は、振り返ったシュウに睨まれて途中で口を閉じた。

「今はオレの言葉を遮るな。草木さん、頼む。早く」
「は、はい」

そんな前置きがあつたせいか、慌ただしく出て行つた草木さんが花を手に戻ってくるまで、食堂内の沈黙は保たれていた。庇われているはずの私でさえ、シユウに声をかけるのがためらわれたほどだ。
審判——もう、始まっているのだろうか。開始を宣告されたのだから始まっていないわけではないのだけれど、どうにも現実感が湧かない。

「……自首をするなら今しかない。名乗り出てくれ」

色とりどりの花を手にしたシユウは、そう言つて壁伝いに部屋を周回しはじめる。一周、二周、ゆっくりと確かめるような足音が響いた。

自分ではないとわかっていても、彼が真後ろを過ぎるたび動悸がしてしまう。パトカーとすれ違ったときもこんな気分になるな、と頭の片隅で思った。以前は当然だったそんな日常が、徐々に遠ざかつていくような気になる。

誰も名乗り出ないまま三周目を回り終えると、シユウは手に持っていた草花を無造作に放った。ばさり、色とりどりのそれがテーブルの上に散らばる。まるで、ソフィへのはなむけのようだった。

「本当にいいのか。ジジイ、戻ってきちまうぞ」

気遣うような口調。

私は思わず顔を上げて、シユウの視線の先にいる人物を確認し、目を疑った。まさか。

「いいのかよ、なあ」

遅れてユーヤさんと志津木さんもそちらに目を遣り、信じられない、といった顔をする。当然だ。私だってこの中で最も可能性が低いと思っていた、思いたかった人物だったからだ。

何かの間違いだろう。しかしそんな望みを打ち砕くように、シュウは悲しげな声を絞り出す。

「……、どうしてだよ。どうしてソフィを殺したんだ、栞さん」

隅の席で驚いたように目を丸くした彼女は、え？と言ってわずかに口角を上げた。

「わ、私？ やだシュウくん、何言ってるの。嘘でしょ」

動揺する様子を見ると、ますます信じられなくなってくる。栞さんには何度も親切にしてもらったし、平気で人が殺せる性格とは思えない。事件が起きた時だってあんなに怯えて泣いていたではないか。そうだ、きっと作戦なのだ。真犯人をあぶり出すための演技に違いない。

そう思おうとしたけれど、苦しそうに歪んだシュウの表情を見るに、疑う余地はないようだった。

「嘘だったらよかったのにな」

大きく息を吐いた彼は、脱力した様子で部屋の隅で壁にもたれる。

「犯人は栞さん以外、ありえない。それがオレの結論だ」

ちよっと待てよ、とユーヤさんが腰を浮かせた。

「結論から言うなよ。単なる推測とかじゃあねえだろうな。俺達にもわかるようにちゃんと説明しろよ」

志津木さんと翠川先生も同意するように大きく頷く。私はとっさにシユウから視線を逸らせてしまった。

言ってみれば栞さんは私達の仲間なのだし、彼にとっては馴染み深い人物なのだ。疑うなんて、罪を暴くなんて、辛いに決まっている。

しかしそんな心配をよそに、彼はああ、と低く答えて壁から背を剥がした。

「……オレは香月を連れて畠と会った。そのとき畠は言ったんだ。殺人事件があったことを女の人が知らせにきた、だから庭を搜索している様子も窓から見ていた、知らせにきたのはおまえか、と香月に尋ねてもいた」

その通りだ。あのとき畠さんはシユウに『タベ、紫の部屋で殺人事件が起きた』と告げられ、平然と『女の人に聞いたよ。だから外で搜索してる様子も、窓から見てた。……知らせに来たの、アンタじゃなかったの?』と答えたのだ。しかしそのやりとりのどこに犯人との繋がりがあるというのだろうか。

「それでどうして栞さんが犯人ってことになるんだよ」

「オレの言葉を遮るな。ちゃんと順を追って話してる」

シユウはぴしゃりと言い放つ。

「畠の証言はおかしいんだ。オレ達が庭を搜索していたのは何故だ? 行方不明のソフィを捜すためだろう。部屋のドアを破ったのは全員が回廊に戻ったあとだったし、その時点で、紫の部屋で殺人事

件が起きた'ことを知っている人間はいなかったはずなんだ――
犯人以外はな」

ああ、確かに。どうして言われるまで気付かなかったのだろう。
あんなに不自然な証言はない。

ハッとしたような表情で、ユーヤさんが背すじを伸ばす。

「畠が犯人ってことか」

「いや。畠にはソフィとのひもがない」

「じゃあ―― 畠にそれを知らせたのが犯人……？」

「ああ、そうだ。だが残念ながら畠はそいつの顔を見ていない。恐らくドア越しの呼び掛けだったんだろう。女、ということだけわかつてる。こうして容疑者は三人に絞られた」

この時点でもやはり、最も視線を集めていたのは私だった。まだ疑いは晴れていないのだろう。

「ここで先程の質問だ。畠は草木さんと面識があつた。ドア越しの会話もしたことがある。つまり彼女の声なら聞き分けることができたんじゃないか？ でなければ『知らせにきたのは香月かもしれない』という疑いはもてないだろう。まったく別の声だったからこそ、畠は草木さん以外の女を見てそんな問いかけをしたんだ」

「犯人は草木さんではないということだね」

翠川先生の質問に、シュウはああ、と短く答えた。ホッとしたように草木さんが息を吐く。

「だが香月には殺されたソフィとの繋がりが無い。犯人ではありえない。すると、もう栞さんしかないんだ」

「待って、シュウくん。捺南ちゃんのひもなら証拠にならないんじ

「やなかったの」

慌てた様子で栞さんが口を挟む。シュウは彼女から視線を逸らせた。

「香月が犯人だって言いたいのか」

「そ、そうじゃないけど、私じゃ」

「そうだって言っているようなものだろ」

酷く悲しげだった。

「栞さんは畠と接触したことがないって言ってたよな」

「ええ、ないわ。だから私じゃ」

「なら、どうして—— ひもが繋がってるんだよ」

志津木さん、そしてユーヤさんの眉間に同時に皺が寄る。揃って目を細めたのだ。もちろん訝しんでいるわけではない。凝視しているのだ。そしてその表情は、畠さんを前にしたときのシュウとよく似ていた。

彼らを真似て空中をじっと見つめてみる。当然だけれど、平凡な私の目では特殊な物体を捉えることはできない。それまでと同じ光景が見えるだけだった。

視線を振ると、草木さんと翠川先生も同様に栞さんを見つめていた。つまり知覚出来ないのは自分と、栞さん本人だけなのだ。言葉の通じない外国に来てしまったみたいで少し、もどかしい。

「……これか。本当だ、繋がってる」

呟いたユーヤさんは、まるで狐につままれたかのようなだった。ぽかんと開いた口をそのままに、何度も確かめるように、栞さんの胸

元から頭上、天井へと視線を往復させる。

そこにはきつとしなやかな曲線を描くひもあるのだ。私には知覚することができないけれど。

そしてそれは彼らにとって、れっきとした証拠となりうる『もの』なのだろう。

「接触がなければひもは繋がらない。栞さん、あんたは畠と接触したはずだ。なぜ嘘をつく？」

「う、うそだなって」

ひどいわ、と栞さんは言う。

「捺南ちゃんのこととは無条件に信じられて、私のことは信じられないっていうの」

「そういうことじゃない」

「り、リーラーの人が勝手に繋いだかもしれないじゃない」

「リーラーが繋がば継ぎ目が残る」

「そんなの私には見えないって言ってるでしょ！ もっときちんと、証明してみせてよ。私が犯人だ、って」

先程よりすこし、強気の態度だった。私なら例え潔白だとしてもそう即座に言い返すことなどできないだろう。すると見計らったかのように、廊下から胸を張った加賀見さんが誇らしげに姿を現した。

「おまえが所望したものはこれだなッ！」

ズイと右手をシュウの鼻先に突き出してみせる。一辺が一×五センチ程度とごく小さな色紙がそこに握られていた。タイルと比べ矮小ながら、色だけを見たらそっくりそのまま、まるで切り取って来たかのようだった。

「どうだ。私自ら視感測色したものだぞ。完璧だ。褒め讃えよ」

視感側色——それで時間がかかったのか、と納得してしま
う。

それは字面の通り目視による色の測定なのだけれど、観察の角度
や照明の照度が定められていてつまりそれなりに準備が必要なのだ。
お兄ちゃんによれば、比較的手軽な測色法であるらしいのだけれど。

「……座れよ」

「なにッ、それではあんまりではないか。冷たいではないか。こん
なにも尽くしているのに」

「審判開始したんだよ。空気読め空気。K Y G」

Gはジジイの頭文字だろうか。」ではないのか。いや、今はそん
なことどうでも良い。

呆れ顔のシュウに諭された加賀見さんは、唇を尖らせながらもし
ぶしぶ席に着いた。伊倉さんの並び、つまり栞さんの真向かいに。

「続けるが、証拠と言ったな。ならもう、遠慮なく明らかにしてや
るよ。ソフィが殺害前、どうやって犯人にかどわかされたのかを含
めて、全部」

「かどわかされた？」

尋ねた志津木さんに、シュウはこれまでの調査の結果、得た情報
を語った。ソフィが別の場所で殺された可能性や、他の部屋に誘い
込まれた可能性など、私と一緒に探し当てた事実を、淡々とした口
調で。

「ここで問題になるのは、言葉がほとんど通じないソフィを、どう

やって別の場所に誘導したのか、だ」

エアコンが唸る。精一杯稼働していることをアピールしているようだった。屋敷内のほぼ全員が集合しているせいだろう、それでも暑さは上昇するばかりだ。

「状況から見てタイルに細工は施しようがない。だが種も仕掛けもない、なんてことはありえない。じゃあ、証拠が残らないように彼女をおびき出すにはどうすればいいのか」

シユウは袖口で額をぐっと拭う。そしてそのまま、人差し指をこめかみにあてる。

「ここだ」

不可解そうに顔をしかめた伊倉さんを見下ろし、真剣そのものの表情で述べた。

「犯人はソフィの頭の中に仕掛けを施したんだ」

17・Break through・後

午後六時三十分、周辺の森は日が傾きはじめていよいよ昏く、濃い影に呑み込まれそうになっている。対し茜色の空は、他から色素を吸い上げてしまったかのように鮮やかだ。

それらは互いに対比されることで、より深く、より明るく、その性質を際立たせている。

眩しくて目を細めていると、気付いた草木さんが薄地の白いカーテンを引いてくれた。それでも尚、夕日は繊維の隙間から染み込んで来ようとする。

「頭の中に仕掛け、だと？」

どういうことだ、と伊倉さんは静かに問う。

仕掛け、とはいえシュウが言いたいののは手術を施したとかいう非現実的なことではないだろうと思う。伊倉さんもそのことには気付いたようで、直後に質問を言い直した。

「何かを聞いた……のか？ まさか部屋の色を間違えて教えられたとか」

「そんな。ありえません」

反発するように口を挟んだのは草木さんだ。

「鍵をお渡しするとき、片言ですけどちゃんと伝えました。紫だからヴァイオレット、フランス語でヴィオレって、栞さんにそうつかって」

それは私の記憶にも残っている。情報収集の段階でシユウにも伝えてある。

ああ、と加賀見さんも頷いた。

「紫はフランス語でヴィオレ、滝口くんに尋ねられてそう教えたのは私だ」

色彩に詳しい加賀見さんがそう言うのだから間違いないだろう。幸か不幸か彼はまだ恐らく、栞さんが犯人として疑われていることを知らない。

「ソフィさま本人もきちんと理解なさってました。念のために、皆様全員のお部屋もお知らせしておきましたから、それこそ取り違えるなんてこと、ないはずなんです」

「……その時伝えた色、詳しく話せるか」

「はい。もちろんです」

シユウに促され話し出した草木さんを、翠川先生がそつと見守っている。年齢的に見て、ふたりは父親と娘のような関係性なのかもしれない。

「白はブラン、これは元から知っていました。刺繍糸などにもそう書かれていますし」

「ああ、間違いない」

加賀見さんが腕組みをして大きく頷く。

「赤はルージュ、黒はノワール、桃色はローズ、これも聞いたことがあったので栞さんと相談し合いながら伝えて……ええと、他の色はわからなかったので、お尋ねしようと、したのですが、」

そこで草木さんが言いにくそうに加賀見さんを見たので、瞬間、私もそのことを思い出した。

あのとき、茶色は、と尋ねられて、発音は難しいが白と同じくブルーなのだ、とか答えた彼はそこから調子に乗って長い演説をはじめてしまったのだ。本人もそれを思い出したらしく、居心地悪そうに座り直している。

「ええと、あの、つまり、その他の色については聞きそびれてしまつて」

「他の色—— 残りは橙と黄と緑と青だな」

「はい。となると、きちんとお伝えしきれていなかった、のですね、私」

申し訳なさそうにうなだれた草木さんは、直後にあ、と短く言つて思い出したように顔を上げた。

「そういえば青は……ええ、部屋に行かれる直前に、栞さんが自分の部屋だとはつきりおっしゃっていました」

志津木さんとユーヤさんが怪訝そうに顔を見合わせる。

「それは事実かい？　じゃあ青の部屋については伝えてあつたんだね」

「ええ、間違いないです。青の—— いえ、『青い』と言つた後に栞さんはご自分を示して—— 『青い部屋』と。それを見たソフィさまは笑顔で『ジェ コンプリ』と」

「『ジェ コンプリ』……わかつた、つて言つたんだな」

「はい。ええと、笑顔でしたのでそうだと思います」

「それなら、青い部屋に入っちゃう可能性なんて無いんじゃないかねえの

か」

もつともだ。

ソフィは自分にあてがわれた部屋がヴィオレ——紫の部屋であることをきちんと理解していた。さらに青の部屋は栞さんのものだということも分かっていただ。これでは間違いようがない。

タイル自体の色の差も歴然としているから、見間違えるなんてことはありえないし、ましてや青の部屋と紫の部屋は隣同士なのだ。見比べればどちらが紫なのかということは、誰にだってわかる。

「どういうことだよ、小泉」

自分が話題にあがっているのに、栞さんはじつと黙っていた。その静かな表情からは感情を読み取ることが出来ない。けれど何故だか少し、不気味な気がした。

もし本当に栞さんが犯人なら、あの寝間着を私の部屋に置き、罪を被せようとしたのも彼女、ということになる。どうして……。

「おかしいと思わないか」

静かに言ったシュウへと、視線を戻す。反論されても尚、彼は冷静さを保っていた。

「ソフィは日本語がほとんど分からなかった。にもかかわらず、『青い部屋』の意味を『わかった』だと？」

視界の隅で栞さんの肩がぴくりと動いた。気付いたのは恐らく私だけだろう。

「そう、ですよね」

唇を指先で覆うようにして呟きながら、草木さんが首を傾げる。

「変ですよ。あのときは分かってくれたんだと思ってましたけど」
「直前に何があったのか、考えてみてくれ」

直前—— 私の脳裏には、ソフィが『コレナニ?』とさかに尋ねている光景が蘇った。まさかあのときに何かを吹き込まれた? いや、質問に答えていたのは志津木さんと加賀見さんだ。栞さんはそこには関わっていない。考えれば考えるほど、彼女が犯人だという可能性が薄くなっていく気がする。

シュウはおいジジイ、と加賀見さんを肘で軽くつついた。

「庭で演説、しただろ」

「ああ。貴重な時間を裂いて語ってやったのだ」

「ノリノリではじめたくせに」

白けた目でぼそりと言う。

「な、あれは尋ねられたから、仕方なくだな」

「尋ねられた? 誰に」

「滝口くん。彼女がこの花を示して」

加賀見さんがテーブル上の花を一輪つまみあげたので、全員の視線がそこに集まった。

ハート形の花びらは赤紫色で、中央からすじ状の濃い模様が入っている。

「葵、と言うから、正式名称はゼニアオイだと教えてやったんだ」

あおい……そうか、この花は葵だったのか。

「尋ねられてねえじゃん。どうしてそのあと長々と喋ったんだよ」
「何度かおまえにも教えてやっただろう。なぜ覚えておらんのだ。
ゼニアオイはフランス語でモーブ、モーブと言えば世界初の合成染料ではないか」

「それ、全部語ったんだな？」

「あたりまえだッ、こんなロマン満ちあふれた話、せずに終われるかッ」

卓上に唾を飛ばし、加賀見さんは息巻く。まさか。私は眉をひそめた。

草木さんの証言が確かならば、栞さんは『青の部屋』のことを『青い部屋』、いや、『青い』と言った。

青い—— あおい、……葵。

もしかして、と志津木さんが丸い顎をなぞる。

「ソフィは『青い』イコール『モーブ』だと思って、『わかった』のか？」

そうだ。栞さんが「あおい」と言ったものを、加賀見さんが「モーブ」と言った。それをソフィは脇で聞いていた。

彼女の頭の中ではそのとき、葵——アオイ——青い——モーブ、これらが一直線に繋がったのだろう。モーブは色の名前としても用いられる単語だ。聞き覚えがある。私の記憶が確かなら、それは紫色を指す。

志津木さんは続けてぶつぶつと独語をもらす。

「青い部屋を『モーブ』、紫の部屋を『ヴィオレ』と理解したとしたら……いや、でも、それが直接的に部屋を取り違える原因になるとは」

何だよ、と横からユーヤさんが尋ねる。

「それが原因で彼女が青の部屋を選んだ、とは思えないんだ。『モーブ』の別名は『つよい青みの紫』。そして『ヴィオレ』……つまりヴィオレットの別名は『あざやかな青紫』だ。つまり両方とも同じような『青紫』のことをさすんだよ」

同じような青紫？ 志津木さんの話を聞いて、私は深まる謎に首を捻るばかりだった。

要するにモーブとヴィオレは紛らわしい、区別の付きにくい色なのだろう。

そんなことを教えられたら、聞き返して確かめるなり同行を求めるのが普通ではないだろうか。素直に『わかった』などと言うはずがない。それに、万が一タイルを前にして迷ったとしても、手前にある紫の部屋ではなく奥にある青の部屋を選ぶというのは少々おかしい話だ。

紛らわしいというだけでは、確実に青を選択させることはできない。いまひとつ……決め手に欠ける。

すると、目の前の加賀見さんは愉快そうに唇の端を持ち上げた。

「……君だったのだな、滝口くん」

静かに、穏やかな声で言う。それまでのふざけた様子はなりをひそめ、彼は今、年相応の大人の男として私の目に映っていた。

「モーブとヴィオレ……よく考えたものだ。私の指導の賜物、とても言おうか」

クツと喉の奥で笑うと、彼は志津木さんに目を遣る。

「君は印刷所勤めだったな。モーブのマンセル値は5P 4・5/9、ヴァイオレットは2・5P 4/11、共に青紫を指す、確かにそれは正しい」

「ええ、ありがとうございます」

笑顔で答える志津木さんの他、シユウを含め皆が眉根を寄せていた。マンセル値、とは一体何の暗号だろう。とはいえ二つが数値の上でも近い色であることだけは分かった。

「だがそれはJISで定められている数値だ。色彩には言語があり、文化があり、実際の認識と数値にはそれなりの隔たりがあるものなのだよ」

加賀見さんは自嘲ぎみの表情で言う。そしてテーブルから腕をおろすと、それを胸の前で組み、続けた。

「モーブといえば、フランスでは一般的に『淡い紫』として認識されている色の名なのだ」

えっ、と草木さんは短く声を上げる。モーブが淡い紫？ それでは二色に差が生まれることになる。

「つまり、ソフィは頭の中でそれぞれの色を思い浮かべ、実際のタイルと比較したのだろう」

加賀見さんは自ら準備したカラーチップを二枚、テーブルの上に並べた。

やや紫みを帯びた濃い瑠璃色——青の部屋のタイルを示すものと、そして淡いトーンの紫——紫の部屋のタイルを示すものだ。

「淡いほうがモーブ……あおい、つまり滝口くんの部屋。そして濃いほうがヴィオレ、自分の部屋だと。それは記憶色として、より鮮やかに脳内で対比された」

ああ。

私は大きく口を開けて、それを掌でぐつと覆った。驚愕のあまり声が漏れてしまいそうだった。

紫のタイルを、その淡いトーンから『モーブ』つまりアオイ、と認識してみる。するとそこは『青い部屋』イコール栞さんの部屋、ということになってしまう。

では紫の部屋はどこか。

視線を滑らせた先には、青の部屋のタイル。よそにも視線を振ってみる。当然のことながら、紫系統の色は他にない。

通常なら誰もが青と判断して然るべき色はその瞬間、私の中で『ヴィオレ』となった。

——君は、今認識している世界が、目に飛び込んでくる以前の世界と同じだ、と自信を持って言えるか——。

昨日の朝、耳にしたばかりの話がいつぺんに脳裏に蘇った。

頭の中の仕掛け、それは彼女にだけ色を入れ替えてみせたこと。

こんなことが可能なのか。

うつん、と翠川先生が唸った。考えることに夢中になっていたのか、斜めになったカップからコーヒーが少量滴り落ちる。

すると、そうか、とひらめいたようにユーヤさんが指を鳴らした。

「あの日、栞さんの部屋にいたのは加賀見さんじゃなくてソフィだったのか！」

「あ？」

シユウが眉根を寄せる。

「いや、実は事件発覚の前日さ、俺、青の部屋の前を通りかかったらたまたま自分と繋がるひもが見えてさ。中に栞さん以外の誰かがいることはわかってたんだ」

「はあ？ おまえまさか、ナンパする気でひもの確認をしたんじゃない」

「まあな。それでさ、てつきり加賀見さんだと思ってたんだよ、室内にいろの」

そういえば、事件の後に私の部屋を訪ねて来たときも、ユーヤさんはそんなことを言っていた気がする。

「俺と繋がってる、ってことは加賀見さん、ソフィ、翠川先生、草木さん、伊倉の中の誰かだろうなって」

「……ああ」

シユウは自らのメモを引っ張り出し、覗き込んだ。情報を整理し

たときのものだ。全員の、ひもの繋がりが書かれている。

「でもさ、伊倉はそういうことをしない堅物だし、翠川先生と草木さんは下にいたみたいだし、ソフィとは言葉が通じないし、だから加賀見さんかなって」

なるほど、そうか。ユーヤさんにはひもを見分けることまでは出来なため、状況から推し量ってしまったのだろ。シユウがそれを見ていたら……すぐにわかったかもしれないのに。

「あろう」

おずおずと草木さんが右手を挙げた。「ちよつとよろしいでしょうか」なんだ、とシユウが聞き返す。

「先程から不思議に思っていたんですけど、ソフィさまはどうやって別の部屋に入られたんでしょうか。紫の鍵では、紫の部屋しか開かなかったはずですよ」

そうだ。鍵のことをシユウに話しそびれていた。彼女と同じように右手を顔の横に挙げると、なんだ、と今度は加賀見さんが問うた。

「そういえば君は、何か分かったと言っていたな」

「はい。そのことなんですけど」

シユウは黙っている。容認されたのだと思うことにして、私は話を進めた。

「犯人の部屋の鍵は、そのとき、すでに開いていたんじゃないでしょうか」

鍵はあの通り、どれもが真っ直ぐの棒状だ。複雑な溝が切られていない分、どの鍵穴にも同じように差し込めた筈。あとは開くか開かないか、それだけのこと。

つまり、元から施錠をしておかなければ、その扉はどの鍵を差し込んだとしても必ず開くのだ。

おそらく彼女は紫の部屋の鍵を青の部屋の鍵穴に差し込み、解錠が出来たと思い込んだ。

そうして、全く別の部屋に――犯人の部屋に、入り込んでしまったのだ。

「オレもそう思う」

説明を聞き終えたシュウは、おもむろに私の頭の上へ掌を乗せる。それは少し乱暴に、まるで幼い子供にそうするように、くしゃくしゃと髪を撫でた。よく出来ましたと言わんばかりの笑顔は、答えなんてとうの昔に導き出していたかのようだった。

にもかかわらず私の口からそれを言わせたのは、謎解きに貢献したらお兄ちゃんの情報をくれるという、あの約束があるからなのだと思います。

……買いかぶりすぎだろうか。

「それなら、同時に遺体発見時の密室の謎も解けるよな」

「えっ」

思わず驚いて背筋を伸ばした。

「単純なことだ。遺体発見時、紫の部屋の鍵は、開いていた、んだよ」

しまつてただろ、とはユーヤさんの言葉。

「ドアノブが回らなかったじゃねえか」

「ああ、あの時点ではな」

シユウは前髪をかきあげる。それは金糸のようにきらきらと光を零した。

「栞さんに呼ばれて、オレはそれを確認した。ユーヤと香月も同様にドアノブが動かないことを確かめた。じゃあ、その後のことはちゃんと覚えてるか」

もちろん覚えている。

志津木さんの提案で庭を探すことになったのだ。戻った時、扉の前には伊倉さんがいた。そして、草木さんが解錠するまでにはまだ時間がかかるらしいからドアを破ろう、ということになったのだ。私がそのことを語ると、そこだ、とシユウは人差し指を立てた。

「蹴破る直前、本当にドアに鍵はかかっていたのか？」

答えられなかった。そういえば庭から戻ったあと、伊倉さんも私もノブには触れていない。

「じゃあもしかして、あの鍵はすでに開いていた……？」

「ああ。オレの読みが正しければ、犯人は皆が庭に出ていたそのときまさに—— 紫の部屋を解錠し、遺体を運び入れたんだ。そしてその手に鍵を握らせ、何事もなかったかのように部屋の外に出た」

「そんな、まさか」

どうしてそんなことがわかるのか。

「よく考えてみるよ。『殺人事件がおきた』『皆が外で搜索している』、なぜ犯人はあるとき、そんなことを畠に伝えなければならなかったのか」

言われて初めて気付く違和感。そうだ、畠さんにそれを告げるメリットが犯人にあったとは思えない。先程シュウが指摘したように、自分が犯人だと名乗るような台詞を、わざわざ伝えに行ったのは何故？

「理由は簡単だ。畠の注意を窓の外に引き付けておくため、逆に言えば廊下で遺体を運んでいる音に気付かれないようにするためだ」

待てよ、とユーヤさんが口を挟む。

「こんなときでさえ呼び出しに応じねえ畠が、親切に窓からソフィ捜しを手伝うとは思えねえけど」

「ソフィ捜し？ 誰がそんなことを言った。オレたちは行方不明のソフィを捜してた。でも畠はそう思わなかったはずだ。殺人がおきた、と理解していたんだからな」

「なんなんだよ、なら畠は窓の外に何を見てたんだよ。幽霊か？」

「阿呆。殺人がおきて捜すとしたら犯人だろ。逆に言えば、人殺しが窓の外にいと聞かされたようなものなんだぞ、覗き込まないわけがない」

「……確かに。うつかり侵入されちゃたまらねえと思うしな」

シュウは視線を鋭くする。その先には栞さんがいた。彼女は深く

うつむき、目を合わせようとはしない。

あるとき屋敷の外を探そうと言い出したのは志津木さんだった。しかしあれは直前に「部屋の中にいるとは限らない」と彼女が発言したことがきっかけになったとは考えられないだろうか。

屋敷を出たのは私と一緒に最後だったけれど、その先は覚えていない。もしかしたらすぐに引き返したのかもしれない。最後だったのはもしか、全員が外に出たことを確認するため？

「鍵の件に話を戻すが、結局は単純な心理トリックだ。皆で一度確認したドアを、もう一度確認しようという人間はなかなかいない。それに、もし鍵がかかっていないことが分かったとしても、みんな、草木さんが解除してくれたお陰だと思うだろ」

全員の視線が栞さんのつむじに集まっている。もはや、私に疑念の目を向ける者はいなかった。それだけ、シュウの言葉には説得力があったのだ。

しかしなぜ、栞さんがソフィを殺さなければならなかったのだろうか。佑お兄ちゃんの死との関連性はないのだろうか。

半ば放心しそんなことを考えていた私は、テーブルの天板がガクリと持ち上がったことではっと我に返った。

同時に椅子がひとつ倒れる。鈍い音と共に、足の裏に重い衝撃が伝わった。何事だろうと頭を上げた私の目には、信じ難い光景が映し出されたのだった。

「動くな！」

加賀見さんが背後から羽交い締めになれ、喉元にカッターナイフを突き付けられている。それは窮地に陥ったことで居直った栞さんの仕業、というわけではなかった。

「ジジイ！」

慌てて掴みかかろうとするシュウに刃物を向け、怒声を張り上げるのは―― 伊倉さん。

「動くなと言っているだろう！」

彼は怒声を張り上げ、再び加賀見さんの喉笛に刃先を押しあてると、その体を引きずるようにしてずるずると後退した。背中が壁に行き当たると、追いつめられた手負いの獣のような表情で全員を見渡す。

「黙って僕の言う通りにしろ。いいな」

混乱せずにはいらなかった。犯人は栞さんでほぼ間違いないはずだ。なぜ今、伊倉さんがこんなことを。

私は息を呑み、シュウの動向を見守った。そうして、険しい顔で立ち尽くしている彼に全てを委ねるより他、なかったのだ。

18・たつたひとり

カーテンに染みていた茜色はすっかり消え失せていた。窓の外を満たすのは、恐らく、昏々とした濃い闇。

あらゆるものを呑み込んで染め上げるそれは、私の視界にまで浸食しはじめていた。明るさは充分あるはずの食堂内、ものの影ばかりが目につく。

ユーヤさんは椅子からそろりと降り、志津木さんを押しやるようにして壁際に後退する。邪魔にした、というより年配者の安全を優先し、気遣っている様子でもあった。

翠川先生は廊下側に数歩ずれながら、同時に草木さんをさりげなくその背に隠す。シュウは伊倉さんとの間合いを保ちつつじりじりと右に移動し、私と栞さんを庇うように立ってくれた。

「何が望みだ、伊倉」

探るように問うシュウの声は、低く掠れている。聞いてますます緊張感が高まってしまう。

「話がわかるね、シザー」

伊倉さんは口元だけで笑う。しかし目はぎよるぎよると落ち着きなく転がり、絶えずあたりを伺っている。油断する様子はない。

彼の左腕の中、首を羽交い締めになされた加賀見さんは小刻みに息を吐く。苦しそうだ。

何度も唾を飲み込むシュウは、それでどうにか平静さを保とうとしているように見えた。

「何度も君の弱みを握ろうと試みたけど、うまくいかなかった。散々考えたけど、シザーと直接会う機会なんてもう巡って来ないかもしれないからね。こうするしかないんだ。悪く思わないでほしい」

すると、視界の隅で音もなく動いた人物がいた。ユーヤさんだ。私はそちらに少しだけ首を動かしたものの、すぐに元の位置へ戻した。伊倉さんに勘付かれてはまずい。

ユーヤさんは唇だけを動かし、行け、と言う。シユウは目線の位置も顔の角度も変えぬまま、視線の隅でそれを読み取ったようだった。

直後、二人が伊倉さんに掴み掛かったのはほとんど同時で、それはまるで以前から示し合わせてあったかのようなタイミングだった。

「うわあああつ！」

威嚇するように声を張り上げたユーヤさんに、驚いて振り返る伊倉さん。その首筋に、シユウが背後から飛びかかる。

ばたばたつ、と激しい足踏みの音がして私は思わず肩をすくめた。人と人がぶつかり合うとこれほど強い衝撃がおこるものなのか。

「放、せ！」

力は拮抗していた。

特に誰が主導権を握るでもなく、三人は腕を立体に交差させたまま、もつれるようにもみ合っている。

しかしそれも、長くは続けていられないだろう。伊倉さんが躍起になって抵抗するたびに、彼らの間で、ぐうつ、と加賀見さんが息苦しそうになるのだ。

耐えかねた様子で、栞さんが勢い良く立ち上がった。ひどく青ざめている。

このままでは加賀見さんの命が危ない。

すると次の瞬間、絡み合った状態のままシュウが壁に勢い良く背を打ち付けた。壁に穴があいても不思議ではないような、すさまじい音がして部屋全体が大きく揺れる。

それでも三人は互いに体の一部をつかみ合ったまま、離れようとはしない。数秒の膠着に、誰のものともわからない歯ぎしりが聞こえた。

と、シュウが顔を歪めてうっとうしくうめいた。伊倉さんの肘が脇腹に直撃している。反射的に半歩ほど後退した彼を見つめ、私は息を呑んだ。

シュウの腕から解放された伊倉さんは、ユーヤさんに向かって力ツターを振り上げる。

——
危ない！

目を逸らした私の耳に、折り重なるような怒声が飛び込んでくる。「僕の邪魔をするな！」「やめろ伊倉っ」 続けてガッ、どすんと重い衝撃音。

それきり、しばしの沈黙が訪れる—— まさか。

最悪の事態を想像しそろりと顔を上げると、体制を立て直したシュウが彼らの間に入り込み、攻撃を阻止していた。

ユーヤさんは尻餅をついた状態で、驚愕のためか恐怖のためか、両目を大きく見開いている。刺された、ということはないようだ。良かった。ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、シュウは長身を生かし、掴んだ伊倉さんの腕を一気にひねり上げた。

「いい、かげんに、しろ……！」

く、と短く声を漏らした伊倉さんは体を震わせ、悔しそうな表情で人質と凶器をほぼ同時に手放したのだった。

ようやく苦痛から解放された人質は、がくりと膝を折ってその場に崩れ落ちる。

「編集長っ！」

呼びながら駆け寄る栞さんの足音を最後に、食堂はようやく静けさを取り戻したのだった。

「大丈夫かい」

ユーヤさんにそう尋ねる志津木さんのシャツは、びっしょりと汗に濡れている。

私はそれを見、自分の背中も同じように湿っていることに気付いた。暑さだけではない、冷や汗だけでも言えない、嫌な汗だ。

「俺は大丈夫だけど、あいつが」

視線の先には、二の腕から鮮血を滴らせるシュウ。争っている間に刃先がかすめたのだろう。

しかしそんなことには気も留めず、シュウは伊倉さんを後ろ手に縛り上げ言っ。

「理由はどうあれ、日本支部の会長を人質に取ったんだ。裁かれることになる。最悪の場合、おまえのひもを全部切断することになるからな。覚悟しておけよ」

その言葉を、ほっとした様子で聞いている伊倉さんに違和感を覚えてしまった。まるで裁かれることを望んでいるかのように思えて

何故……？

すると壁際にいた翠川先生はシュウのほうへと体を返したものの、ぎくりとして立ち止まった。視線はじつと足下に注がれている。

疑問に思っただけのテーブルのあちら側を覗き込んだ瞬間、はっとした。すっかり意識の外にあつたそれは、凶器——カッターナイフ。床の上に放置されたままのそれに、向かつてのびる腕があつた。色白の、細い指が迷うことなくその柄を掴む。まずい。

「シュウ！」

けれどそのときすでに彼女—— 栞さんはナイフを手に立ち上がったところだった。

「し、栞さん」

縛り上げたばかりの伊倉さんを庇いながら、シュウはわずかに後退する。しかし予想に反して彼女が切っ先を向けたのは、他ならぬ私、だったのだ。

「あなたさえいなければ」

いまいましげな表情。

私は腰を浮かせた格好で椅子ごとずると後ずさった。どうしよう。どうして。とっさにソフィの姿が浮かぶ。単なるモノと化した、無惨な姿が。

「待て、やめろ」

果敢にもその進路を阻んだのはシュウだった。

「もういいかげんにしろよ。なんでだよ、なんで栞さんがこんなこと。平気で人を殺せるような人間じゃなかっただろ！」

「平気なんかじゃなかったわ！」

悲鳴に近い叫び。それはようやく彼女が罪を認めた瞬間でもあった。

「何度も迷った。最初はそんなつもりじゃなかった。でも、目が、目が欲しくて、わたし」

「目玉……最初からそれが目的だったんだな。どうして」

尋ねられて、悲しげに笑う。

「あなたにはわからないでしょうね。周りの人間が見えるというものが、たったひとり、見えない孤独」

ふと疑問が浮かび上がる。

そういえば栞さんは可視でもリーダーでもシザーでもない。あのファックスを見る限りごく普通の一般人なのだ。なのに何故、協会に属しているのだろう。

「……ソフィを部屋に誘い込むことに成功したとき、嬉しかったわ。だって殺そうと思って仕組んだわけじゃないんだもの。色彩について、たくさん調べて覚えたってこと、編集長に褒めてもらいたかった。私にもこんなことができるんだって、知ってほしかっただけなんだもの」

「じゃあどうして殺人なんて」

あなたにはわからないわよ、と彼女は再び似たような言葉を発する。

「編集長のこと、入社以来ずっと想い続けてきたわ。報われないってわかってはいたけど、それでも一番近くにいたかった」

「栞さん……」

「歴史を暴いたことで、彼の助手としてリール協会にも出入りできるようになったし、秘密も共有することができた。だけど、どんどん遠くなっていっただのが実際のところ」

訴える声は徐々に細く、掠れていく。

「ここへ来ると、あるはずのないものをみんなが見えるって言う。最初は、特殊なのは編集長やシユウくんのはうなんだって思ってたけど……もしかしたら、自分だけが違う世界を見ていて、これからもずっと、本当の意味で理解し合うことなんてできないんじゃないかって思い始めて」

なぜだか、そこにお兄ちゃんの声が重なって響いてくるようだった。 “僕達に違いなんてない。離れる必要なんてない。ないんだ……”

「同じ不可視の捺南ちゃんが来てくれて、私、本当は嬉しかったのよ。気持ちをわかってもらえるかもしれないって思ったから」

肩が震えている。そこは悲しみも怒りも、両方が滲み出ているかのようだった。

「でも、違った。編集長、言ったのよ。その子に、『君はなかなか話分かるな』って、うれしそうに言ったのよ！ 私にはそんなこと、一度だって言ってくれなかったのに」

体中の血液がさあつと引く。

加賀見さんが私にそう言ったのは、ここへ来てすぐのこと。残像について尋ねられ、うっかり『はい』と言ってしまった直後だった。まさかあのことがきっかけで栞さんは犯行を？

もし『いいえ』と答えていたら—— ソフィは今もここで、笑って……？

「私だけ。理解し合えないのは私だけなの。どんなにがんばっても例えいつとき褒めてもらえても、私は特殊な人間にはなれない。同じ不遇視でも、捺南ちゃんは彼と分かり合えて、私は分かり合えないんだわ。そんなこと、考え始めたら止まらなくなつて」

そんな。

暑いのか、寒いのか、感じているはずなのに判別がつかない。

「だから目さえあれば。可視の目さえ手に入れば、移植すれば、きつと越えられると思つたの」

彼女の言葉に、翠川先生が顔を顰める。

「……部屋に行ったら、具合が悪かつたのか、彼女、貧血を起こしたみたい倒れてしまつて。その、あまりにも無防備な様子を見ていたら、……わたし、できるかもしれないって」

その目には、涙があふれそうなほど溜められている。しかし実際に彼女は人をひとり殺め、なおかつ偽装工作まで行っているのだ。もう、何をどう考えたら良いのか——。

すると、次の台詞を遮るように加賀見さんが口を開いた。床の上に座り込んだまま、うなだれた格好で。その手には、栞さんのハンカチが握られている。

「馬鹿者」

馬鹿者が、と連ねていまいましげに吐き捨てる。

「指導の賜物だ、と言ったことは撤回する。君は私の話の、一体何を聞いていたのだ。見えというものは単純ではない。私達は目と脳の合成作用でモノを認識しているのだと何度も話して聞かせただろう」

栞さんの表情が一気に歪む。その台詞は私にも記憶に新しく聞き覚えのあるものだった。

「角膜を移植したところで、ひもが知覚できるとは思えん。いや、ほぼ確実に不可能だ」

「……うそ」

「そもそも移植に必要な眼球を摘出するには専門家でさえそれなりの時間を要する。ずぶの素人がぞんざいに扱ったものなど使えるものか。ましてや他人から無理矢理奪ったものなど」

「む、無理矢理なんかじゃ。あの子、私の前で倒れて——」
「屁理屈をいうな、見苦しい」

私はぼんやりと、お兄ちゃんの処置にも長い時間がかかったことを思い出していた。そういうえば取り出した臓器はその後、どうなっただろう。あれ以来初めて、そのことが気になった。

うそ、うそ、と栞さんはか細く繰り返す。その声は切なく、湿り気を帯びていた。

加賀見さんは彼女を思い遣るでもなく、愚か者、と低く罵る。

「見たかった、だと？ 阿呆め」

険しい表情だった。

「そんなことのために君は人を殺めたのかッ！」

シユウが右手をぎゅっと握りしめたので、いたたまれない気分になった。

栞さんは認めたくない、といった様子で弱々しくかぶりを振る。

「そんな、こと……？」

うつろな双眸で。

しかし刃先を向けられても、加賀見さんはひるまない。それどころか、殺せるものなら殺してみろといわんばかりに胸を張ってみせたのだ。

二階の回廊で目にしたサロメの挿絵が、ぱつと弾けるように脳裏をよぎる。

いとしい男の生首に口づけをする女の姿が、白黒のイラストが、なぜか生々しく頭の中で色を纏う。

恋に狂った倒錯的な世界は、幾本もの曲線に囲まれていて――

ああ、あれはまるで、ちぎれたひものようにも――。

一旦引いたと思った冷や汗が一筋、胸の間を伝う。

まさかあんなふうになるのではと。

しかし彼女はカッターナイフを投げ捨て、逃げるように食堂から駆け出していったのだった。

「栞さん、待てよ！」

廊下を斜めに横切って螺旋階段を駆け上がる彼女を、誰からともなく追い始める。先頭はシユウだ。

二階の回廊へと躍り出た瞬間、私の目にはばたりと閉じる青の部屋の扉が見え、ほぼ同じタイミングで施錠する音が聞こえた。

まずい。

単なるろっ城ならばかまわない。草木さんに解錠をお願いすれば済む話だ。

しかし現在の彼女は精神的に酷いダメージを負っている。ゆえに、何をしでかすかはわからない。例えば、自ら命を絶つとか。

閉ざされた空間を前にして、シュウはノックを躊躇っていた。

確かに、これ以上追いつめたらまずいということはわかる。けれど急がなければならないと思う。

どうすればいいの。

すると扉の内側から、ごうつと空気をかき混ぜるような音が上がり、私は彼と顔を見合わせた。

……何？

数秒後、あっという間にきな臭さが充満した回廊で、皆揃って青ざめる。まさか、——火。

「栞さん、しおりさん！」

動かないドアノブを両手で掴み、必死でこじあげようと試みるシュウの前に、私はまたも次の行動を定められずにいた。

19・世界の解釈

「スプリングラーはどうした！」

青の部屋の前、尋ねる加賀見さんは酷く齒痒そうで、焦りきっている様子がありありと見て取れた。

「それが、作動している様子がなくて……もしかしたら壊されているのかも」

「鍵は」

「翠川先生が解除にあたっています、ですが、最低でもあと十五分は」

まごつく草木さんの目の前で、くそつ、と彼は力任せに壁面を殴りつける。重い衝撃が壁面に響き渡った。

栞さんが部屋に消え場を閉ざしてから、経過した時間はせいぜい二三分。しかし私は施設を訪れてからの最も長い時間を、今、過ごしているような気がしてならなかった。

ここまで例のごとくシユウとユーヤさんが扉に体当たりを試みている。しかし内側に障壁を築いているのか、突破することはかなわなかった。これ以上、何ができるとも思えない。

扉の四辺にあるわずかな隙間からは、もうもうと白煙がわき出しはじめた。

栞さんは無事だろうか。こうしている間にも、一秒ごとに望みが薄くなっていく気がして、それでも成す術はなくて、……たまたらい。

「どうしろって言うんだよ……」

シュウがそう漏らしたと同時に、室内からはパチツという弾けるような音が続けざまにあがった。混じって栞さんのものと思いき咳き込む声が数度聞こえ、私はぱつと顔を上げた。

煙を吸い込んだのかもしれない。となれば事態は一刻を争う。もう、少しの猶予すらない。

「栞さん、栞さんっ、開けて！」

最初にここで朝食をとったとき、栞さんが私の分を取り分けて別にしておいてくれたことを思い出す。

あれは例の会話のあとだったけれど、彼女はとても親切だった。少なくともまだあのときは凶行に及ぼうだなんて思っていなかったに違いない。

血だらけの寝間着のことだってそうだ。考えてみればあの直前、私と加賀見さんは二人きりで部屋にいた。誤解を招くような状況だったと思う。

だからといって、彼女のしたことが正しかったとは到底言えないけれど。――けれど。

「く……」

苦しそうに唸ると、シュウは傷口を素手で押さえて壁にもたれた。血の気がすっかり失せている。

心配になって声を掛けようとすると、志津木さんに先を越されてしまった。彼はよたよたと体を左右に揺らして歩み寄り、シュウに肩を貸した。

肌にまとわりつくような、これまで以上の暑さ。皆、滴るほどの大汗をかいている。噴き出す煙は勢いを増し、回廊は淡く霧がかったように見えはじめた。

もはや、栞さんだけでなく自分たちの命までもが危ぶまれる事態にさしかかっていた。

「阿呆めが……！」

驚いて振り向くと、加賀見さんは肩を震わせうつむいていた。泣いているのかもしれない。かける言葉など、みつかるはずもなかった。自分の過去と重ね合わせれば尚のこと。

彼は無念そうに切齒したあと、決心したように顔を上げた。感情を押し殺したような無表情は、責任感が纏わせたものだろうか。

「……草木くん、皆の避難誘導を。私は翠川と共に近隣支部と日本国への救助要請を行う。庭で落ち合おう」

「は、はい」

反対意見を言える人間がいるわけもなかった。今の私たちにはやむをえない選択だと、誰もがわかっていただけたのだと思う。

もう、他に道はない。

「こちらです！」

こうして私たちは、草木さんの誘導で屋敷の表にある庭へと避難を開始した。志津木さんがシュウを抱え、ユーヤさんが私と畠さんを庇ってくれたので、見通しの悪い建物内もスムーズに抜け出すことが出来た。

数分後、加賀見さんは一階でコンピュータに向かっていていた翠川先生を連れ、携帯電話で通話をしつつ裏口から姿を現したのだった。

「大丈夫かい、みんな。すぐに協会のヘリが迎えにくるからね。順番に、まずは女性と怪我人から救助してもらってことでいいかな」

「……やけに早いな」

「いや。逆だよ、逆。救助はソフィが亡くなった時点ですでに要請していたんだから。せめて疑いのない人たちだけでも他に移そうと思っただけ」

屋敷の隅に設置されたナトリウムランプと、足下には一定間隔を置いて小さな照明が灯っている。どうやらヘリの夜間着陸用の設備らしい。闇を照らす橙色は、景色を異様な色合いに染め上げている。芝生の上にあぐらをかいたシュウが怪訝そうな顔をして翠川先生を見上げたので、私も一緒になって彼を見つめた。

「なんだそれ。連絡してから一日以上経過してるってことじゃねえか」

「そうなるね」

「移動用と防災用、両方が全機出払ってるなんてことはありえないだろ」

「うん、まあ、もちろん」

どういつことだ、と噛み締めるように小さく言って、シュウは親指の腹で下唇をひとなでする。

「まさか、故意に救助を遅らせた……？ 協会が？ 支部が？ 何が起こってる」

それもまた、誰に問いかけるでもない言葉。

ユーヤさんがずっと、黒目を翠川先生へと移動させたのが視界の隅で確認できた。

「そつえばジジイ、事件が発覚したときどこにいた？ あんなに騒いでも起きて来なかったし、庭の搜索にも加わらなかったよな。」

もしかして、部屋にいなかったんじゃないのか」

「……鋭い奴だ。ますます惚れ直した」

「誤摩化すな。だらしないアンタが早朝から起き出すなんて天変地異の前触れみたいだ」

「老熟してくると眠りが浅くなるとか言うぞ」

「誤摩化すなつて言ってるだろ。いい加減にしろよ」

荒げた語尾におびえたのは草木さんで、当の加賀見さんは至って飄々と、不遜な態度を崩そうとはしない。

「部屋を空けて何が悪い。ああそうだ。あるとき私は翠川と話し合っていたのだ。ソフィが——あのように病弱な箱入り娘が何故、単身日本へなど渡ってきたのかと」

言っちゃった、というふうには翠川先生が額に手を当て苦い顔になる。

自分が聞いてしまっても良いものか、迷いながら私はふらりと視線を泳がせた。

「留学の下見じゃなかったのかよ」

「本人の意思まではわからんがね。滝口くんの言うことが本当なら、彼女は部屋で気を失うほど状態が悪くなかったんだぞ。同行者のひとりでもつけて然るべきだろう」

ああ、と頷いたシユウを見て、かすかに首をひねる。確かにそれはおかしい。

すると翠川先生は観念したように息をひとつ吐いてから喋り出した。

「つまりね、嵌められたんじゃないかって僕らは思っているわけだ

よ」

「嵌められた？ 誰にだ」

「断定はできないけれど……、我々日本支部はフランス本部のお偉方のお嬢さんを預かったわけで、もし彼女の身に何かあれば非難を浴びる……最悪責任を取らされるのは誰かってことを考えれば」

「日本支部のトップに恨みを持つ人間、ってことか。ソフィの親とか？」

「いや、それは流石にないんじゃないかな。だって箱入り娘だよ、大事なひとり娘だよ？」

「確かに。となると、別に裏で手引きをした奴がいたってことだな。救助を遅らせたのもそいつか。加賀見の足を引っ張るために」「穿った見方をすれば、だがね。こればかりは推測の域を出んよ」

雷鳴のように轟めく音が降ってきて、私は南の空を見上げた。赤と青の、小さな光が木々の間からちらちらと垣間見える。

同時に地面へと押さえこまれるような、しかし足下から舞い上げられるような突風を全身で感じた。

へりだ。

片手でスカートを押さえ木陰へ逃げ込む。ユーヤさんが庇うように私の前に立ってくれた。

しかし荒れ狂う風の所為で呼吸が上手くできない。足下の葵も、なんだか息苦しうになぎ倒されているように見えた。

やや大型の白い機体を左右に少し揺らしながら、救助のへりは庭の中心に降り立つ。

……凄い。

こんなの、目の前で見たのは初めてだ。

プロペラを回転させたまま、救助隊員がふたり、ストレッチャーとともに姿を現す様子はまるでテレビドラマのワンシーンといった

ところ。

リール協会に属する者なのだろうか、彼らは加賀見さんの姿を認めるわずかに会釈をしたように思えた。

するとユーヤさんが私の背を押し、機体の側まで連れて行ってくれた。彼はことごとく初対面の印象を覆すように親切だ。

「気をつけて！」

「ありがとうございます、ユーヤさんも！」

耳をつんざくようなプロペラ音の中、大声で言って機内に乗り込む。

草木さんとともに内部の椅子に腰掛けた所で、シユウがストレッチャーの上に横たわった状態で運び込まれた。シャツは半分が真っ赤に染まっていて、出血の酷さがうかがえる。

ふと扉の外へ視線をやると、ちょうど、屋敷の二階部分の窓を割って勢い良く噴き出すあかあかとした炎が見えた。瞬間、加賀見さん、志津木さん、ユーヤさん、翠川先生、畠さんが揃って体を屈める。それだけ大きな音が響いたのだろう。そのときだった。とんでもないことに気付いたのは。

ここにいるべき人の数が、たりない。

すっかり意識から抜け落ちていたけれど、彼とは食堂でわかれたきり。

「い、伊倉さんは」

唇を大げさに開閉して尋ねると、シユウはやや目を細めて私と屋敷の方角を視線で辿り—— すぐに瞠目して半身を起こし「中か」と言った。続けざまに外へ向かって叫ぶ。

「ジジイ、伊倉がまだ中に！」

しかし四人は燃え盛る屋敷に気を取られてか、まったくもって気付く様子はない。

「くそっ」

埒があかないと判断したのか勢いをつけて起き上がろうとしたシユウはしかし、救急隊員の制止により再びストレッチャーに身を沈めた。慌てて立ち上がるそぶりを見せた草木さんも、貧血なのか失神をおこしたのか、膝からその場に崩れ落ちてしまった。

「草木さんっ」

無理もないと思う。彼女はここまでずっと、宿泊者の安全を確保しようとしてひとり必死で動いてくれていたのだ。抱き起こそうとすると、もうひとりの救急隊員が駆けつけてきて、着席してください、とたしなめられてしまった。

しかしこうなった以上、私に加賀見さんたちのもとへ行くしかない。

その場で立ち上がろうとすると、平行感覚が一瞬わずかに狂うような、かすかな浮遊感を覚えた。ヘリが宙に浮いたのだ。

「あの、ちょっと待ってください、降ろして！」

焦って叫んだけれど、機内の人間は疑問そうに首を傾げたあとシユウを示して、怪我人がいるから、と言いたげに腕を交差させバツ印を作った。

―― そんな。

閉まり始めたドアを見つめ、息を呑む。

様々な考えが浮かんでは消え、保身のような言葉を頭の中で繰り返す。

返していると、

「香月ッ」

微かに呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、すぐ後ろでシュウが私を、いや、私の向こう側を指差している。

「飛べ！ 今ならまだいけるだろ」

無茶な。

半開きのドアの向こう、遠ざかってゆく地面と自分の足下を見比べて、かぶりを振りながら再び彼をかえりみる。

もう飛び立ってしまったのだ。無理に決まっている。

「む、無理だよ！」

「はやく、時間がない！」

それでも急かしてくる声に、泣き出しそうになりながらできないよと小さくつぶやいた。

飛べるはずがない。運動神経が特にいいわけでも、脚力に自信があるわけでもない、私なんかに。

すると私たちの会話に気付いたのか、隊員の一人が慌てて扉に手をかけた。

「早く！」

点滴の管を繋がれたまま、シュウはストレッチャーの上で飛び起きる。

腕を振り回して行け、と叫ぶ様は若干狂気じみっていて、追い立てられるように私は席を立った。

隊員が総出で—— といっても二人しかいないのだけれど——
暴れるシユウを押さえつけ、横にさせようとする。まるで取っ組み
合いの喧嘩だった。

外を覗き込むと、地上へはすでに三メートル、いや、尚もぐんぐ
んと距離は開こうとしていた。踏み出すならもう、今しかない。

じわりと額に汗が染み出したのは、恐怖と焦りの両方からだった。
逡巡しながらも、吸い寄せられるようにして一歩、扉へと近づく。
飛べるはずがない、怖い、けれど。

「香月、行けえっ」

後押しをするようにシユウが叫ぶ。

振り返りはしなかったけれど、彼がまだ体をばたつかせているの
は振動でわかった。その、気迫までもが私の背を突く。

恐怖に耐えて震える手で機体をつかみ、そろりと身を乗り出すと、
救急隊員のひとりが私の腰を抱き首を振った。駄目だ、と。

けれど私は漠然と、行かなければ、と、そこで迷いを断ち切るよ
うに息を止めた。

あとはもう何も考えられなかった。意図して考えなかったのかも
しれない。もしも冷静になって状況を見極める余裕があったなら、
きっと怖じ気づいてしまっただろうと思う。

引き止める腕を振りほどき隙間に体をねじ込み、浮きかけた機体
から飛び出す。

空へと。

しかし引けた腰で踏み切った私は直後から垂直落下をはじめ、鳥
のようにひらりと優雅に宙を舞えたわけではなかった。浮遊感なら
へり内部の方がよほどあった。

けれど……体中で引力を感じた瞬間、私は何かに触れた。

ニュートンがどうのと小難しいことを並べ立てているだけでは決してわからない、根幹というか、本質というか、とても深い部分にかすかに。

そうして、ここにある『命そのもの』を、強く、強く意識していた。

これが私の重さ。

私の存在の重みなのだと。

開眼したみたいだった。つまり正直、っしだけ気持ちが悪かったのだ。また次も飛ぶかと聞かれたら、答えはノーだけれど。

こうして三メートルほど落下した私は、辛くも両手両足をついての無様な着地を決めたのだった。シュウが、よくやったと褒めてくれたような気がした。

「加賀見さんっ」

叫んで駆け寄ると、彼が私の行動を諫めにくるのはほぼ同時の出来事だった。

「な、何をやっているのだ君は！」

「伊倉さんです、伊倉さんがまだ、中に」

はっとして、やおら振り返り建物へと半歩ほど踏み出した加賀見さんは、拳を握りしめて立ち止まる。不審に思ってその視線の先を辿り、慄然とした。

正面玄関から溢れ出した白い煙、その所々に炎が垣間見えていたのだ。

二階部分はすでに窓という窓から炎が噴き出していて、焼け落ち

るのも時間の問題、といった様相だ。十メートル以上は距離を置いているのに、顔の表面がちりちりと焦げるように熱い。

すると私の肩をポンと叩いて前方に駆け出した人物がいた。ユーヤさんだ。

「俺が行く。救助を待つより早いし、ひもを辿りながら進めば、ギリギリ居場所も特定できるはずだ」

「やめろ！ 無理だ、これではどのみち助からん」

加賀見さんがとつさに腕を掴んで引き止めると、彼は憤怒の表情で振り返った。

「無理？ 俺はその言葉が大ッ嫌いなんだよ！」

鬼気迫る態度に、思わずそぞろ引く。

「落ち着け長谷、冷静になれ。おまえまで犠牲になったら」

「そうか、そうやって里奈のことも切り捨てたんだなッ」

里奈、それは確か彼の、亡くなった妹の名前だ。

協会のデータには可視と記されていたけれど、どうして今、その名が？

「リナ、……？」

「とぼけるな。可視は協会の財産だと言っておきながら、アンタは瀕死の里奈を見殺しにした。俺が助けを求めたのに、手を差し伸べてはくれなかった！」

ほんのり汗ばんだ加賀見さんの眉間に小さなしわが生じる。何かを思い出したのかもしれない。

「里奈は切り捨てられたんだ。アンタに。だからソフィの来日に手を貸した。まさか彼女があんなに病弱だなんて知らなかったし、殺されるとも思ってたんだ」

「長谷……」

「人の死なんてもう充分だ。充分なんだよ。だから医者を目指すのもやめたんだ。俺はただ適当に理由をつけて、アンタを引きずり降ろせばそれで良かったのに！」

到底信じがたい内容の告白をしたユーヤさんは、引き止める手を乱暴に振り払って屋敷の入り口へと一直線に駆けていく。

「長谷くん待つて、だめだ！」

「翠川、待つて」

「入り口付近にいてくれ加賀見、ひもを辿って戻ってくる！」

「玄冬ッ」

加賀見さんは承知した様子ではなかったけれど、それでも翠川先生は行ってしまった。煙の中に消えていく丈の長い白衣を見つめ、数秒後、私はようやく思い至った。

協会に恨みを持つ者、というのはユーヤさんのことだったのか。考えてみれば彼はソフィと同じ日、同じ朝、一緒にここへ到着している。加賀見さんは同行者がいないのはおかしいと言っていたけれど、もしか、彼がその同行者だったのでは？

それに、ユーヤさんは一応医学部中退の身。素人からみれば、わずかかもしれないけれど医学の知識を持った人間だ。彼が付き添ってくれるなら、とご両親も来日を許可したのかもしれない。しぶしぶ、だとは思っけれど。

そして、フランス本部のお偉方に通じている彼なら、救助の到着を遅らせるなどの根回しも可能だったに違いない。

そういえば。

私はそこで小さなひっかかりを思い出した。

『ジエ コンプリ』……わかった、って言ったんだな』とは、ユ
ーヤさんの台詞。

あのときは会話の先に何があるのかということばかりに気を取ら
れていたけれど、考えてみればおかしい。言葉が通じずにナンパに
失敗していたはずの彼がなぜ、フランス語をとっさに訳すことがで
きたのか――。

もちろん、その言葉だけを知っていたのかもしれないし、草木さ
んの前後の台詞から察したという可能性も捨てきれないけれど。

「今の、どういうことですか」

大汗を拭いながら、志津木さんが加賀見さんを訝しげに見上げる。
少しの間目を伏せて、彼は体内の二酸化炭素を全て出し切るように
深く息を吐いた。

同じタイミングでシュウを乗せたヘリが後方に着陸した様子だっ
たけれど、振り返っている余裕はなかった。

「去年のことだった。要望があつて、彼の妹が入院する病院に赴い
て……しかし私が見舞った時、すでに病状は手の施しのようのない
状態まで進行していたね」

「病気だったんですか」

「ああ。癌だったと聞いている」

噛み締めるように、加賀見さんは言う。

焦げ臭さが庭に立ちこめていて今にも咽せてしまいそうだった。

「では、彼は逆恨み、ということに」

「私に非がなかったとは言えん」

「ですが医学を志した彼なら、状況はわかっていたはずでしょう」

「亡くなったのは身内だぞ。心情は、……察するに余りある」

すこし、目を細めて。

「とはいえ、あんなことがあった以上処分せぬわけにはいくまい。彼も、伊倉くんのことも」

猛火は衰える気配を見せず、闇をいつそう明るく照らし出している。

屋敷のあちこちから、きしむような音。やがて二階の窓枠が焼け落ち、破片が細かな火の粉をまき散らしながら芝生の上に落下した。ついに崩壊が始まったのだ。

「私も、だな。責任問題は必ず浮上するだろう」

未だ戻らない人たちの身に迫る危険に気をもみながら、一方で、私は加賀見さんの言葉に耳を傾けていた。

「しかしまだ、退くわけにはいかない……私にはまだ、為すべきことがあるのだ……」

ここではないどこかを見つめる、子細ありげな瞳。

するとその直後だった。屋敷の入り口付近に揺れ動く影のようなものがよぎったのは。

私はそれを確かめようと、右足を一步前へ踏み出した。

「どうした？」

「いえ、誰かが見えたような」

四人の顔がいちどきに、重なるようにして浮かんでくる。

翠川先生、ユーヤさん、伊倉さん、そして—— 可能性は低いかもしれないけれど、栞さん。

「翠川？」

眉をひそめて呟く加賀見さんの目は細く凝らされている。ひもを見つめているのだろう。

「わかりますか」

「いや。私の目にシユウほどの精度はないからな」

「ああ……」

「状況的に見分けることなら出来るがね。数人をいつぺんに隠されると、なかなか難しい」

確かに、具体的なひもの見極めに関して、シユウはずば抜けた才能を持っている。

しかし所詮、私には直接うかがい知ることのできない世界だ。想像で補完するしかない、世界なのだ。

すると煙の向こうから翠川先生とユーヤさんの姿が垣間見えて、私はその場で背伸びをした。

「翠川先生、ユーヤくん！」

志津木さんが叫んで駆け寄ろうとする。しかし次の瞬間ドンと腹に響くけたたましい音が上がり、同時に地面が大きく揺らいた。

「きゃあっ」

何。

膝について体を屈め、後頭部を庇いながらそろりと視軸だけを持ち上げる。と、屋敷の右壁面が内側から破裂したのがわかった。

キッチンがあつた付近だから、ガスにでも引火して爆発したのだろうと思う。

間を置かずして、木だか紙だかの小片が火の粉とともにばらばらと降ってき、私は再び顔を伏せた。

「香月くん、怪我はないかッ」

体を引つ張り上げられると同時に、焼け付くような熱風が髪を舞い上げる。熱い、というより痛い。

「屋敷から離れる！」

「でも、みんなが」

みんながまだ。

熱気に耐えながら言いかけて、眼前の光景に言葉を失った。キッチン付近ばかりではない。建物はそのものが大きく歪み、景色が豹変していたのだ。

中でも、特に酷い崩れ方をしているのは玄関部分だ。大きな両開きの扉、そのすぐあちら側に、まるで筋交いを渡すようにして柱が倒れ込んでいる。

翠川先生達の姿は未だ見えない。庭にいる様子もない。まさか、あれの下敷きに――。

「はやく、君は安全な場所へ」

「だ、だけど、翠川先生が、ユーヤさんが」

「そんなことは分かっている！」

差し迫った様子の加賀見さんにずるずると引きずられ、二メートルほど後退したところで再び小さな爆発音が上がった。

瞬間的に、炎が玉のような形状で空へと吹き上がる。

前方から背を丸めた志津木さんがシャツを頭から被るようにして駆けてきた。つまり転げそうになりながら、必死の形相で。

畠さんはどこかへ隠れているのだろう、姿が見えない。

「駄目だ、声は聞こえるし、ひもも繋がってはいるけど、完全に退路が塞がってしまった」

繋がっている、ということは生きているのだ。

「加賀見さんっ」

無意識のうちに叫びながら彼を見上げた。これ以上、目の前で人が死んでいくのは嫌だ。

「阿呆、この状況で何が出来るというのだ！」

わかっている。言われなくとも承知している。出来ることなんて何も無い。私は無力だ。

目の前で、失われようとしている命があるのに。命が、そこに在るのに。まだ生きているのに。

何も出来ない。

悔しさのあまり、唇を強く噛む。

「早く逃げろ、馬鹿者！」

しびれを切らして私を抱きかかえようとする加賀見さんの腕を、

無我夢中で振り払った。

いやだ。

何も出来ない、できないけれど。

見捨てるのは、もういやだ。

「香月っ」

見兼ねたのか、青い顔をしたシユウが後方から駆けてきて私の前にしゃがみ込む。腕には軽く包帯が巻かれていた。応急処置だろうか。

「もういい。もう充分、できることはやったんだ」

私はゆるゆると首を左右に振った。できることはやった？ 嘘だ。

「じゅ、充分って、なに」

まばたきをするたびに歪んでゆく彼の顔に、亡くした面影が重なって蘇る。

「繋がってるんでしょ、ひも。ねえ」

「……ああ」

「じゃあどうして！」

どうしてそんなふうにあきらめてしまえるの。

それはいつかと同じ、涙ながらの訴えだった。見開かれたシユウの瞳には、困惑と驚愕の色が入り交じっている。その腕に縋り付くようにして、私はぼろぼろと続けざまに涙をこぼした。

「どうして、もういいなんて……いうの、ねえ」

もう、こんなことは二度とするまいと思っていた。

「……………、いきてるんだよ」

あの日から、ずっと。

「……………生きようとしてるんだよおっ!」

こんなにみつともなくて情けなくて無力を再認識するようなこと、するまいと思っていた。

抗って無くすのも、抗わずに無くすのも、結果的には同じなのだからと。

無駄なのだからと。

「香月、落ち着け!」

「はなしてえっ」

だけど、ほんとうは。

「翠川先生、ユーヤさん、伊倉さん!」

そんなの、大声を上げて泣きわめくより辛かった。孤独だった。何もかもを臆病の所為にして、諦めてしまえる自分のことが……嫌いだった。

—— 大嫌いだった。

もういやだ。こんな自分でいるのは嫌だ。
変えたい。全てを変えたい。自分自身も、こんな現実も、全部。
変えたい。
変えるための力が欲しい。

力が欲しい。

今、世界が分岐しようとしているのなら。

それを、選びとる力が欲しい。

「香月！」

「いやあ——っ！」

体の奥底から湧き上がってきた叫びだった。喉が染みるように痛かったけれど、かまわなかった。

今を変えたい。これ以上誰も亡くしたくない。その気持ちをもつ、ごまかすことはできない。

すると突然、びりっ、と体の表面に軽い電流のようなものが走った。

「きゃ」

驚きと痛みにより短い悲鳴を上げると、次にぱつと顔の前で光が散る。白く、まばゆく、しかし儚いくらい一瞬の、まるでカメラのフラッシュのように。

加賀見さんはたまげた様子で私から手を離し、へたりこむように尻餅をつく。

「う、わッ」

「か、加賀見さ」

しかしその名を呼ぶや否や—— 世界は突如として『青』に染まった。

青だ。

とはいえ、透明感のある青とは少し違う。

ぼんやりと景色の輪郭が霞んでいる。まるでルノワールの絵の中に入り込んでしまったかのように。

これは……霧だろうか。多少の濃淡はあれど、闇でさえうつすらと青を含んでいる。

皆が混乱している様子を見るに、自分だけが幻覚を見ているとか貧血を起こしたというわけではなさそうだった。そもそも貧血のときには目の前が真っ暗になるだけで、こんな青を目にしたのははじめてだけれど。

シユウはふらふらとおぼつかない動きで右へ左へと進んでは止まる。

「な、なんだよこれ」

何—— 私にだって分からない。

セロファンを通して景色を見ている、というより、空気自体から突如じわりと染み出したような、鮮やかで深い、藍に近いこっくりとした青……これは。

数十時間前、この場所で知った構造式がぱつと脳内に蘇った。そうだ、もしか。

「インディゴ、ブルー……」

呟いたとたん景色は嘘のように元の色を取り戻し、しかし息をつく暇はなかった。

「ひあっ」

奇声を発して飛び上がる志津木さん。私はただ言葉を失っていた。なんだろう、これは。

まばたきをする間もなく、あたり一帯に出現した水滴はまるで、景色に添えた細かな水玉模様のよう。

決して雨が降りだしたわけではない。突如そこに、大粒の水滴が漂っていたのだ。

そしてその物体は直後、重力に逆らうことなく垂直に落下した。ざあっ、と一斉に草木を叩きながら。

「ジ、ジジイ、なんだよこれ！」

「知るか、私が聞きたいくらいだッ」

何が起こっているのか、皆目見当がつかない。しかしその後も水滴は、まるで結露を繰り返すように次々と現れては落ちる。

と、何かが蒸発するような音が連続的に上がって、私はとっさに視線を上げた。

水蒸気？ 真っ白な煙が空に。

どうやら、屋敷を包む炎と謎の水滴が接触しているようだ。

「火の勢いが、引いていく……」

茫然と呟きながら、加賀見さんはゆっくり私を見下ろす。

「君、いつの間に……いつの間にそれを繋げたのだ。なかったはずだ、その、ひもは」

ひもを繋げた？ 私が？ 誰との？

覚えがない。確かめようにも知覚できない。

「まさかこの現象も君の仕業なのか。一体、なにを」

「え、わ、私」

何もしていない。加賀見さんだつてずっと側で見ていたはずだ。

答えようとすると、またも目の前ではっと光が弾けた。そこで私はようやく気付いたのだ。

自分の声に反応して一連の現象が引き起こされている、ということに。

「もしかして—— 君は声にリールの力があるのか。それで、見えずとも、触れられずとも、ひもを繋げられるというのか」

加賀見さんも同じことに気付いた様子だった。

シユウは志津木さんの肩をひとつ叩く。そうして、「火が弱まっているうちにあいつらを！」屋敷内に残された人たちの救出のため、走り出したのだった。

「……ではこれは、水分子を繋げて？ 白い光は、単色光を集光させたのか……？ いや、それでは説明がきれない。そもそもミクロの世界に干渉するようなこと」

そこで、もしか、と彼は呟く。

「振動、弦……ひも。ああ、そう考えれば或いは。いや、君がそう

解釈しているから可能だということなのか」

涙は既に引っ込んでしまっていた。代わりに、冷や汗が滲み出す。すでに全身くまなく濡れそぼっていて、どこまでが汗なのかはわからない。

しかし焦る一方で私は、加賀見さんが次に口にするであろう言葉を、冷静に予想していた。

そうだ。

私は、お兄ちゃんが教えてくれたことを忘れたくはなかった。

いつまでも彼の価値観の中で生きていたかった。彼とともに、生きていたかったから。

「スーパー・ストリング・セオリー、物質の究極は『ひも』である」と

20・彼の瞳の奥底に

あれから一週間、私たちは近くの総合病院に場所を移し、ふたたびひとつの部屋で顔を合わせていた。

不思議な気分だ。彼らとは古い知り合いというわけでもないのに、揃った場の空気を懐かしいと感じるなんて。

ユーヤさんと翠川先生、そして伊倉さんは一時状態が危ぶまれたものの、大事に至ることはなかった。

最も深刻だったのは予想に反してシユウで、彼はなんと食堂での乱闘時、既に肋骨を一本折っていたらしい。その状態で皆を助けに行っただから凄い。すっかり見直してしまった。

そして―― ほぼ無傷で済んだ志津木さんと加賀見さん、草木さんと私は別の協会施設で保護と言う名の抑留を余儀なくされていたのだけれど、先刻帰宅の許しが出たので、そのまま入院している四人のお見舞いに寄ったというわけだ。

栞さんかというと、……やはり助からなかった。

加賀見さんの話によれば彼女は二階部分から焼死体として発見されたとのことだった。焼け跡からは、ソフィの眼球と思しきものの残骸も見つかったそうだ。

因果応報を思う一方でやはり、死しか道はなかったのかと疑問に思う気持ちは消えない。生きて償うべきだった、とかいういかにもな正論は横に置いておいて、はつきり言えばただ生きていてほしかったと思う。

……生きていてほしかった。生きる術がまだ残されているなら、捨てないでほしかった。

『死』は最後の最後に選択肢が無くなってから『受け入れる』ものなのだと、私はそう、思っていただけなのかもしれないけれど、そんなふうには死んでいった、お兄ちゃんのためにも。

「要するに香月にとって、この世界は全部が繋がられるもの——
ひもだったってことなのか」

シウは納得がいかないとしても言いたげに首を傾げる。

ミクロの物質を繋げる力が自分の声に宿っている、そんな突拍子も無い話、私だって未だに信じられない。

「平たく言えばそうなるな。我ら普通のリーラーが結べる『ひも』と超ひも理論でいう『ひも』はもちろん異なるが」

「はあ。で、スーパーストロング総理だっけ、何なんだそれ」

「スーパーストロング・セオリー。別名超ひも理論は、物質の究極を点ではなく弦……ひもとする解釈なのだ」

「解釈って、要するに想像……考え方ってことだろ。実際のところは違うだろうに」

まだ得心には至らない様子だ。

「実際、はあまり意味をなさないのだろう。恐らく、彼女がどう捉えているか、が問題なのだ。現実にもそうだったではないか」

加賀見さんは言ってるリングをくるりと剥いた。なだらかな曲線を描く真つ赤な皮は、絨毯のように均一な幅で長々と垂れ下がる。随分と慣れた手つきだ。

対して私は、会話に加われないほど必死でリングと格闘していた。どうしたらあんなふうに長く美しく剥けるのだろう。記憶が正しければ、包丁を持ったのは中学三年生の家庭科、調理実習以来だ。何故こんなに面倒なものをお見舞いの品に選んでしまったのだろう。今になってじわじわと悔やまれる。値は張れどハウスミカンにすべきだった。

「その理論で言うと、ひもは—— ああ、わかりにくいから理論のほうは『弦』と呼ぼう。で、弦はだな、震えることによって様々なものに变化する、とされているのだな」

「変化だと？」

「ああ。彼女の声には恐らく、そこに作用する力があるのだろう」

「はあ。いまいちわかんねえけど、香月にとっては両方が『ひも』で、操れるものだった、ってことだろ」

そうだ、と加賀見さんは得意げに言う。リンゴの皮がぷつと切れる。

「弦を震わせて—— 物質を変化させる。さらに、そこにリーラーとしての‘繋ぐ’力が加わって彼女はあらゆるものを合成できる、というのが私の仮説だ」

象牙色の床には、窓枠に抜き取られた台形の光。明け方と比べ、真上に位置する太陽からは少しの赤みを帯びたそれが照射されている。

「弦からひもを生成する力があるってことか」

「そうともとれるな。とはいえ、これは私の勝手な解釈だがね」

「ジジイの説教は大半がそんなじゃねえか」

「ふん。それを言ったらひも理論だって完成しているわけではないし、そもそもこの世界などまやかしそのものではないか」

「まやかし？」

訝しむシュウの前でひと呼吸置いた加賀見さんは、

「目に見えるものも見えないものも、自分というフィルターを介す

る以上万事が想像でしかない、という意味だ」

やけに悟ったような台詞を放つと、カットボードの上に裸のリンゴを置いた。シュウはベッドの上であぐらをかいて、難しい顔でうんと唸る。私にも、加賀見さんの話は分かるようで分からなかった。

病室に、さくつ、リンゴを切り分けるみずみずしい音が響く。口の中が甘酸っぱくなった。

「しかしあのインディゴブルーには驚いたな。あんなに美しいものが生成できるとは、真に畏れ入った」

ふたつめのリンゴを手に取りながら、加賀見さんが感心したように言う。

最も驚いているのは私自身だ。

物質を変化させたり繋げたり出来る、などという説明を受けるのはもう四度目だけれど、未だに信じられない。それが本当なら、人間離れしすぎていて怖いくらいなのだ。シザーであることを知って食堂を破壊したというシュウの気持ちも、若干理解出来たような気がする。

そう言いたかったけれど口を開く余裕などなかった。

「あのな、美しいとか感じてる状況じゃなかっただろうがよ。あの非常事態で」

シュウは呆れた声で言って、リンゴをひとときれ摘み食う。「うん、うまい」

「ああ、どうせならパーキンスモーブも構造式を覚えておくべきだったな」

「おい偏屈ジジイ、また聞いてねえフリか」

「繋げるにしても、構造を理解していなければ繋げないだろうからな。これもまた、私の仮説ではあるが」

「つつか今、無視する理由がわかんねえよ。メリットねえだろ」

「そうだ香月くん、今からでも教えるからちよつと生成してくれないか。是非この目で拝みたい」

「聞けコラ。おまえ小学生か」

加賀見さんは強気も強気、牽強付会の話題すら挟もうとはしない。私もそろそろ黙ってはいられず、一旦包丁を動かす手をとめた。

「無理ですよ、だってあれつきりですもん。この通り、今は普通に喋ってますし」

「我々可視の力と同じだろう。見ようと思わなければ見えない。合成しようと思わなければ合成できない。それだけのことだ」

「いえ、別に私、あるときだって合成したいと思ったわけじゃ」
「何とかしようとは思ったのだろう」

それはそうなのだけれど……本当にそういうものなのだろうか。いまいち納得できない。

「モープもぜひ、ささつと作ってくれたまえよ」

「そんな、絵の具じゃあるまいし」

さりげなくフォローをしてくれた志津木さんの背後、隣り合わせたベッドに横たわる伊倉さんとユーさんは黙したままだ。彼らには特に含むところがあるようだから、仕方ないのかもしれないけれど。

すると察したのか、草木さんが紙のトレーを持って二人に声を掛けた。

「食べませんか。甘いですよ」

メイドらしい、流石の気遣いだ。彼女は現在、職場が消失してしまったために失業中だったりする。この後、どのように新たな職を得るのかは、ひとまず本部任せなのだから。

その呼びかけに応じたのは予想に反して伊倉さんで、

「ありがとうございます」

驚くほど穏やかに答えてそれを受け取ったのだった。表情はどこか安らかで、しかし明るいとは言いがたい。

対しユーヤさんはあからさまに不機嫌な顔をして、鬱陶しいとも言わんばかりに寝返りを打って壁に体を向けてしまった。

しばし気まずい沈黙が降りてくる。と、三つめのリンゴを切り分けた加賀見さんが

「長谷」

彼を呼んで丸椅子から重い腰を上げた。

「受け取れ。さもなくば香月くんが剥いた芸術的なリンゴを口にする羽目になるぞ」

随分遠回しに批判してくれたものだと思う。指摘されずとも自覚はしているので、せめてこのタイミングで引き合いに出すのは勘弁してもらいたかった。

「……そっちでいい」

「腹を壊すかもしれんぞ。なにしろ酷い出来なのだ。ゲルニカの前

に転がしても違和感がない程度に」

「放っておいてくれよ、もう」

「放ってはおけぬ。なぜなら、本人には直接言えなかつた。食べぬ、だなんて」

言っているではないか。

追い討ちをかけるようにシュウがくつと喉の奥で笑うと、それを咎めるように、草木さんが彼の肩をしたたか打った。氣遣ってくれたのだとは思うけれど、虚しい。

いっそ始めから、出来ませんと断るべきだった。

ため息について、半分だけ皮を取り除いた（剥いたとは言い難い）リンゴを草木さんに託そうとしたときだった。

「―― 申し訳なかった」

きっぱりと言って、加賀見さんが長谷さんに深々とこうべを垂れたのは。

「妹君のことに關して私の対応が後手に回ったことを詫びたい。申し訳なかった」

私は志津木さんと思わず目を合わせた。あの火事の際に聞いた話だろう。

「な、なんだよ、今更。謝るくらいなら、とつとと辞めてくれよ副会長」

むつとした様子でユーヤさんは半身を起こす。しかし加賀見さんは、さらに深く体を折って場の全員に詫びた。

「すまない。皆を危険な目に遭わせたことも、申し訳なかったと思っている。だが今、役職を辞することはできない。私にはまだ、為すべきことがあるのだ」

為すべきこと—— あの時にもそんなことを言っていたけれど、一体何なのだろう。

「都合良すぎるだろ、それ。甘い汁が吸いたいただけなんじゃねえの？ 思う通りに、あんな屋敷なんておっ建ててさ」

「……私は、救い出さねばならないのだ」
「ジジイ！」

やめろ、とでも言いたげにシュウが口を挟んだけれど、加賀見さんは台詞を途切れさせたままにはしなかった。

「朱夏を……本部から奪還するまでは、立場を退くことはできないのだ」

「シュカ？」

「朱夏はリール協会日本支部の、現会長——そして、私の妹でもある」

どういことですか、とすかさず聞いたのは志津木さん。一連の行動からして、彼は疑問を疑問のままにしておくことをよしとしないうい性格のようだ。

「幽閉されているのだ。フランス本部に」

幽閉——何故。

それに、兄ならともかく妹が会長だったなんて不自然だ。翠川先生と草木さんが気まずそうにしているところを見ると、二人は事情

を知っているとみて間違いないだろう。

すると故意に話題を取り上げるようにしてシュウが口を挟んだ。

「そうだジジイ、香月に教えてやって欲しいことがある。おき——
ええと、オキナガタスク、だっけ」

突然お兄ちゃんの名前が出たので、どきりと心臓が冷えた。加賀
見さんも虚を突かれた様子で顔を上げる。

「沖永佑？ ああ、君の幼なじみの、か」

「は、はい」

「彼がどうした」

核心を問われ、私はもはや、これまでと同じく黙ってやり過ごす
わけにはいかなかった。

お兄ちゃんが協会と接触していたこと、その日にあったこと、見
聞きしたこと—— 私は抱いていた疑問をそこに全て吐き出しきつ
た。

しかし焦ったせい、時系列もバラバラならまとまりにも欠く内
容で、きちんと伝えきれたかどうかはすこぶる怪しい。我ながら感
心してしまうほど支離滅裂だった。

嫌な脂汗を拭くと、加賀見さんがおもむろに唸った。

「そうか……彼は君に、あのことを明かす前に亡くなったのだな？」

あのこと？

思わせぶりの言葉にかぶりつく勢いで、シュウが身を乗り出す。

「何か知ってるのか、ジジイ」

「知ってるも何も、三年前、彼の自宅に赴いたのは私だ」

「えっ」

ではあのとき沖永の家のリビングにいたのは、私が見かけた、黒いスーツの男は……加賀見さんだったのか。

「最初にも言っただろう、君はあのときの少女だな、と」

「そ、そういえば……」

すっかり忘れていた。

「なあジジイ、それ、副会長が自ら出向くような案件だったのかよ」
「まあな。一時期は上層部が騒然となったものだ。未知の能力を秘めたリーラーの少女がいる、事実であれば即刻保護せねばと」
「少女？ それ、どういう意味ですか」

お兄ちゃんは『少女』ではなかった。とすれば……加賀見さんが訪ねて来たのは彼ではなかった？

口の中がからからに乾いている。思考がまとまらない。

「聞いている通り、君のことだ、香月捺南くん」

「わ、わたし？ どうして」

「君は無自覚ながらも強い力を持つリーラーだった。ただし不可視であり、ひもにも触れられないときだ。我々にとっては仲間と捉えるべきか全く別の種類として捉えるべきか、意見が割れてね」

彼は残業帰りのサラリーマンのように蓄積した疲労を吐きだして、ドアに背をもたれかける。無理もない。つい昨日まで、本部の役員からねちっこい事情聴取を受けていたのだから。

「ひとまず日常の様子を詳細にうかがうために、君を見張らせたの

だ。その動きに真つ先に気付いたのが、沖永佑くんだった。君が怪しい人間に狙われているとでも思ったのだろう。登下校時にぴったりとガードをし始めてね」

覚えがある。三年前だけではない、お兄ちゃんは高校へ進学してから最寄り駅で私を待っていてくれた。あれは私を護るためだったのか。

「そこで、我々は君のご両親に事情を説明しに行ったのだよ」

「りよ、両親にも会ったんですか」

「ああ。現在こちらで保護していることも伝えてある。心配ない」

そうですか、と言って胸を撫で下ろした。心配されているだなんてうぬぼれはしないけれど、それでも少し安心してしまった。

「じゃあ、どうしてあの日お兄ちゃんの家で、死ぬ、とかって」

「……沖永佑を説得しに寄ったのだ。あれは半分が脅しのようなもので、近い未来に起こりうる可能性、だったのだがね」

シユウが眉間に皺を寄せて、はあ、と零す。

脅しって一体。私の頭の中は混乱を極めていた。

「それでお兄ちゃんとは私と引き離される心配をしていたってことですか。でもどうして。お兄ちゃんは可視だったんですよね。協会のことでも知ってただろうし、様子を見るだけならお兄ちゃんに頼めば良かったわけで、私たちが離れる必要なんて少しもなかったんじゃない」

おかしい。何もかもがおかしい。

「……沖永佑のパソコンはまだ自宅にあるのか」

「え？」

「何かを作っていたと言ったな。そのデータは、まだ残っているのか」

「知りません、けど」

「ならば確かめに行くべきだ。君は……君は全てを知る必要がある」
言って加賀見さんは左斜め後ろを振り返る。

「滝口くん、至急手配を——」

しかしそこには、空虚を埋めるように細かな塵が漂っただけだった。

こうして一週間後、退院した四人を含む私たち八人は揃って沖永家の門を叩いた。

八人、というのはもちろん畠さんを除いた人数だ。今回のことで人間不信に磨きがかかった彼を密室から引きはがすには、きっと北風も、太陽も、相当の難局を強いられることになる。

「邪魔するぞ」

まるで自宅のように、加賀見さんは沖永の家の玄関をくぐる。

大人数での移動はいい。考えずとも足が動く。だから私はまるで隊列の一部になり、順番が回って来たからそこに足を踏み入れた、みたいな感覚で、ひとりならば跨ぎきれなかっただろ敷居を難なく越えることが出来たのだった。

事前に話が出来ていたのか、通されたのはリビングというワンクッションもなく、お兄ちゃんの部屋だった。

とはいえ、全員が七畳間に収まりきれはるはずはない。そのため私とシユウ、加賀見さん、翠川先生、そして加賀見さんの強い希望により伊倉さんが部屋に残り、あとのメンバーは一階へと引き返す羽目になってしまった。

穏やかな顔で全員分のレモンティーを配ってくれたおばさまは、最後にひとつ、彼の学習机にカップを置く。懐かしい匂いと酷い違和感が同時に漂った。

あの頃のまま、時を忘れた光景――。

これまで自分だけが置いていかれた、取り残されたと思っていたけれど、それはおばさまもこの部屋も同じだったのだと、気づかされた思いだった。

景色が融解するように潤む。それを零さずに済んだのは、周りの目を気にした結果だった。

「ふむ、予想通りで予想外だ」

お兄ちゃんの椅子に我が物顔で腰掛けて、パソコンとにらみ合っていた加賀見さんが両手を挙げる。

マザーグースを彷彿とさせる奇妙な物言いに、紙一枚挟む間もなく文句をつけたのはシユウだ。

「どっちなんだよ」

「どっちもだ。データにプロテクトがかけられている。これでは開くことができない」

「プロテクト？」

「ああ。数字でもアルファベットでも良い。これを開封するためには四桁のパスワードが必要らしい。君達、本人から何か聞いていないか」

呼びかけられて、おばさまは咄嗟に私を見たけれど、視線を合わ

せる勇気はまだなかった。

「……いえ。私も主人も、そもそもそんなものを作っていることすら知りませんでしたし」

「そうか。ならば致し方あるまい」

「四桁ねえ……それ、誕生日とかは？」

翠川先生の問いに加賀見さんは悟ったような顔で笑う。

「もう試した。全滅だ」

「香月さんの誕生日は？ それ、彼女に見せるために作ったんじゃない」

「いや、違った」

「じゃあそれを、い」

「入れ替えて、などと有り体なことをこれ以上言っつな玄冬」

「何故わかったんだ」

「おまえは医者と言うより患者向きだ」

「どういう意味だい」

「顔を見ただけで全てがわかる」

「おまえらしい加減にしろつつつの」

掛け合いに鉦を入れたのはシュウだった。相も変わらず絶妙のタイミングだ。

「このデータを最後に弄ったのは事故当日みたいだな。おい香月、オキナガに最後に逢ったのはおまえだよな」

「うん、そうだけど」

「何か言い残したことかなかったか」

言い残す、って自分の最期を悟っていたわけじゃああるまいし。

舌の上に乗りに掛けた反論を飲み込みつつ、しぶしぶ記憶をたぐり寄せる。あの朝――

『将来、僕と一緒にしてもらえないかな』

お兄ちゃんは、唐突にそれを切り出した。どうしても今、言っておきたかった、と。思い当たるとしたらこの台詞しかないけれど、言い残した、とは考えにくい。

しかし、少々疑問には感じる。

どうしてあのタイミングで？ 内容からすれば、もっと改まって伝えても良さそうなことだ。

何か理由でもあったのだろうか。焦って伝えなければならないよな―― 逆に言えば、急いで伝えなくなるような。

「……約束なら、した」

「何の」

「将来、一緒になろうって。死ぬまでずっと一緒にいようって。突然言い出すからびっくりしたけど、私、うん、って答えて……。これって何か、別の意味があったのかな」

伊倉さんがあからさまに視線を泳がせたのがわかった。おばさまがわずかに俯いたことも。

「ふうん……、もしかして沖永、数字に強くなかったか」

「うん、数学は得意だったみたいだけど」

私の記憶に頼る限り、彼は完全なる理数系だった。本を読むのも好きだったみたいだけれど、たいてい物理関係の難しいタイトルのものだったように思う。

「なら多分、4875、もしくはその四つの数字の組み合わせかな」

シュウの口角を持ち上げているのは確信の二文字だろうか。

「え、どうして」

不思議がつて尋ねた私とは裏腹に、加賀見さんはワークチエアをくると半回転させ、無言のままキーボードを叩く。余計な質問を必要としないのは、それだけシュウを信頼しているから、に他ならない。

その指が最終的にリターンキーへ辿り着くと、ディスプレイの切り替わる様子が私の位置からも確認できた。正解だったのだ。

「よし、ビンゴだ」

言つて、指を鳴らすシュウ。やはり凄い。ここぞというときの鋭さは並外れたものがある。

「あの、今の数字、どうして？」

尋ね直すと、敵将の首を取ったかのごとく得意げな顔で答えてくれた。

「48と75は—— 最小婚約数なんだ」

「さいしろう、こんやくすう？」

「ああ。異なる自然数の組み合わせで、その数自身と1を除いた約数の和が、お互いの数になる、その最小だな」

と、さらりと言われたところで即納得できるはずがない。聞き返

そうとしたところで、伊倉さんになるほどねと納得した様子で言った。

「48の、1を除いた約数は2、3、4、6、8、12、16、24で……ああ、足すと確かに75になる。この逆で、75の場合には和が48になるってことだね」

なるほど、そういう意味か。お互いがお互いを示す、最小の婚約数……いかにもお兄ちゃんが考えそうなことだ。

「想像でしかねえけど、沖永はその日、やっとデータを仕上げたんじゃないかな。で、喜び勇んで香月にパスワードのヒントを教えに行った、と」

「あれってヒントだったの？」

「いや、ヒントがメインだかプロポーズがメインかは、本人に聞かなきゃわからねえけどさ」

「うん……、そう、だよな」

それは、永久に失われた答えなのだろう。当然、さしものシュウにも判断できないことで――。

どちらにせよ彼は私にきちんと鍵を残しておいてくれた。そのことに気付けただけで充分成果はあったと思う。

「ありがとう、シュウ」

「……いや。ほら、ファイル開くぞ」

すると、何かを読み込んでいる様子だったパソコンの画面が一瞬間になり、次に予想外のものが大映しになった。

自分たちの姿だ。それも、食い入るようにやや下方を覗き込んでいる画。

「成る程、カメラか。考えたな、沖永佑」

愉快げに加賀見さんが示した先、ディスプレイ上方に設置された丸いレンズのすぐ脇には青いランプが点灯している。作動している、ということなのだろう。

しかし、一体なぜこんな映像を映し出す必要が？ 自分自身を見つめ直せとも言いたいのだろうか。いや、まさか。

それならわざわざパスワードを入力させるはずがないし、鏡でも使ったほうがよほど手軽だ。

お兄ちゃんは長い時間をかけて、必死で何かを作っていた。表現しようとしていた。単なる備え付けのカメラ映像を見せて終わりだとは、到底思えない。

「香月くん、ここに座りたまえ」

すると、そう言った加賀見さんの顔の前に、画面の中ではぱっと連鎖的に橙色が発生した。インク染みのようなそれはまばたきをする間に消えてしまい、見間違いではなかるうかと私は思わず右目をこすった。

「何か喋ってみたまえ」

「え、私が、ですか」

喋るって、まさか画面に向かつて？

疑問を短く発したそのときだった。私は大映しになった自分の映像に、オーロラのような煌めきを見た。声と同時に、顔の前。厳密に言えば唇の前に――。

真珠を細かく砕いて、銀粉と同時に散らしたような。

「なに、これ」

思わず画面に食い入る。

それはオパール輝きにも似て神秘的で、時々淡い青緑を含む白い光だった。これは一体。

「これが沖永佑の見ていた世界だ」

これが……？　ということは、今のがひものだろうか。でもシユウは無色透明だと言っていたし、ひも、と言うからには当然細長い形状であるはずだ。

呆然としていた私の両肩を、加賀見さんが掴む。

「……落ち着いて聞きたまえ。彼は、可視ではない」

耳元で教え諭すように伝えられた言葉は、到底信じ難いものだった。

「そ、そんなことありえないです。だってお兄ちゃんにはこれが――
ひもが見えていたんですよね」

画面を指差し訴える。それならこれを何と説明するのか。

「これはひもではない。変わった物が見える、という事象は協会でも審査させてもらったのだが……まるきり別物だったのだよ」

「別物」

「そうだ。彼自身は、君と同じだと――　これはリールの力なのだ
と言って譲らなかったがね」

加賀見さんは大きく頷く。

そして、たったひとつの答えは、告げられるに至ったのだった。

「沖永佑は—— 共感覚者、だったのだよ」

キョウカンカク……？

そうだな、と同意を求める彼に、おばさまは今度こそしっかりと頷く。

「はい。あの子には幼い頃から、音や文字や数字に、私たちにはわからない色のようなものが感じられていたんです。それで、研究施設から何度か呼ばれて。でも他人と相容れないものだってことは早いうちから悟っていたんでしょう、近所や学校では徹底して伏せていました」

ああ……！

—— 捺南を表現するのは世界一難しいよ—— 何故ヒトにとって、この領域が可視なんだろう。捺南はそれを疑問に思わない？—— 僕はニュートンの、色彩と音楽を関連づけた考え方が好きなんだ—— 音の調和が空気の振動の比から生まれるように、色の調和も視神経を通して脳髓に伝達される震動の比から生まれるんじゃないか、って——。

彼の言葉が雪崩を起こして、その向こうの真実がようやく姿を現したようだった。

共感覚、音や色や数字に色を感じる。それであんなことばかり調べていたのか。もしか、計算が速かったことも音に敏感だったのも、そこから？

半信半疑ながらも、得心がいった思いだった。

ということは、お兄ちゃんの死はやはりリール協会とは無関係…

…。

「……知らなかった……」

漏れた声に、青みがかった白色が重なる。これが、私の声の色。

お兄ちゃんの目に映っていた私。

息を呑んで画面を見つめると、おばさまが歩み寄って来て私の手を取った。泣き出しそうな笑顔だった。

「……驚いたでしょう。気持ち悪いと、思う？」

おばさまの声は、加賀見さんの声に淡い桃色を混ぜ込んだような柔らかなサーモンピンクだ。

「いえ。驚きは、しましたけど、こんな、こんな綺麗な景色、みたことない」

まるで色彩の洪水だ。絵の具では到底、表現しきれないほど綺麗な世界だと思った。

「そう、ありがとう。私ね、あの子は……佑はずっと孤独なんだって思ってたの。本当の自分をひた隠しにして……だけどこんなものを用意してたってことは、捺南ちゃんにだけは出来るだけ正確に理解してもらうつもりだったんでしょね」

いつかの記憶を呼び覚ます、湿り気を帯びた声。余計に顔を直視できなくなつて、画面越しに盗み見るしかなくなる。

「あの子、捺南ちゃんを前にすると、難しいことばかり話していたでしょう。あれね、全部照れ隠しだったのよ。おかしいわよね」

けれどそれも、数秒のうちにぼやけて見えなくなった。

つまり私は物心さえ朦朧げな頃からずっと、彼に思われ続けていたということなのだろう。

知らなかった、こんな。

自分の柵さえ飛び越えられれば、見える世界もあるのだということ。

「……おばさま、私、私も、お兄ちゃんのこと、ずっと」

その先は、唇を渡る前に昇華した。もうわかったから、とでも言いたげに掌を翳し、おばさまが笑ったから。

「ありがとう。佑はしあわせだった。ひとりじゃなかった。今、やっと、そう思えた気がする……」

はたはたと、儚い音を立てて水滴がカーペット上に散った。涙というより、感情の飛沫だった。

喉の奥が焼け付くように痛い。それでも止めることなど出来なかった。

「う、う……っ」

しあわせだった——わたしこそ。

「ありがとう、捺南ちゃん……」

「……ふえ、ええ……っ」

「ありがとう。佑を、好きになってくれてありがとう」

おばさまの目に溜められた涙には、淡く白い光が映り込み、乳のように優しい。

その腕に抱かれ、私は慟哭した。

―― ああ、本当に死んでしまったんだ。

ソフィの死に遭遇してからというもの、これまで見ないふりをしてやり過ごして来た、彼の死に関する疑問を根こそぎ掘り起こしてきた。どうにかして真実を手に入れたかった。

そうして私は認めたかったのだらう。彼がもう二度と、ここに戻っては来ないということ。

彼の完全なる死を。

私の体を胸元に押しつけ撫でてくれる、おばさまの腕はひたすら柔らかい。ここにはかつてお兄ちゃんも抱かれていたのだと思うと、切るような悲しみに襲われた。

同時に、自らの母を思った。父を思った。弟を思った。そうして私には帰る場所があるのだと知った。

そこで、しばし傍観者と化していたシュウがおばさまに向かって口を開いた。

「下の階にいる長谷を呼んでもらえたら助かる」

随分不躰な申し出だ。

私が行きます、と言いたいのはやまやまだったけれど、しゃくり上げつつ涙を拭くのが精一杯だった。

快く引き受けてくれたおばさまが部屋を出て行くと、見計らっていたかのように加賀見さんが喋りだした。

「沖永佑……彼は唯一、香月くんの声が特殊だということを最初か

から見抜いていた人間なのだろう」

「え……それは、リールの力を宿している、という意味で、ですか」
自分で同情したくなるほど酷い鼻声だ。

「いや、本質まで見抜いていたかどうかはわからん。だがここに映る君の声は誰よりも美しく他とは明らかに別格だ。ほのかに発光し、時に煌めく」

確かに、画面に表示される私の声は、加賀見さんのものともおぼさまのものとも違う。色というには眩しくて、光に近い性質がある。

「皮肉なものだ。まさか彼のほうが亡くなるとは。あのとき、私が『死ぬ』と脅しかけたのは君の命のほうだったのだがね」

傍らの加賀見さんを、ゆるり見上げる。私が、死ぬ。どうして。

疑問のまなざしに答えて、その唇は再び開かれた。

「あの頃の君はバックラッシュを起こしかけていてね」
「バック、ラッシュ……」

ああ、そういえばリールがひもに絡まる現象だとシユウに教えてもらった。最悪の場合、ひもを全て切断しなければならなくなる、と。

「そうだ。あのとき佑くんには、このまま協会の偵察を妨害し続けるなら最終的には君達を引き離さなければならなくなるぞ、と忠告したのだよ」

そうか、だから『離れる』って。

「しかし彼は反発し続けた。そこで我々は最終手段として、協会関係者と君の間のひもを断つことで、君の延命を図ったのだ」

そんなケースもあるのか、と感心したように零して、シユウは長く息を吐く。

「とはいえ、そんな応急処置も長くは続かん。ひもは絡まり続けていた。君はいつ倒れてもおかしくない状態だったのだ、が、偶然の事故でその原因は消滅した……」

視線を落とし、加賀見さんが濁した語尾。私はそこに続くべき言葉を、無言の空気で受け取った。

自分がこうして今もまだこの世で生きながらえている理由、それは。

「お兄ちゃんが亡くなったから。お兄ちゃんとのひもが、切れたから……？」

「ああ」

「そんな、嘘だ」

つまりそれは、彼が生きていたら、私は死んでいたかもしれないということ。

こんな。こんなことがあるなんて――。

「嘘だ……」

そこでふいに予想外の謝罪が聞こえ、私は顔を上げた。

「……すみません、でした」

発したのは伊倉さんだ。思わず表情が凍り付くのを感じた。
お兄ちゃんの死に、彼が関わっているのではとつさに思っ
てしまったからだ。

シュウと加賀見さんは申し合わせたように、揃ってふんと鼻を鳴
らすと、「やっぱりな」短く言う。

「香月の話、少しは薬になったみたいだな」

伊倉さんは重ねて詫びながら頭を垂れている。シュウは目線だけ
を私に投げてよこして、

「つまりこいつも、沖永佑と似たような境遇にいたってわけだ」

全てを見越していた様子で口角をあげた。

「お兄ちゃんと同じ？ どういうこと」

「地元で待ってる『彼女』が、バックラッシュを起こしかけてる。
そうたる、伊倉」

「……ああ」

「オレを脅して、自分とのひもを切ってもらうつもりだったんだろ」
「……そうだ」

「どうして協会に相談しなかった？」

私でさえ思いつくような尤もらしい問いに、伊倉さんは「一般人
なんだ」と答える。

「治療を受けるには協会に属しなければならない。迷ったけど、今
回はそれを施設まで頼みに行ったんだ。だけど、ソフィの死に顔を
見たら、やっぱり、あんなところに所属させるなんて駄目だと」

それで彼は事件を境に人が変わったようになってしまったのか。

「だから君がシザーであることに気づいて、うまく事が運べば、協会に無断でひもを切断してもらえるんじゃないかって都合の良いことを考えてしまった」

「切断って、そんなに軽く言っんじゃないよ。無断で切りや罰則が科せられる。最悪本部に幽閉だぞ」

「でも命がかかってるんだ、僕だって必死だった！」

「それでもだ。とくにひもなんて、一度切れたら終わりなんだ。取り返しがつかねえんだよ」

やるせない声でシウウが呟く。おぼつかなく視線をさまよわせる伊倉さん。

「……わかってる。いや、わかっていなかった、のか」

唇から流れ出るのは、迷いだ。

「僕がしようとしていることは、僕にとって正しいけど、彼女にとってはい——」

消え入りそうな響きは、画面上で紫に色づく。

「香月さんの話を聞いていたら、ますますわからなくなった」
「伊倉さん……」

インディゴブルーが瞼の裏に蘇ってくるようだった。この変化もまた私が与えたものなのだろうか、不思議な気持ちになる。

「すまなかつた。君達には詫びる。副会長への無礼も、どうか許して欲しい。だから審判は―― 僕と彼女のひもは、切らないでもらえないか……」

彼が口に出したことで、私は忘れかけていたそれを一気に思い出した。食堂で伊倉さんが鎮圧された直後、シュウが言っていたことを。

『理由はどうあれ、日本支部の会長を人質に取ったんだ。裁かれることになる。最悪の場合、おまえのひもを全部切断することになるからな。覚悟しておけよ』

土下座をする伊倉さんを見下ろす、シュウの顔は物憂げだ。その視線に温度は感じられない。

「シュウ、あの」

許してあげて、と言うつもりだった。あの場に居合わせていた者が全員口を噤んでさえいれば、見逃すことも可能なのではないかと思っただけだ。

だって、残酷すぎる。

縁……人間関係がそう単純なものでないことは、ここ数週間のあいだに嫌というほど実感した。それは彼が少しずつ積み重ねるように築いてきたはずで、他人が簡単に奪えるものじゃあない。

それに、残酷なのは伊倉さんにとってだけでなくシュウにとっても同じなのだと思う。彼の事情を考えれば、切断だなんて進んでほしいはずがない。

しかしシュウは私を眇め、

「残念だが、今回のことはすでに本部に報告が上がっちゃった。切断、しないわけにはいかねえんだよ」

言つと同時に伊倉さんの頭上へ左手を翳し、その腕に交差させるようにして右手をかまえた。

「でも！」

「同情するな香月。もともと、頭を下げた程度で許される罪なんてそうそうないんだよ」

鋭い刃こそ見えなくても、一太刀で部屋中のものを一刀両断しうるほどの威圧感がある。

「協会規定第三条二十九項に基づき、シザーの名を以て汝の罪を裁く。これより、ひもの即時切断を実行する」
「待つて！」

だめ！

しかし止めに入ろうとしたときすでに、シュウの右手は空を裂いていた。抵抗があるのか、わずかに動きを止めたあと力を込めて振り切った腕は、刃というより鎌のようだった。

音はなかった。私には、確かめる術もなかった。

しかし惨い行為を目の当たりにしたように加賀見さんと翠川先生は眉をしかめ、苦々しい顔で背を向けたシュウを見るに、ひものが断たれたことは確実だった。

収まっただけの涙が再び込み上げてくる。

ひととひとの繋がりがって、こんなに簡単に切れてしまうものなの？ お兄ちゃんと私の繋がりも、こんなに脆いものだったの。そんな疑問が、浮かんでは消えた。

こうして――

直後、部屋にやってきたユーヤさんのひもも同様に、シュウの手によって一刀両断にされ、一件は一応の決着をみたのだった。

「ひもの断片は報告書とともに本部に保管されるから、そのつもりでいてくれ」

シュウの右手は、私に見えない何かを掬っては白い布切れに乗せる。そうして、それを無造作に折り畳んだあと加賀見さんに放つて渡した。

「どうせ見せしめに使っただろ。趣味悪い」

とは、不服そうにしているユーヤさんの文句。伊倉さんは両手で顔を覆う。絶望を負った彼の背の、丸みはひたすら悲しい。

「……否定はしねえよ」

答えたシュウは、どこか悄然としていた。

罰則なくして集団は形を為さない。悲しいけれど、それが現実なのだと思う。

学校なんていい例だ。スカートの丈から靴下の色まで事細かに基準が設けられていて、違反すれば工場の品質管理のごとく弾かれる。

「で、だ。こっから先は俺の独り言」

シュウが気を取り直したように言ったので、私は残っていた涙を指の腹で拭った。

何故だろう、彼はいつの間にか表情を切り替え、場違いなほどいたずらな笑みを浮かべている。

「切断したひもは通常、二度と元に戻らない。けどもう一度復活させる裏技がないとも限らない」

そうして、人差し指で示したのは――。

「わ、私っ？」

「そう。出来るだろ、おまえの声なら」

焦って首をぶんぶん振った。唐突すぎる。

「そ、そんなこと突然言われても。規定だってあるんでしょ」

「ああ。協会に無断でひもを結ぶ、切断する、は罰則付きで禁止」

「なら、私の声も駄目なんじゃ」

「ま、そう言いたいところなんだが――『生成するな』と明確に制限する規定はないんだよな、これが」

「え」

「香月の力には前例がないからさ、例外だよ例外」

したり顔で笑うシュウは、想像以上に計算高い人間なのかもしれない。なかった。

「自分を見つめ直して、罪を悔い改めて、もう一度やり直したいと思えたならそのときは、香月に頭を下げて頼むんだな」

犯人扱いしたことも合わせて謝れ、と尊大に言い放つ低い声は、パソコン画面で紺碧を生む。そのせいか、彼はとても気高いひとのように見えた。

満足そうに微笑む加賀見さんを見るに、すべて示し合わせてあったことなのだろう。

人が悪い。先に言ってくれたら良かったのに。

崩れ落ちるように泣きだした伊倉さんの横でユーヤさんは呆れたように笑って、おひとよし、と呟いた。

「知らねえぞ、あとで本部に指摘されても」

「罰せられはしねえだろ。香月の力に合わせて協会の規定が改訂される前なら」

「悔い改めるにもタイムリミットがあるってことか」

「まあな。つつかもともと、タイムリミットのないものなんてねえじゃん」

「……言えてる。おまえ、たまにはいいこと言うな」

「オレもそう思った」

カップに満たされた、冷め切ったレモンティー。表面に移り込む太陽に目を細め、景色がこんなに鮮やかに見えるのは久しぶりだなと思った。

当たり前のことなのに、ときどき忘れてしまう。どんなに濁った色でも、それは光が見せてくれているものなのだということを。

「捺南ちゃん、これ」

ぱたぱたとスリッパを鳴らしながら現れたおばさまが、封筒の束を私に差し出す。

「移植コーディネーターさんから受け取ったの。良かったら見てあげて、佑の命の、その先を」

「……その先？」

「ええ。佑はね、今でもちゃんと生きているのよ」

受け取ると、封筒にはどれも、彼から臓器を受け取った人達からの感謝の手紙が詰まっていた。長年患っていた病が回復した若い女性、社会復帰に向けて資格試験の勉強を始めた男性……、どの手紙も生命力に溢れている。

「よかった」

良かった。そう、心から言えた。

パソコンの電源を落としながら、心の中でごめんなさいと呟いた。そうして同時に、彼がくれた今をもう二度とおろそかにはしないと誓った。

エピソード

沖永家の小さな門を出ようとすると、玄関ポーチの中ほどでフリル付きの日傘を開きながら加賀見さんが言った。

「飛行機雲だ」

その傘を迷惑そうに避け、シュウが空を見上げる。目を、眩しそうに細めながら。

「本当だ」

明日は雨かしら、と掌を翳すおばさまは一転の曇りもない笑顔だった。志津木さんは最後に玄関ドアを閉め、結露したみたいに濡れた額を拭う。遅れて天を仰いだ私は一年前、うつろに眺めたコバルトブルーを想う。そこに溶けた、真つ白な彼の残骸とともに。

煙になったら、人はどこへ行くのだろう。大気に混じり合い、新たな命を育むのだろうか。ならばそれは、生命の営みから逸脱したことはないのかもしれない。

そう思ったら、悲しみは穏やかな気持ちへと変わった。

私が何を思っているのか察したのだろう、加賀見さんは飛行機雲の消えかけたあたりを指し示して問うた。

「香月くん、あの青を何と呼ぶか知っているか」

「色の名前ですか？」

「そうだ。深い青に雲の白が重なって、浅くなっている部分の」

「あのへん、ですか」

「ああ、多分そのあたりだ」

指差し確認を試みたものの、本当に同じ場所を見ているかどうかは怪しい。そもそも、同じ世界が見えているかどうかなんて確かめようがないから、多少の誤差などあっても然るべきなのかもしれないけれど。

「青、ですよ。み、水色？」

「今時、水彩絵の具にもっとマシな色名がついているぞ」

「……すみません、色の名前には詳しくなくて」

「ならば教えてやろう」

また始まったよ、と呆れ顔の翠川先生はシユウと目を見合わせて苦笑い。他人の迷惑を顧みず、加賀見さんは愉快そうに日傘を回転させる。

「あれは、花の名前」

「花……」

「ああ。『フォーゲットミーノット』、勿忘草の色だ」

フォーゲットミーノット——。

仰ぐ空に、過ぎ去る初夏の余韻は見つからない。

炎天下の中ちいさくなっていく彼らを見送ると、背中から私の名を呼ぶ声がした。

振り返れば、みつつの人影。父、母、そして弟。

一年前と比べ身丈の比率に変化はあれど、それでも新鮮には思えなくて、ただ、ひたすらに懐かしい光景だった。

躊躇いながらも、ただいまと言った。

小風が遠くの鳴蝉を掻き消して過ぎる。世界は、
れていた。今日も光に彩ら

* 完 *

番外・ひとひら

久々に登校した朝、私の爪先は確かに痛かった。

原因は新しい革靴だ。

今朝家を出ようとして玄関で見つけたそれは、どうやら自分のためにそこに置かれたもののようだった。もちろん確認したわけではない。けれどサイズはもちろんのことデザインも地味な学生仕様だったし、丸みを帯びた形からして、若い女性向けであることは確かだった。

父も母も忙しい人だ。腰を落着けて話す暇がない。だから何かと—— こんな些細なことですら—— 確かめる機会がない。しかし、これまでずっとそうだったから慣れてしまったし、今後改善して欲しいかといえばそんなこともないのだけれど。

あの日、彼らは私の帰宅を待っていてくれたから。

不思議なことに、それだけでわだかまりは溶けて消えた。私は彼らときちんと繋がっているのだということが信じられた気がした。

脳は想像する。

そうして世界を補う。良くも、悪くも。どちらに傾くのかは自分と言うフィルター如何、けれど対象物ありきなのも確かだ。原因すらないのなら、最初から見ても感じるもないからだ。

靴下を脱ぐと、中指には見事な靴擦れが出来ていた。生徒手帳の中に常備している絆創膏を取り出し、貼付けながら耳を澄ませる。

ホームルームを待つ朝の教室は、静けさとは縁遠い。氾濫する音には喚き声も多く混じっていて、意味ある言葉を見事に掻き消している。それらはそこかしこで重なり合い、無造作に混色した絵の具

のように、濁った色を思わせた。

「カヅキちゃん、ひさしぶり！」

「病氣してたんだって？ 大丈夫？」

長く欠席していた私には少しの懐かしさを噛み締める間も与えられず、矢継ぎ早に質問が浴びせられた。靴下を履き直しながら、顔を上げる。足の爪が少し汚れていて恥ずかしかった。

「うん、大したことはないから。もう大丈夫」

「そう？ でも心配したんだよ。私たち、カヅキちゃんに頼ってばかりだったでしょ。お休みの間、そのことも実感したっていうか」
「そうそう。告白代行、毎日休む暇もなかったもんね」

口々にそんなことを言う女子達に囲まれて、目をしばたたく。これは野次馬だろうか。まさか私の友人なのだろうか。いや。しかし差し出されるノートやプリントの量を見るに、疑う余地はないようだった。

前向きに捉えるなら、縁結びの役をこなすことで積み上げて来たのは、何も実績ばかりではなかったということなのだろう。

決まりの悪さに愛想笑いでしか対処出来ずにいると、そのうちの数人が目を合わせて言いくそうに切り出した。

「でさ、ひとつだけ、聞いておきたいことがあるんだけどお」

「うん、あのね、カヅキちゃんとシユウのことなんだけどお」
「ふたり、同じ期間欠席してたでしょ。どうなのかなあって」

どうなのか、という問いこそどうなのか。確かに今日は珍しくシユウも朝から出席しているけれど、だからといって何なのか。眉をひそめた私に、前の席の渡辺さんが耳打ちしてくれる。ちょ

うど、入学式の日と同じように。

「あのね、凄い噂なの。シユウと捺南ちゃん、付き合ってるんじゃないかって」

「は……？ な、なんでそうなるの」

「一部の情報では、二人が熱海に婚前旅行とか」

昭和か。

どこから否定していくべきか一瞬迷った私の後頭部、ちょうど中央にぽこんと何かが当たった。振り返ると、文字がぼやけてどうにも見える位置に、丸められた国語の教科書。

そして、周囲は一気に黄色い悲鳴で満ちた。

「おい香月」

「シユウ！」

「きゃー！ 見つめ合ったー！」

「ええ？」

振り返っただけだが。

どうしてこう、同世代の女子は皆、手当り次第邪推して恋愛と結びつけたがるのだろう。理解出来ない。好意にだって種類はある。恋愛感情はその最高峰なのだと、私はそう思うけれど。

「あの、私とシユウはそういうのじゃなくて」

しかし必死の説明は誰の耳にも届かない。それどころか、シユウの次の台詞で私はいよいよ窮地に立たされることとなったのだった。

「香月、週末空いてるか」

「え？」

「頼みがある。オレの――― 家族に会って欲しい」

悲鳴、なんてものではなかった。天変地異が起こったのではと疑いたくなるような状況の中、私は思わず耳を塞いだ。

ひもを、とシュウの声が微かに聞こえたけれどもかまっている余裕など無かった。

言いたいことには察しがつく。幼い頃になくしてしまった家族との絆を、取り戻したいから協力しろということなのだろう。でも、出来れば場所とタイミングを考えて貰いたかった。

シュウの馬鹿。見直したことを後悔させないで欲しい。

下校する頃にはすっかり新妻というレッテルが貼られてしまった私に、悪びれもなく彼は言う。

「オレ達さ、コンビ組まねえ？」

「……メオトの噂が広まったからですか」

「いや、漫才じゃなくてさ。……つか香月、怒ってる？」

「機嫌が良さそうに見えるなら眼科に行く必要があると思います」

「待て、敬語が怖いぞ。あのな、シザーってのは通常、リーラーと二人一組で行動するんだ。それで事件に挑むんだよ。だからオレには香月が必要で」

いやです、ときっぱり言っただけで校門を出る。早足で進む私は、爪先の痛みをすっかり忘れてしまっていた。

自分のことですらよくわからなくなるのだから、それ以上のことをわかったつもりになるのは愚の骨頂というもの。

謎なんてもうごめんだ。どうせ全てを把握することなんて出来ないのだから、暴こうだなんて無駄な行為、最初から関わらないに限る。

そう思っていた私は数ヶ月後、不可抗力で新たな事件に挑まざるをえなくなるのだけれど、それはまた別の話。

今はまだ島国の、箱庭の中—— 　いつか芽吹く時を待つて。

太陽からの放射熱を日々、この身に、蓄積している。

f i n .

番外・ひとひら（後書き）

駄文

あとがき

リール&シザーズ、いくつかの謎を残しての1部完結です。

この話は個人的に、ミステリーらしいミステリーを書いてみたいという気持ちと、ファンタジー要素を取り入れてみたいという気持ちの狭間にあって出来上がったものです。

とはいえミステリーの種がファンタジーになつては興ざめだなと思ひ、逆にファンタジー要素をミステリーで紐解く形にしました。

不思議なことは好きです。不思議が暴かれていくのも好きです。

でも一番好きなのは永遠に解けない謎。

そんな意味で、自分の好きなものを形にできて楽しかったです。

モチーフというか、主題のようなものは、仏教的な思想から得ました。

私は無信心ですし特に宗教に思い入れがあるわけではないのですが、常々ブツダの思想家としての側面は素晴らしいなと感じていて

彼言うところの“色”^{しき}をそのまま“色”^{いろ}に置き換えて自分なりに解釈した結果、この話が生まれました。

自分と言つフィルターを通す以上、この世のものはすべてまやかし。

極端に言えばそういうことなのだと思います。個人的解釈ですが。

今回は大好きな森鷗外の某短編小説をモチーフに、ただいま作成中です。詳しいことはまた、あとがきで明らかにしたいと思います。

第二部は目次ページにリンクを設置していますので、お手数ですがそちらからお入り下さい。

タイトルは『ダウト&トラスト』、舞台はリール協会本部のあるフランスへと移ります。

策略、陰謀、暗号、そして異国の地を奔走する……、またもや私がお好きな要素、てんこもりです。

心苦しいのですが、しおり等はまた挟み直していただかねばなりません。ご面倒をおかけ致しますが、何卒ご容赦下さいませ。

ご読了に感謝して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6592h/>

リール&シザース

2011年8月30日14時58分発行